

289-St 2ㄅ



1200500732452



始



スターリン傳

2

布施勝治著

289  
57.2



燈下書院版

289  
852



布施勝治著

リン傳

燈下書院版





國立圖書館  
昭 24. 2. 16 和  
購入

## 序

ロシア革命は、本文の記者が長い間の外國特派員生活中に取扱つた最大事件の一つである。革命中、三月から十月にかけ、*「革命の都」* ベテルブルグにあつて、まのあたりにこの出來事を目撃した。革命のロシアに足を踏み入れること前後七回、新經濟政策、理論闘争、五ヶ年計畫、一國社會主義から國家主義への轉向等々、ソヴェート政治の重要變革の秋、いつもモスクワに居合せた。

この間終始一貫本文の記者の念願し努力し來つたことは、たゞ一つ嚴正な事實の報道にあつた。およそ新聞人は政黨政派に超越しなければならぬ。一黨一派に偏しては、どうしてもその批判なり報道なりが偏頗になつてしまふ。特に外國特派の新聞人は常に不偏不黨の立場において、事實の報道に精進すべきである……といふのが、本文記者の通信任務遂行上の終始變らぬ信條である。然るにこの信條を貫徹することは、決して容易のことではない。特にソ聯の如きイデオロギーを異にした國の通信を擔當した場合において然りである。本文の記者は、ソ聯間題を取扱うこと三十年、その間度々苦境に立つた。當時日本では往々にして私の事實の報道、

たとへば五ヶ年計畫の實現性に關する通信等に對して、色々壓迫の手が加はつた。私はこうした困難と戦ひつゝ、たゞソ聯の實狀を報道することに粉骨碎身、時には危険を冒して、挺身職責遂行に邁進した。訪ソ七回「赤いロシア」から白髪となつて歸つたなどと揶揄されたものである。

本著「スターリン傳」もまたこうした苦境を越えて不偏不黨の信條の下に、ありのままのスターリンを描出したものである。換言すればスターリンに對する嚴正な客觀的記録である。私  
が本書をものした理由は現下の世界情勢においてソ聯が如何ようにして建國されたかを一般の讀者に知らせる必要を感じたことにあるのであるが、それと同時にソ聯報道に一生を捧げた私として最後のモニュメントをつくつておきたからである。書き度いことは山ほどあるし意あまつて筆足らざる點が多々あるが、これに對する批判はあけて讀者諸賢の領分としたいのである。

著 者

## スターリン傳 目次

は し が き ..... 一

第一章 床 下 時 代 ..... 一

一、ヨシフ・ジウガシウィリ

二、コーバの豪膽振り

三、チフリスの大慘劇

四、脱走の名人

第二章 “革命の都”に歸りて ..... 三

一、クセシンスカヤ邸占據

二、ナデジダ・アリル・エワ

三、冬宮乗取り

第三章 レーニンの弟子 ..... 三

一、ブレスト・リトウフスタ

- 二、前線派
- 三、黨書記長の椅子
- 四、レーニン病む

第四章 レーニンの後釜狙つて……………三五

- 一、四十六人組事件
- 二、トロツキの爆弾論文
- 三、"三頭組"の底邊
- 四、漁夫の利

第五章 兩雄並び立たず……………四七

- 一、第三勢力
- 二、昨日の味方、今日の敵
- 三、雀ヶ丘のピクニック
- 四、理論闘争
- 五、スミルガ事件
- 六、大同團結の切崩し

第六章 政權を目指して……………六四

- 一、書記部の牙城に據る
- 二、アルマ・アタへ
- 三、右翼派彈壓
- 四、スターリン戰術

第七章 喬木風強し……………七五

- 一、キエフ暗殺事件
- 二、合同本部
- 三、併行作戰

第八章 トハチエフスキー事件……………八三

- 一、赤色ナポレオン
- 二、ツアリツイン兵團
- 三、戰略戰術委員會
- 四、ベーネシユの注進
- 五、右翼トロツキスト

第九章 肅清の旋風……………九六

- 一、赤色軍の大手入
- 二、外交陣撫で斬り

第十章 亡命のトロツキー…………… 一九

- 一、査證をもたぬ惑星
- 二、オスロ
- 三、ゴイオアカン

第十一章 ゲ・ペ・ウ…………… 二八

- 一、ルビヤンカの主人公
- 二、旅費を稼ぐ
- 三、密告戦術にのせられる
- 四、曇りから晴れへ

第十二章 五ヶ年計畫…………… 二六

- 一、一國社會主義
- 二、第一次計畫
- 三、興味點二つ

四、富農と闘ふ

第十三章 よりよく、より楽しく…………… 三四

- 一、ゴリキー歸る
- 二、人間尊重論
- 三、裕福なる生活へ
- 四、スターリン憲法
- 五、肅清より對戰體制へ

第十四章 外交四度の轉換…………… 三五

- 一、二元外交
- 二、一國社會主義を基調として
- 三、ラデツクの「敵の敵利用論」
- 四、獨ソ不可侵條約
- 五、日ソ中立條約
- 六、亂れ飛ぶ病氣説

第十五章 マルキシズムの修正…………… 三七



- 一、廻れ 右!
- 二、鳴物入りの政策轉換
- 三、歴史の再検討
- 四、レーニンからピョートルへ

第十六章 樂屋裏から舞臺へ…………… 一八〇

- 一、誤算 二つ
- 二、スターリン線敗れたり
- 三、祖國危ふし

第十七章 スターリン訪問記…………… 一八九

- 一、唯物史觀の原則修正
- 二、"赤くない外國人には會はぬ"
- 三、インタヴューに成功す
- 四、個性をかくす人

第十八章 戦時體制へ…………… 一九六

- 一、ロシアへ還元

- 二、汎スラヴ運動再燃
- 三、宗教の復活
- 四、戦時民心策色々

第十九章 民族政策の逆轉…………… 二〇五

- 一、資本主義の"背面攻撃"
- 二、東洋共産大學名譽總長
- 三、民族自決主義から發足
- 四、民族リーダー一網打盡
- 五、ドミトロフの登場

第二十章 中國革命の指導…………… 二一六

- 一、ブハーリン踊る
- 二、十二月決議
- 三、スターリンと蔣介石

第二十一章 スターリンを圍繞するもの…………… 二二六

- 一、上層組 モーロトフ、カガノウイチ、ウオロシロフ

- 二、中層組 ジュダノフ、アンドレーエフ、ミコヤン
- 三、若手どころ マレンコフ、ベリア、ウォズネセンスキー、ブル  
ガーニン

第二十一章 戦争指導 ..... 二五二

- 一、戦時内閣
- 二、トハチエフスキー作戦
- 三、敵地に敵を撃つ
- 四、ウクライナからウラルへ
- 五、ソ聯式愛國心
- 六、バルチザン讚美

第二十三章 勝利への轉換 ..... 二六六

- 一、小説「前線」
- 二、赤色ヴェルダン
- 三、スターリン反攻
- 四、第二戦線の結成
- 五、モスクワの祝砲

第二十四章 世界を舞臺に ..... 二八一

- 一、テヘランとヤルタ
- 二、鐵のカーテン
- 三、コミンフォルム
- 四、「冷い戦争」

## 第一章 床下時代



ジウガシウイリ

金もまたアジリ人なサ、これスターリンが本文の記者に語つた最初の挨拶の言葉である。  
スターリンはヨーロッパに生れた。ジョルジア民族といへば、総人口僅かに二百萬  
しかない少数民族である。こうした少数民族から身をおこしたスターリンが、一億五千萬の斯拉ヴ  
民族、否、大勝後は衛星國の諸民族を併せて二億萬人の支配者となつたことは、何としても世界的  
大奇蹟であるといなければならぬ。

、ジョルジアの首都テフリスを距る六十餘キロにあるゴーリといふ小さな町の靴直し工の家庭に、  
今から恰度七十年前、ヨシフ・ウイツサリオノウイツチ・ジウガシウイリが呱呱の聲をあげた。  
ジウガシウイリはスターリンの本名である。スターリンといふ名は、彼が長じて社會民主黨に入つ  
た後、レーニンからつけてもらつた露譯名である。ジウガシはジョルジア語で、鋼鐵を意味する。  
それを露譯して、スターリンと呼んだわけである。

ヨシフ・ジウガシウイリはその幼少時、小學校を卒へてから、母の切なる希望で、テフリスの正

教學校に入つた。後日宗教打破をモットーの一つとする共産黨の首領ともならうといふスターリンが、正教學校の校門をくぐつたといふのも皮肉なことである。たゞしチフリス宗教學校に入つたジウガシウイリは、間もなく途中で退學を餘儀なくされた。一説によれば革命運動参加のかどで、追放されたのだといひ、他の一説によれば、家庭の事情、即ち學費がつかなくなつたのだといふ。後説は彼の母が自ら肯定してゐるところで、恐らくそれが事實であつたらう。

チフリス正教學校を退學してから間もなく、ヨシフ・ジウガシウイリは革命人としてのスタートを切つた。少年ジウガシウイリは學校への通學のかはりに、同郷の先輩の門を叩き、過激思想・革命思想の傳授を受けた。

由來コーカサスは革命思想の温床地として知られ、帝政末期幾多知名の革命志士を輩出した。コーカサスはジョルジア、アルメニア等々の少数民族の雜居地である。是等少数民族が、帝政時代、その強烈なる壓制下にあつたことはいふまでもない。そして被壓制民族の中に、革命思想が横溢し、革命志士が續々輩出したのも當然のことであつた。ロマノフ王朝の末期に名をあげたチベリゼ、ゲヂチコリー、ツユレテリ、テヘンクリー等々みなジョルジア民族出身であり、スターリンまた然りである。

場所は革命思想の温床地、民族は帝政時代の被壓制少数民族といふ環境の中に、幾多革命の先輩を師として生ひ立つたヨシフ・ジウガシウイリは、若くして早くも徹底した職業革命人となり得た。

わけである。一八九八年ヨシフ・ジウガシウイリは社會民主黨コーカサス支部に入黨した。入黨の際紹介役に當つたのが後日クレムリン宮殿陰謀の巨魁としてスターリン打倒を企て、ゲ・ベ・ウに捕へられて銃殺されたエヌキーゼであつたといふ。若き黨首ジウガシウイリは、理論方面の研學よりも實際運動の方面に没頭し、日夜多忙を極めた。當時同志の間に、彼はコーバといふ匿名で知られた。コーバは大膽なる直接行動の急先鋒で、コーカサス官邊をして、常に手を焼かせてゐた。コーバの武勇傳、早業、大立廻りについては、幾多の挿話が傳はつてゐる。その中でも彼の大膽振り、神經の太さを、最もよくあらはしてゐるのが、グリュズーノフ將軍暗殺事件である。

## 二 コーバの豪膽ぶり

二十世紀の初頭チフリスの軍務知事に、グリュズーノフ將軍が任命された。將軍は極端な保守主義で、且つ強烈な壓制政治家であつた。將軍の就任以來、チフリス一帯、あらゆる左翼運動は、一齊に鐵の彈壓下に抑へられてしまつた。將軍の知事在任中は、グーの音も出せなくなつた社會民主黨は、ある夜秘かにチフリス支部會を開き、グリュズーノフ軍務知事暗殺の決議をなした。決議の次ぎに提案されたのは、誰が暗殺の任に當るべきかといふ問題であつた。こうした場合の慣例として抽籤で決することとなつたが、さて抽籤の結果、籤をひきあてたのが、年少の黨員ジャバラゼである。名譽の籤をひきあてた……實は必死の任務をひきうけたのであるが……ジャバラゼに滿

場拍手を送つた。やがて拍手が終ると、室の一隅から、發言を求めるものがある。それはコーバであつた。みな一齊にコーバに視線をあつめて、その發言に耳を聳立てた。コーバ曰く「グリヤズーノフ將軍暗殺の使命に、ジャバラエが當ることになつたことは、同慶に堪えない。しかしこの事はわが黨の死活に關する重大事である。ジャバラエはまだ年が若い。萬一やり損ねるようなことがあつたら、大變である。もう一人ジャバラエの補助役を選任する必要がある。そしてその補助役には、不肖コーバを擧げてもらいたい……」満場は再び拍手してコーバに「ジャバラエの補助役」を委託した。

時の軍務知事の暗殺に當るといふことは、いふまでもなく死地に飛びこむことである。こうした危険な任務の補助役を、自ら進んでひき受けたコーバは、同志の間にいよ／＼畏敬の的となつたことはいふまでもない。

ある日の朝早く、軍務知事官邸の前の廣場に、二人の職工風の男があらはれた。二人とも工具らしいものを容れた袋をかついでゐた。これから職場に行く……といった様子に見へた。午前六時、官邸の鐵門が開く。いつもの日課の朝の散歩のため、グリヤズーノフ將軍は徒歩で悠々廣場に出て来る。職工風の二人のそばへ近づいた途端、二人の男は、工員袋から取り出した丸いものを、將軍めがけて投げつける。轟然丸いものが爆發する。あたりは煙をもつて埋められる……煙の中から一人の男が飛び出した。彼はアレクサンドル公園の方に向つて駈け出した。下手人の一人ジャバラエ

ゼが必死となつて逃げ出したのである。憲兵の一隊が爆發の音に驚ろき、スワこそ一大事と現場に駈けつけた。逃げて行くものこそ犯人なれと、數名の憲兵はジャバラエを追つかける。アレクサンドル公園の鐵柵を飛び越えようとしてゐるところを早くも抑へつけてしまつた。

現場ではやがて煙がおさまる。そこには爆發に打たれて倒れたグリヤズーノフ將軍が横たはつてゐる。手や足がもぎ取られて四散してゐる。そこにいま一人の職工風の男が立ちとゞまつて「恐ろしい事をやつたものだ……」と獨り呟やき乍ら、グリヤズーノフ將軍の血まみれになつた遺骸に見入つてゐる。駈けつけた憲兵は勿論この職工風の男を通行人としか考へなかつた。下手人の一人が悠然現場に残つてゐようとは、誰しも思はぬ。下手人は今しがたアレクサンドル公園めがけて逃げ出した奴に違ひない。現場に残つた今一人の男コーバにはたゞ「見物許さぬ、直ぐそこを立退けッ」と叱り飛ばすのみである。コーバは悠々廣場から、町の方へ歩を運んだ……たつたいま爆發投付の大慘劇を演じた現場に、一人悠然として居残り、自ら手を下して暗殺した相手の遺骸を、驚いたような風をして見入り、通行人、見物人を装ふ……これは普通人の出来ることであらうか。

捕へられたジャバラエは、その翌日死刑に處せられた。しかし補助役のコーバは何の嫌疑を受けることもなく、平然としていつもの床下運動を續けた。

### 三 チフリスの大惨劇

これもコーカサスの都チフリスにおけるある日の出来事である。たゞし今度はコーカサス太守官邸前の廣場が舞臺となつた。

時は一九〇七年のこと、いへば、コーバが二十九歳、もう己にロシア社會民主黨内、大膽不敵な闘士として、その名を知られ出した頃である。

日露戦争の末年、ロシア各地を風靡し、相當激しく國內を騒がせた革命の旋風も、戦争の終結とともにすつかり抑へつけられてしまつた。ストルイビンがウイツテ伯に代つて内閣議長の職について以來、左翼運動の弾壓は日に日に厳しくなつて來た。一九〇七年に至つて各派革命黨はいよゝゝ氣息奄々、やがて黨の運動資金が底を叩く。からつぽになつてしまふ。特に社會民主黨ボリシエウイキー派の窮乏甚だしく、レーニン始め弱り抜いてゐた……恰もその頃のこと、突如白晝チフリスの大惨劇が演ぜられた。

六月十三日午前十時半、國立銀行チフリス支店の、會計吏クルヂウモフ及びゴロウアニアがベテルブルグから送られて來た巨額の公金を受取り、コザツク兵の警護の下に馬車にのつて支店へ歸つて行く途中、市の中央コーカサス太守官邸の前にさしかゝり、先頭のコザツク兵がエリワンスカヤ廣場から、ソロダンスカヤ街に迂回しようとした途端、街角に立つスンバートフ公邸の屋上から、馬車を目掛けて、大きなダイナマイトが打ち投げられた……と見るより早く轟然爆發……一キロ四方にわたつて、あらゆる家屋の窓硝子が粉微塵に碎け飛ぶといふ物凄さ。これと同時に一方の人道から、同じくコザツク兵目掛けて數個の爆彈が投げられる。同時にピストルの亂射が始まる。人通りの多いエリワンスカヤ廣場は、一瞬にして混亂、パニック修羅場と化してしまつた。

馬車に乗つてゐた會計吏二人は、最初の爆彈破裂の際に馬車からはね飛ばされて即死を遂げたが不思議にも三頭の馬は傷つかず、公金を乗せたまま車をひきながら街路をまつしぐらに狂奔疾驅する。そこへ廣場の向ふ側に一人の背丈けの高い男が、通行人のやうな風をしてゐたのが、突然疾驅する馬にかけより、また一つ大きな爆彈を投げつけた。爆發とともに黒い煙が附近を掩ふ。馬車が見えなくなる。その時どこからあらはれたか、一人の士官の軍服をつけた壯漢が見るからたくましい駿馬にうちのり、煙の中に炎えつゝ疾驅する馬車にかけつけ車臺の中から何ものかをつかみ出した……と見るより早く悍馬に鞭打ち、あたりかまはずピストルを四方に亂射しながら雲か霞か、街の一角に向つて疾走、いつの間にか姿をかくしてしまつた。

エリワンスカヤの惨劇で死傷者五十名、コーカサスの首府チフリス市は、かくして、恐怖と戦慄の都と化したことはいふまでもなく、この事件は實に全露にわたつて恐ろしい衝動を興へ、流石の鐵腕宰相ストルイビンも太い神経筋をビクリと動かし、コーカサスには手ごはい奴がゐるわいと、いつて嘆息したとのことである。かうした命がけの大冒険で巨額の資金を手にしたスターリンは、

黨を危急存亡の難局から救つた。意氣鎮沈のレーニン等もおかげで蘇生の思ひをしたのである。

以上のチフリリス爆弾事件といひ、グリヤズノフ暗殺事件といひ、いづれもその真相は公表されていないが、黨の内外に知る人ぞ知る事實とされてをり、事件の中心人物スターリンがその壯年時代、如何に強烈な主義者、生命知らずの闘士であつたかを偲ばせると同時に、如何なる難關にぶつつかつてもビクともせぬ個性の強さこそ、今日のスターリンにふさわしい挿話といへるだらう。

在野時代、床下時代のロシア各派革命黨にはモスクワあたりの大資本家が随分思ひ切つた多額の資金を與へたものである。ロシアの資本家の中にはツアアの獨裁政治に反感を持つてゐたものが少くなかつた。自由思想に相當深く心酔したのもあつたらしい。その外にもう一つ資本家をして左翼運動に財政的援助の手を差しよせさせた動機がある。即ちそれは世が變り革命が成功した場合にも、何とか存在を続けようといふにあつて、いはゆる「防弾チョッキ」の意味で、相當多額の資金を出したものがあつた。しかしそうした革命黨の財源も、前記の如く日露戦争後革命の旋風がおさまり、ストルイビン鐵腕宰相の時代となつて、彼の睨みがこうした左傾資本家にも利き出して以來、バタリと閉塞されてしまつた。

運動資金が缺乏を告げた場合、ロシアの革命黨はいつも二つの金策のいづれかを講ずるを常とした。一つは紙幣の偽造で、今一つは敵の糧を奪取することである。紙幣の偽造には技術的準備が必要で急の場合には間に合はぬ。一九〇七年の春から夏にかけボリシエウイキーの財政は急を告げた。

黨の中央部からコーカサス支部へ密電が飛んだ。コーバの奮起を促して來たのである。

この危急存亡の秋に當り、スターリンの黨に對する功績は甚大なるものがあつたと同時に生命知らずの闘士、強き個性の持主として黨内廣く知られるやうになつた。たとひ公式の履歷には載つてゐないにせよ、黨員としての出世の最大要因をなしたことはいふまでもなく、スターリン自身も後日親しい同志、家の子郎黨の集りなどで、時に得意さうにも語つて聞かせるさうである。

#### 四 脱走の名人

ソ聯コンミニュニスト年鑑に、スターリンの略傳が載つてゐる。その大要は次ぎの如くである。

ヨシフ・ウイツサリオノキツチ・スターリンは一八七九年高加索チフリス州の一農家に生れ、一八九二年中學校に入學、十七歳の時から生徒間の革命團に加はり、早くもその牛耳を握つたが一八九八年の春危険人物として中學校を追はれた。同年夏チフリスにおける社會民主黨團に入り一九〇一年年末家宅搜索を受け、パツーム市に移住を命ぜられた。同地で社會民主黨の首領カンデツキー等と相識り、共にコーカサスにおける初めてのマルキシストの秘密結社を創設した。一九〇二年パツームの同盟罷業に參劃したかどで逮捕されたが、直ちに脱獄し、同年同市における示威運動の指導に當り、捕へられて同年末から一九〇三年へかけ、クータイス及びパツームの牢獄に收監され、更らに東部西伯利亞へ三年間の流刑に處せられた。間もなく西伯利亞から逃げ出し

再び床下運動に舞戻つて東奔西走一九〇八年にはバクト革命委員会の指導者となつたが、事發覺して逮捕され、ウオログダ州で三年間の流刑に服刑中、一九〇九年バクトに逃げ、再び革命運動に戻つたが、引きつゞいて逮捕され、六年間の流刑に處せられた。然し翌年早くも逃げ出してベテルブルグにあらはれ、間もなく逮捕されて三年間流刑の判決を受けたが、またしても一九一一年末刑地を逃げ出した。その後間もなく逮捕され、一九一二年の四月、ナルイムに流され、九月再びベテルブルグに逃げ歸つた。しかし一九一三年三月には、又々逮捕されて、北極のクレイカに流され、一九一七年の三月革命までそこにゐた。三月革命後ベテルブルグへ歸るや、共産黨機關紙「ブラウダ」のラボーチー・イ・ソルダート、ラボーチー・ブーチ等の主筆となり、一九一九年から一九二〇年にかけて、ソヴェート内閣に入つて民族人民委員となり、一九二〇年から一九二三年まで革命軍事最高會議員を兼ね戦功により赤旗章を授けられ、一九二二年以來全聯邦共産黨の書記長である……

以上はコンミュニスト年鑑所載の公式履歴に過ぎないが、しかしこの公式履歴にあらはれたところだけを以てしても、スターリンの前半生が如何に烈しい逮捕、投獄、脱走の連続であつたかを窺ふに足るのである。

スターリンは帝政時代の警官や、憲兵に捕えられた場合、いつも訊問に對しては沈黙、拷問その他の暴行に對してはあくまで陰忍頑張りで押し通したことも有名であつた。

ある時同志十數名とともに一網打盡憲兵の手に捕えられた。憲兵士官は逮捕された「不逞者」を一行に立たせ、その前に一小隊の憲兵を集めた。やがて憲兵は各自大きな棍棒をもつて「不逞者」の前を、一人一人がその棍棒をもつて「不逞者」を毆打し乍ら行進する……一小隊全部が毆打し終らぬ中に、みな倒れてしまつたが、一人だけ最後まで起ち通し、一小隊の憲兵の棍棒の毆打を殘らず受けたものがあつた。それはコーバ事ジウガシウイリであつた。憲兵士官も舌を卷いたといふ話である。

在野時代のスターリン、即ち床下をくぐつて種々の潜行運動をやつてゐた當時のスターリンは、行動の大膽さ、冒険振りにおいて、恐らく同志中他にその比を見ないといつても過言でなかつたらう。ポリシエウイキーにとつては黨員としての閱歴が、何より大切である。その入黨が古く且つ帝政時代、當局に色々と御厄介を多くかけたものほど、黨内に重きをなし出世が早い。かうした閱歴において、スターリンはたしかに黨内の第一人者であつたといふべく、この點常に外國に亡命してゐたトロツキー、ジノウイェフ、カーメネフ等の遠く及ばぬところである。

スターリンは一九〇二年から一九一三年までの間に、六回投獄もしくは流刑に處せられたが、その中五回迄巧みに脱走した。スターリンは「脱獄脱走の名人」として知られた。しかし最後に一九一三年三月逮捕されて北極のクレイカに流されてから、間もなく歐洲第一次大戰が始まつた。戦争中脱走することは却て拘束される危険がある。「今度捕へられると徴兵されると、徴兵されては革命



運動が出来なくなる。戦時はおとなしく流刑地に休養するに如かずといふところで、一九一七年三月革命勃発の時まで、辛棒強く、同囚スウエルドローフ等とともに、クレイカに配所の月を眺めてゐたのであつた。

## 第二章 革命の都に歸りて

### 一 クセシンスカヤ邸占據

一九一七年春、パン屋の前の行列から火がついて勃発した三月革命は、また、く間にロシアの全土に波及し、帝政政府は朽ちた大木の如く、もろくも倒れた。『三月革命成る！』の報を手にして足かけ五年間北極はクレイカの寒村にくすぶつてゐたスターリン、スウエルドローフ等昨日迄の流刑人も、今日天下晴れての革命の闘士として、大手をふつて『革命の都』ペテルブルグへ乗り込んだ。當時黨首レーニンは亡命先の瑞西からまだ歸つて來ない。大戦勃発以來ボリシエウイキーに接近して來たトロツキーも、米國からの歸途途中で抑へられ、立往生中である。三月革命のさ中にペテルブルグでボリシエウイキーの旗を擧げたのは、スターリン、スウエルドローフ、カーメネフ、モーロトフ等々であつた。彼等はトロイツキー橋畔ネワ河に面して建つニコライ二世の愛妓クセシンスカヤ邸を占據して、先づそこに赤旗をおしたてた。そして機關紙ブラウダの刊行を始めたが、その編輯長となつたのが、スターリンである。黨首がゐないので、政策が決定しない。しかし長い間の流刑から歸つて來たスターリン等の鼻息はとても荒い。立憲民主黨のミリエコーフや、社會革

命黨のケレンスキー、同じ社会民主黨とはいつても、肌合はないメンシエウイキーのチヘーゼやツエレテリリ等に向ふに廻し、ブルジョアの手代、革命の裏切者、と罵倒し、ツァーに引續いて彼等も併せて倒さねばやまないといつた勢を示した。



(レニソ)

ぶりをしてゐた。それに、理論よりも實行！といふのが、ボリシエウイキーの本領である。その過激振りは、四隣をゆすぶる勢ひであつた。その中にレーニンがジノウイエフ等部下三十餘名を随へ、いはゆる「封印された汽車」で敵國ド

イツを通過し、ペテルブルグへ凱旋將軍の如く歸つて來た。ペテルブルグへ着くや、四月テーゼなるものを公表したが、それは、時の臨時政府をあたまつからこきおろし、ツァーを倒した勢に乗じて、ブルジョアをも打倒せよ、眞の革命はこれからだ！といふのであつたからツァ大變だ。レーニンの「四月テーゼ」は當時としては突拍子もない過激なものであつたが、しかしあゝした混亂の秋、特に長い間の戦争に疲れ切つた國民にとつては、何かしら耳新らしく聞こえ、過激標語の中には、往々にして民心に投ずるものがあつた。ボリシエウイキーの「赤い手」はやがて廣いロシアの全土をかき廻し、革命のロシアは國をあげて、混亂の坩堝に投げ込まれた。

こうした混亂の紛局に當つて、最も重要な役目をわりあてられたのは、宣傳と煽動の機關たる黨の機關紙ブラウダの編輯者でなければならぬ。編輯長スターリンの配下には、モーロトフといふ年は若い、頑張り強い助手がゐた。スターリンとモーロトフとの共同編輯でつくられ、毎朝市内にバラ撒かれた小型の赤新聞ブラウダは、全紙面をあげて、恐ろしい過激文章を満載した。

一九一七年の革命當時、本文の記者は、革命の都ペテルブルグにゐた。しかも私の住居の附近がボリシエウイキーの根城であつた。前記のクセシンスカヤ邸も、トロツキーやコロンタイなどが連日連夜、赤い氣焰をあげたモデルンサーカスなども、直ぐそばであつた。それでボリシエウイキーの機關紙ブラウダは初號から一部缺かさず手に入れ、三月革命から十月革命までの最も興味深いロシア革命最高潮時のブラウダ紙を取揃え、日本へ持ち歸つた。ロシア革命史の研究上、またスター

リン研究上、重要な資料として特別大切に保存してゐたのであるが、一九四四年五月廿六日の戦災で全部焼失した。まことに惜しいことをしたものである。

## 二 ナデジダ・アイルーエワ

一九一七年六月、ケレンスキー内閣は、英佛の切なる要請に應じ、前線の將軍に、攻勢轉換の命令を下した。將軍は一齊に、ブルシロフ大將の指揮下に、大反攻に轉じた。しかしこの作戦は、獨軍の手強い抵抗、ついで激しい逆襲におつかつて、もろくも大敗に終つた。この敗戦で、ケレンスキーは國民の輿望を失ひ、臨時政府は動搖を始めた。この「好機」逸すべからずとして、ボリシエウイキーは、市内の労働者を街頭にくり出し、ケレンスキー内閣打倒の大々的示威運動をおこした。これがそも／＼十月革命の前奏曲ともいふべき有名な「七月騒亂」である。當時本文の記者はこの騒亂の際、これは大變な事になつたわいと見物かた／＼街頭行進の一隊についてネフスキーに出で、政府軍の射撃に遭ひ、九死に一生を得た。當時なるほどケレンスキー政府の腰は浮いてゐた。しかしそれでもなほ警察の全部と軍隊の一部、政府に忠誠な部隊をベテルブルグの周邊に集めてゐたのに對し、その頃のボリシエウイキーはまだ組織立つた武力を持たなかつた。果然「七月騒亂」は、文字通りの「騒亂」に終り、ケレンスキーによつて手厳しく彈壓された。即日レーニン、ジノウイエフ、トロツキー、カメネフ等の逮捕令が出た。そして後二者は直ちに逮捕された。

が前二者は素早く姿をかくした。レーニンとジノウイエフに對しては「封印列車」で敵國ドイツを経由して歸つて來たといふことから「獨探だ」との宣傳が相當廣く行き渡つてゐたので、捕つたらどんな暴行を加へられるかわからぬ。そこで逃げるに如かずと考へたらしい。

一九一七年「七月騒亂」惨敗の直後、御大レーニンの用心棒を承はつたのが「潜行運動の名人」スターリンである。そしてスターリンが先づ最初にレーニンを連れて來てかくしたのが、當時本文の記者の住んでゐたアパートの一軒おいて隣りのビル内、スターリンの同郷人で、アイルーエフといふ兄妹の小さいな住居であつた。アイルーエフの兄の方が、その頃二十五、六歳、妹のナデジダが、十九か二十であつた。そして兄は眉目秀麗の青年、妹はまことに容姿艶麗の美人であつた。何しろその邊はロシア人ばかり住んでゐたところに、髪の毛も黒いジョルヂア人、しかも兄妹揃つて、美しい二人が住んでゐたのであるから、目立つて見へた。隣組として知り合つた本文の記者の記憶にも印象があり／＼と残つてゐる。

アイルーエフ兄妹のアパートへ、先づレーニンを連れ込み、そこでスターリンは得意の變裝術を揮ひ、顔に化粧をする。造り髯をつける。ムジーク（農民）服を着せる。すつかり農夫姿にしあげたレーニンを、より安全なところへ、フィンランドへ連れて行き、ソ芬國境を流れる名もやさしいセストラ（妹）河の畔にある小さいな葎草小屋の中にかくした。

あゝした危険の場合、レーニンがわれとわが身を、スターリンに委ねたことからしても、レーニ

ンが如何にスターリンを信頼し、また如何にスターリンがレーニンに忠誠であつたかを窺ふことが出来よう。

それはさておき、レーニンをフィンランドの國境にかくして、ペテルブルグに歸つて来たスターリンは、七月騒亂の惨敗後の捲土重來策で、晝夜兼行の多忙に没頭してゐた。しかしそうした多忙中の一閑をぬすんで、彼が時々やつて来たのが、アリルエフ兄妹のアバート、即ち本文の記者の住居の一軒おいて隣の家であつた。當時のスターリンは、革命黨一方の旗頭——とはいつても、ボロ服に泥靴の薄きたないポリシエウイキーである。しかしそれがあの頃の、時のヒーローで、却ていかにも生命がけの革命家として男らしく見えたのであらうか。若くして美しいナデジダ・アリルエフの心をひいた。英雄閑日月あり、スターリンが時々アリルエフ兄妹を訪れる。そうこうしてゐるうちに、驚ろくべし、過激派の荒武者、四十男のスターリンと、やさしい二十のナデジダの間に、戀が芽生へて来た。やがて十月革命成るの頃には、二人の戀も成功し、スターリンはナデジダにおいて二度目の夫人を見出した。

スターリンの最初の夫人、糟糠の妻エカテリーナ・スワニガは、彼が若かりし頃、郷里のコーカサスで、上記のようなもの凄い床下運動をやつてゐた頃、一人の男の子ヤコフを生み落して間もなく病歿した。その後のスターリンは、革命運動の多忙に取紛れてか、再婚の機會がなく、一九一七年の革命まで、獨身者であつた。そして同年の秋、彼は革命と同時に戀にも成功し、ソツエー

ト新政府に民族人民委員大臣として入閣するとともに、久し振りで再び「家庭の人」となつた。

### 三 冬宮乗取り

一九一七年秋に入つて、ペテルブルグはトロイツキー橋の北側、本文の記者の住居の附近が俄かに活氣づいて来た。この勢ひではまた何事か起らずには済むまい……などといつてゐる間に、スターリンがソ芬國境セストラ河畔の稜草小屋の中から、レーニンを連れだし、再びペテルブルグへ連れ戻した。その頃のレーニンのかくれ場所は、あとで十月革命の總本部となつた有名なスモリヌイに移るまで、今は戀人として絶対の信頼をおく、ナデジダのアバートであつたらしい。十月革命はレーニンが同志ジノウイエフとカーメネフの大反対を押し切り、トロツキーとスターリンの支持を得て、斷乎決行したものである。今度は、七月騒亂の時と違つて、ポリシエウイキー側に、赤衛軍があり、また正規の軍隊も少からず味方してゐた。

赤衛軍は先づ臨時政府の牙城冬宮の包圍にとりかゝつた。クオンスタットから呼びよせた過激派砲艦アウローラは、ネワ河を遡航して、冬宮の前に、錨をおろし、砲門を同宮に向けた。關係の多くは、赤衛軍のためにつかまり、ケレンスキー首相だけ、素早く看護婦に變装して、冬宮を脱け出した。

冬宮包圍軍の指揮官はアントノフ・オヴセエンコ（一九三八年スベインのバルセロナ總領事か

ら召還され、トロツキストの嫌疑で銃殺されたものであつたが、彼を背後から操つる大きな手があつた。十一月七日の夜、冬宮の南西、アドラルテイスキー並木通りの木蔭にかくれて、戦闘の進行を凝視し、時々傳令をしてアントノフ・オヴセエンコに命令を傳へさせた。黒い影があつた。あとでわかつたことであるが、それがスターリンであつたのである。

十月革命は、ジノウイエフやカーメネフの豫期に反し、時期尙早どころか、まことに臨時政府の虚を衝き、一氣呵成、ケレンスキーをおし倒してしまつた。やがてスモリヌイに赤旗翻へり、世界最初のソヴェート政府がレーニンを首相とし、スターリンを閣僚（民族人民委員）として樹立された。

十月革命はレーニンとトロツキーの采配下に行はれ、二人の名は並び稱せられ、スターリンの存在は當時あまり世間に知られなかつた。しかしブラウダ編輯長としての宣傳方面における活躍はいふまでもなく、レーニンの用心棒、セストラ河畔レーニンのかくれ家との連絡、赤衛軍の組織、冬宮の包圍作戦等々におけるスターリンの働らきは、相當なものであつた。たゞトロツキーの活動はいつも表面的で、はでやかである。その上自己宣傳に巧みな彼のことである。やがてトロツキーの名は、レーニンのそれとともに、恐ろしい過激派二大頭目として世界に響きわたつた。これに反して、スターリンはいつも裏面で暗躍し、潜行することが得意で、あまり表面に顔を出さない。トロツキーは舞臺の人、スターリンは樂屋裏の人で、二人の行き方は、道を異にし、それがまたそ

の後における兩者の啞合、對立、競争、はては喰ふか喰はれるかのもの凄い闘争の大きな起因をなしたといふことが出来るのである。

## 第三章 レーニンの弟子

### 一 アレスト・リトウフスケ

スターリンの成功原因の一つは、彼が十月革命の前後にわたつて、終始一貫してレーニンに師事し、あらゆる場面にわたつて、いつもレーニンと行動をともし、レーニンに忠誠であつたことにあるとしなければならぬ。

一九二五年七月一日、本文の記者との會見に際し、スターリンが私に親しく語つた談話の中で、私の記憶に最も深く刻まれてゐるのは、余等はみなレーニン先生の弟子である、と語つた一節である。ボリシエウイキーがレーニンの弟子であるといふ。それには何等耳新らしいものがないわけであるが、しかし語つた時のスターリンのいかにも眞摯な態度は、私の胸に今なほ強い印象をのこしてゐる。

一九二五年といへば、スターリンの勢威隆々已にレーニンの後継者とときまつた時である。當時私は屢々ソヴエート要路者に、スターリンが他の先輩や同輩をおしのけて、黨内かく重きをなすに至つたのは何に因るか、との質問を試みたが、これに對し、ある領袖格の黨人が、それはスターリン

が、忠實なるレーニンの弟子として終始し、未だかつてレーニンの政策、方針に反對したことがなく、常々その指導通りに行動して來たからである、と答へたことがある。

十月革命の當初、ボリシエウイキーの巨頭は、全局においてこそ、レーニンの指導下に行動したが、しかし個々の問題については、屢々レーニンに喰つてかゝり、猛烈な反對をなしたものが少くない。レーニンの二大高弟といはれるジノウイエフとカーメネフでさへ、十月革命の蜂起直前、時機尙早を唱へて、これに反對し、一時脱黨までしたことがある。またトロツキーがブレスト・リトウフスケの講和に際し、黨幹部の多數を率ゐて、レーニンの講和論に大反對を唱へ、またボリシエウイズムの理論方面の權威者ブハーリンが、レーニンの中休み、政策に反對して、左翼小兒病者、と叱られるなど、十月革命史には、黨首と黨領袖間衝突の事實が度々ある。然るにスターリンひとり、黨幹部會議において、終始一貫レーニンの政策を支持し、他の反對領袖と戦つて來た。

十月革命の蜂起に際して、レーニンがトロツキーとスターリンにおいて、強力な支持者を得たことは、上記の如くである。その次にレーニンがスターリンの支持によつて、トロツキーの反對を押し切つたのは、ブレスト・リトウフスケ講和である。

一九一七年末から一九一八年の初頭にかけてのブレスト・リトウフスケ講和會議は、實にソヴエート政府存亡の岐れる重大危機であつた。ブレスト・リトウフスケは、政權把握後のボリシエウイキーにとつて、最初のまた最大の難關であつたとしなければならぬ。

當時ソヴェート政府は、成立早々で、まだ基礎が固まらない。國內は騷擾の増場の中にあつた。そこへ當時なほ勝ち誇る強大ドイツ軍が、雪崩を打つて、無抵抗のロシアに、侵入しようとしてゐる。ソヴェート政府の存亡どころか、ロシアそのもの運命が、風前の燈火の觀を呈した。レーニンはこうした目前の危険から脱却する方策はたゞ一つ對獨講和の締結あるのみとなし、如何なる苛烈な條件でも、これに應ずる決意をなした。これに對し、トロツキー一派は、ドイツ革命近きであり、講和拒絶は却てこの機運を促進するだろうとの豫測を下し、ジノウイエフ、カーメネフ等は講和條件の苛烈なるに驚ろいてかゝる屈辱講和に調印する位なら、この際潔く玉碎するに如かずといひ、兩派は樂觀、悲觀の異つた動機から出發して、講和調印反對の同一行動に出た。

共産黨政治部（ボリト・ピウロー）はこの重大問題について、調印と拒絶の二派に分れ、最初の裁決には、八對七で調印主張のレーニン派が敗れた。この時流石にレーニンは偉らかつた。あくまで自家の所信に固い彼は、多數決に屈せず、然らば余は共産黨を脱黨し、新政黨をつくるであらうと恐ろしい啖呵を切り席を蹴つて起つた。すると黨首レーニンに去られてはそれこそ大變だといふので、裁決をやり直すことになつた。再裁決の結果レーニン派が一票多く、辛うじて講和調印の主張が通つた。プレスト・リトウフスク條約は、ドイツの要求通りの條件で、成立を見ることゝなつた。

かくしてレーニンは、自己の信念をおし通した。勿論同時にプレスト・リトウフスク條約による

賠償その他の莫大なる犠牲がロシアにふりかゝつて來た。しかし、これによつて、ともかくも獨軍の進攻だけはバタリととまつた。ソヴェート政府は危ふくもその存在を續けることが出來た。

否な、そればかりではない。その翌年早くも歐洲の戦局は逆轉し、戦敗ドイツに革命が起つた。これと同時にプレスト・リトウフスク條約は、一片の反古となつた。レーニンの政治的見識、その遠いさきを見透す力、その政治家としての偉大さは、プレスト・リトウフスク講和によつて、一段と廣く内外に知れ渡ることゝなつた。と同時に最も力強くレーニンの所説を支持したスターリンもまた漸やく黨内に重きをなし、やゝもすれば、講和に反對したトロツキーやジノウイエフ、カーメネフ等を凌駕することゝなつたのも、當然の成行であつたとしなければならぬ。

## 二 前 線 派

ソヴェート・ロシアはかくしてプレスト・リトウフスク講和の成立により、獨軍の侵入を免れた。しかしその代りに、國內到るところ白系露軍が蜂起し、反革命運動は全國的に展開した。北方ではユデニッチ軍、南方ではデニキン軍、東の方シベリア方面ではコルチャク軍が、それ／＼聯合軍の支援で、相當の兵力を擁し、三方から赤いロシアを攻めたてる態勢をとつた。これに對してソヴェート政府は陸海軍人民委員トロツキーの畫策で、危大な赤色軍を創設し、これをドシ／＼前線にくりだすことゝなつた。しかし赤色軍、勞農軍とはいつても、士官の大部分と、兵士の殆んど全

部が従來の帝政露軍を「色」だけ塗りかへたに過ぎない。どこまでソヴェト政府に忠誠であるかうつかり信頼が出来ない。その頃トロッキーが「赤軍の中には帝政露軍の將校が三萬人いる」と報告し、レーニンが目を圓くして驚ろき「腕つ節の太い黨員を前線に急派して監視しなければなるまい」といふたことは有名な挿話である。そこでボリシエウイキーの腕利が政務官として従軍することとなり、こゝに赤色軍部内に監視制度なるものが特設された。前線出動のいはゆる腕つ節の強い政務官の中で、圖抜けて大物と見られたのが、スターリンである。彼は南方正面の政務長官として、食糧の徵發、赤色軍の政治的指導（即ち監視）という極めて廣汎な権限を委託され、前線に出動し、長くツアリツイン（今度の獨ソ戦において、ソ聯軍攻勢轉換の起點となつたスターリングラード）にとゞまつた。

當時ボリシエウイキーの領袖の多くは、ジノウイエフやカーメネフの如く、モスクワに腰を据え前線などに出ることを好まなかつた。スターリン等が政務官として前線に出動したのも、黨の命令によつたものか、それとも自ら進んでこの貧乏籤をひきあてたのか、その邊のことは、はつきりしないが、しかし、彼が「前線派」の大ものであつたと同時に、往年の「床下派」の急先鋒であつたといふ二つの事實は、スターリンをして今日あらしめた大きな原因の一つをなしてゐることを見逃がしてはならぬ。

こゝで當時の「前線派」と、そして往年の「床下派」及び兩者の關聯性について、一應説明して

おく必要がある。

ボリシエウイキーの内部には、その在野當時から、久しい間、「エミグラント（移民）派」と、「床下派」との對立、抗争があつた。「床下派」とは何か。また「エミグラント派」とは誰を指すか。ボリシエウイキーが帝政時代、ツァー政府の壓迫下にあつた當時、あるものは國外に亡命して移民生活を送り、あるものは國內に踏みとゞまつて、いはゆる「床下」にかくれ、潜行運動を續けた。前者を「エミグラント派」といひ、後者を「床下派」と呼んだのである。

反革命動亂の當時「床下派」は、その頭目スターリンを始め、多くは前線部隊付の政務官に任ぜられ、「エミグラント派」の連中は多くモスクワやレーニングラード等の都會に残り、比較的安易な生活を送つた。そこで「床下派」は同時に「前線派」「エミグラント派」は同時に「都會派」と名付けられ「床下派」對「エミグラント派」の啞合ひは「前線派」對「都會派」の反感で、一層深刻を加へて來た。たゞレーニンの在世中は、レーニン自身も「エミグラント派」に屬するので、「床下派」は遠慮してゐたらしい。そこでジノウイエフやカーメネフの如きは、御大の庇護下に「虎の威を藉る狐」振りを發揮した。

元來エミグラント派は革命人とはいつても、長い間の移民生活中に精神的にも、肉體的にも、根氣とねばり力が衰へてしまつた。たゞ頭がよくて、世渡りが上手なので、危い時には外國へ逃げる革命が成功すると大手をふつて歸國する。革命は自分達だけでやつたような顔をして顯要な地位を



占める。反革命動亂が始まると、都會に嘯りついて前線に出ようとしな。それがあくまで國內に踏み止まつて、潜行運動で悪戦苦闘を続け、その間に心身共に鍛えて闘志漸々、しかし革命成果のうまい汗をみんな「エミグラント派」に吸はれ、反革命動亂勃發と同時に「前線出動」の貧乏籤をひきあてた「床下派」「前線派」には、氣に喰はない。頭のわるい、世渡りの下手な「床下派」はいつも下積みとなり、縁の下の力持ちで、穀物のかり集めや、赤色軍の政務官として前線へくり出される。ソヴェート政權確立後も、多くは二流どころの地位におかれる……馬鹿々々しい……という不平不満が、レーニン死去の頃から漸やく鬱積し、やがて爆發する時が來た。そうした、「床下派」の「移民派」に對する昔からの反感と、革命成功後の「都會派」に對する「前線派」の不平をあとになつてトロツキー、ジノウイエフ、カーメネフ等の所謂はたき落し作戰に巧みに利用したのが、自ら「床下派」であり「前線派」であるスターリンその人に外ならないのである。

「床下派」は同時に「前線派」であり「エミグラント派」は同時に「都會派」である。従つて、「床下派」の「エミグラント派」に對する勝利は、同時に「前線派」の「都會派」に對する勝利でもあつたことは、偶然の如くにして、偶然でなかつたとしなければならぬ。

本文の記者が幾多の危険と困難を冒して、一九二〇年、いはゆる「二十四ヶ國の包圍中」にあつた赤いロシアに飛び込んだ時、モスクワでは、レーニン始め、トロツキー、ジノウイエフ、カーメネフ、ルイコフ、ルナチャルスキー、ブハーリン、チチエーリン等々に親しく面接した。彼等はみ

な「エミグラント派」に屬するが、その中、今日生き残つてゐるものは幾人あるか、レーニン逝きジノウイエフ、カーメネフ、ルイコフ、ブハーリン等はテロの血祭にあけられ、チチエーリン、ルナチャルスキーは末路蕭々で淋しく病歿した。そして今日ソヴェート臺閣にあり、クレムリンの主人公たるスターリン始め、モロトフ、ウオロシロフ、ブデヨンスイ、ミコヤン、アンドレーエフ等々の新巨頭、革命前の「床下派」の大ものは、當時悉く、最前線にあつて、反革命軍と戦つてゐた。彼等が前線から歸つて來たのは、反革命動亂鎮定後のことである。

本文の記者のスターリンと親しく語つたのも、一九二五年のことである。しかしてスターリンの傘下に集まつた現幹部が悉く、帝政時代の「床下派」であつたと同時に、革命後の「前線派」であつた。帝政政治の反動時代、ツァー政治の壓迫を逃れて、外國に移住し、革命後はモスクワにあつて都會生活の安逸を貪つてゐた「移民派」「都會派」は、當然在野時代國內にあつて、床下生活の辛苦を嘗め、革命後身を挺して最前線に立ち、白系露軍の討伐に當つた「床下派」「前線派」に、革命の成果を譲り渡すべきである……といふのが、後者が前線から歸つてからの根強い主張であつたのである。

### 三 黨書記長の椅子

床下時代に彼は屢々生命がけの「武勇傳」を演じ、一攫數十萬金、黨を財政窮乏のドン底から救

ひあげた。十月革命前後常に黨首レーニンに師事し、レーニンを扶けレーニンと行動を共にした。七月騒亂の惨敗、十月革命の蜂起、ブレスト・リトウフスクの講和等々黨にとつての重大危局に當つて、いつもレーニンの忠實なる支持者であつた。反革命動亂に際しては、自ら前線に乗出し、最難局の南方方面を擔當した。こうしたことからレーニンのスターリンに對する信頼が、日に日に加重して來たのは、當然のことであつた。一九二一年秋レーニンはスターリンを擧げて、黨の書記長に任じた。この一事、レーニンとして、スターリンへの絶大信任を表示したものであることはいふまでもない。

スターリンがソヴェート官界から退いて、黨の機關に引つ込んだこと、即ち外から觀て花々しいソヴェート内閣民族人民委員（大臣）を辭し、一向見榮えのしない黨の書記長に身を投じたことは當時むしろ彼のために、左遷ではないかと思つた。しかし事實は全くその正反對で、スターリンのいよゝ大をなすに至つたのは、實にこの時からのことである。スターリンがソヴェート王冠に向つて、踏み出した第一歩は、實に彼がレーニンの絶對信頼を擔なつて、黨書記長の椅子についた時のことであると思ふ。

ソ聯共産黨はボリスエウイキーには、總裁もなく、委員長もない。黨の最高機關が二つある。政治部（ポリト・ビウロー）と書記部であるが、政治部は立案立法の機關と見るべく、實際の黨務を管掌するのは書記部である。特に書記部の重きをなして來た所以は、政權奪取後、黨を守る、拔身の

の劍、チエ・カー、後のゲ・ベ・ウが書記部に直屬してゐることである。従つて書記部の長たるものは、黨務を管掌し、黨のあらゆる機關の統制に當る外、拔身の劍をもつて全聯邦に睨みを利かすことが出来るのである。たゞレーニン健在の時代は、レーニンが押しも押されぬ黨の總裁格であつたので、書記長の地位は、全くレーニン總裁の秘書長たるに過ぎなかつた。スターリンの前任者であつたクレスチンスキーの如きは、全く名實ともにレーニンの一秘書であつた。然るにスターリンがクレスチンスキーに代つて黨書記長となつた時は、恰も黨首レーニンが不治の病にかゝつて、政權から離れた時のことである。

#### 四 レーニン病む

本文の記者が、レーニンをクレムリンに訪うて、親しく語つたのは、一九二〇年五月四日のことである。當時レーニンは少しも病人らしいところがなく、至つて元氣であつた。しかし年齢（その頃五十一歳であつた）に比して、十年位ふけて見え、且つ過勞と前年の負傷（カブルンといふ女社會革命黨員に狙撃された）の爲めか、甚だしく瘦せてゐた。

翌一九二一年、反革命大動亂は大體鎮定したが、その代りに經濟方面の破局が近づいて來た。當時の英國宰相ロイドジョージが皮肉つた如く、ソ連共産主義では、パンがつくれぬ、クロンスタットの叛亂は農民蜂起の警鐘と見られた。こゝにおいてレーニンの炯眼一閃、ソヴェート政府は新

經濟政策（ネツプ）を公表し、國家資本主義への大逆轉を始めた。レーニンの經世家としての偉らさは、最も遺憾なく發揮された。しかしこの大轉換による經濟難局の突破は、レーニンの偉大なる頭腦の最後の働らきであつた。翌一九二二年次項詳記の如く、レーニンは最初の病氣の發作で、重患に罹つた。病床についたレーニンはもう政務を見ることが出来ない。たゞ同年秋奇蹟的に、一時快方に向ひ、クレムリンに歸つて黨の大會に臨み、首相としての施政演説までやつてのけたが、しかしそうした無理押しが、却て病勢を促進し、一九三三年春、二回目の發作で再び起つ能はぬことゝなつた。その後はすつかりモスクワ郊外ゴルキー村の別荘に引籠んでしまつた。

何しろ黨首であり、ソヴェート内閣議長であるレーニンが再起出来ない重患にかゝつたのであるから大變なことである。黨にとつても、政府にとつても、由々しい大事であつた。

レーニンの病臥で、黨書記長の責任は、いよゝ／＼重くなつて來た。病人のレーニンに政務をとらせ心配をさせてはならぬといふのでスターリンはしつかと黨務運行上の實權を握り、事實上レーニンの代理格となつた。黨の、従つてまたソヴェート政府の人事行政は、スターリン書記長の權内におかれた。次いでクレムリンを守る、拔身の劍、ゲ・ベ・ウが、書記長に隸屬するといふ内規が、今迄より、より明白に確定された。スターリンはレーニンの病臥中、レーニンの名において、巧みに人事行政權と、ゲ・ベ・ウの警察權を把握し、これをドシ／＼行使することによつて、徐ろに近き將來における勢力布植の素地をつくる最も好都合な立場におかれた。

しかし間もなく黨の一角に、スターリンに對して、書記長の權力濫用の非難が高まつて來た。この非難は果して妥當であつたか、どうかは別問題として、スターリンとしては、なるべく病めるレーニンを煩はさず十分靜養させ度かつたらしい。ところがそれがレーニン夫人クループスカヤの氣に合はない。クループスカヤはあらゆる政治問題、人事問題をレーニンの耳に入れ、その決裁を求めようとする。スターリンはレーニンの安靜を必要として、クループスカヤの「出しやばり」を難詰する。重患のレーニンを間に挟んで、スターリンとクループスカヤが張り合ふ。ある日スターリンは極めて粗暴な言葉で、クループスカヤを罵倒した。クループスカヤは「ソ聯の第一夫人」を侮辱したといつて柳眉を逆立てる。早速粗暴なるスターリン書記長の「暴言」をレーニンに告げる。偉大なるレーニンも病臥年餘に及んでは、つまらぬ些事にも氣を腐らす、聰明さを失ふ。レーニンの爲めを思ふて、政務から遠ざけようとしたスターリンは、却て權力濫用の誤解を受けたらしい。レーニンのスターリンに對する信頼は、グラつき出した。あれほどスターリンを信任してゐたレーニンが、その晩年、急にトロツキーに近づき、スターリンを嫌ふようになつて來た。それについては、クループスカヤ女史が、妙な役割を演じた。

レーニンの歿後、その遺書なるものが問題となつた。再起不能と自ら知つたレーニンは、黨の前途を憂ひ、心の中で、後繼者を物色して見た。しかしどれもこれも帯に短かく、褌に長しで、つひに適任者を見出さずに永眠に入つた。レーニンの遺書に曰く。

ジノウイェフとカーメネフが一九一七年の十月革命に反対したのは、決して偶然のことではない。彼等の如きをもつて革命の指導に當らしめることは出来ぬ。然し、無暗に過去の失策を責めるはよろしくない。ブハーリンはマルキシストでない。然しまことに氣持のよい男である。ピヤタコフは行政家として有能だが、政治家としては駄目だ。然しブハーリンとピヤタコフは將來修養してものになるかも知れぬ。最も有能なるはトロツキーである。彼の缺點は自信が強過ぎることにある。スターリンは粗暴で、誠意なく、黨の機關によつて官權を濫用する癖がある。黨の分裂を避けるために、スターリンを書記長の地位から取除かねばならぬ……。

レーニンの採點によると、六人とも及第とはいへない。トロツキーだけは「有能」とあるから、及第に近いが、しかし「自信が強過ぎる」とたしなめてある。スターリンに對しては「書記長を罷免すべし」とあり、はつきり落第點がつけられた。トロツキー自身は「自分だけが及第」と見たらしいが、他の各領袖は中々承知しない。とにかくレーニンは自分の後任者をはつきり指名せずに死んだ。レーニンの死後、彼の後釜を狙つて激しい競争の始まつたのは、當然のことであつた。

## 第四章 レーニンの後釜狙つて

### 一 四十六人組事件

ボリシエウイキー、即ちロシア共產黨のポリト・ビウロー（政治部）内に「三頭組」なるもの形成されたのは、レーニン生前のことである。

レーニンの晩年、不治の病に倒れて、モスクワ郊外ゴルキー村に引籠つた頃から、ソヴェート政治の中心は、當時「三頭組」（トロイカ）と稱せられたジノウイェフ、カーメネフ及びスターリンの掌中に移つた。爾來「三頭組」は、自家の權力をかためんがために、ソヴェート及び黨の各機關に、その直系黨員を配置して、他の領袖の排斥を始めた。これに對して起つた最初の反對運動が、有名な「四十六人組」事件である。

一九二三年の秋、トロツキーを筆頭とし、ブレオブラゼンスキー、ラデック、サブローノフ、ピヤタコフ、スミルノフ等々いづれも有力な領袖格の黨員四十六名が結束して、「三頭組」を中心とする黨幹部の横暴専制振りを攻撃し、黨内民主主義實施の急務を叫んで起つた。

その要求の骨子は、分派組織の容認、討論の自由、入黨條件の輕減、選舉制の採用等々であつた。

反對派は一方幹部に向つて、以上の民主主義による黨機關の刷新改革を要求すると同時に、他方黨員間に廣く「三頭組」反對の宣傳を始めた。ここにおいて幹部は緊急會議を開き、これが對策を凝議した結果、同年十二月五日、黨内民主主義に關する決議案なるものを公表した。

同決議案は、先づ反對派の要求の一つたる分派組織の容認に對し、斷乎としてこれを峻拒した。蓋し、黨内に分派の存在を許すことは、トロツキー派の強化を促すこととなり、それはやがて黨の分裂を來たす誘因となるであろう。分派組織を許すか否かは、實に黨の死活問題である。絶對の統一と、鐵石の規律は、共產黨の生命である。「分派」と「統一」とは兩立するものでない。幹部派「三頭組」は敢然闘う意氣込みを示したが、しかし分派運動を除いて、他の反對派の要求は、大部分これを容認した。そこで四十六人組は、この決議の發表さるゝや、これ全く幹部派が反對派の壓力に屈服したものであるとなし、大いに歡聲をあげた。「三頭組」對「四十六人組」の論争で、ソヴェート政界の分野が、漸やく判然となつて來た。幹部派と反對派の中堅がどこにあるかといふことが、はつきりわかつて來た。即ちこの論争に當り、幹部を代表して、四十六人組を相手に、奮戦これ努めたものは、スターリンその人であつた。そして反對派の中で、最も目覺しい働らきを見せたものは、無論トロツキーで、兩者の正面衝突は、實にこの時から始まつたといへるのである。これよりさき「四十六人組」事件の前後から、レーニンとトロツキーとが、再び近寄り始めた。それは「三頭組」の專横振りについて、レーニンもまたクルーブスカヤの執拗な讒訴も手傳ひ、少

からぬ反感をもつたからである。

レーニンは一九二一年に發病し、時々クレムリンからモスクワ郊外ゴルキー村の別荘にかくれた頭がいたむ、夜眠られぬ。強度の神經衰弱にかかつてしまつた。

一九二二年五月、レーニンは病勢いよいよあらたまり、しやべることも、書くことも出來なくなつた。不思議なことには、レーニンが病むと、トロツキーも病む。一九二二年の春、レーニンがその持病の最初の發作に倒れた時、トロツキーもまたモスクワ河畔で漁獵をやつた時に引いた風邪で病床についた。

七月になつてレーニンはやゝ快方に向つた。十月には再び内閣と、ボリト・ピウローの議長席に歸つて來た。十一月には、共產黨大會で施政演説をやつた。しかし、それがわるかつた。この演説で無理を押したレーニンは、その後間もなく、再びゴルキー村に引籠らざるを得ないこととなつた。當時レーニンも明らかに「三頭組」の勢力、その專横と官僚主義に氣がつき、ひそかに共產黨の前途について憂へた。レーニンは自分の健康状態を思ひ、また黨内の空氣を憂ひ、いひしれぬ憤悶になやんだ。彼が前記遺言を考案したのは、實にその頃のことであつた。レーニンは一九二三年三月、二度目の病氣發作で倒れた。その二、三週間前のこと、トロツキーはレーニンを訪ね、極めて重要な密談を遂げた。その密談といふのは、トロツキーの著書「余の生涯」によると、大體次の如くである。

「レーニンは黨内の官僚主義の跋扈『三頭組』の専横を深く憂慮し、これが對策として、先づ中央執行委員會に、官僚主義撲滅委員會を組織し、レーニンとトロツキーとがこれに入り、この委員會をして『三頭組』の打破に當らしめ、更にトロツキーをしてレーニンの後繼者たらしめやうと云ふのであつた。……」



(トロツキー)

しかしかくの如くレーニンが、トロツキーに近よれば近よるほど三頭組はトロツキーが、レーニンの後繼者となる可能性が大きくなるとなし、自家防衛上の一一致した利害關係から、益々その結束を固くするのみであつた。

## 二 トロツキーの爆彈論文

一九二四年一月二十一日、モスクワ郊外ゴルキー村の別荘において、十月革命の巨頭レーニンは、永劫の眠についた。レーニンの後釜を狙ふ競争のいよ／＼本格的となつたのは、その直後のことである。最初の競争舞臺にあらはれたのは、ジノウイエフとトロツキーである。ジノウイエフはカーメネフとともに、レーニンの二大高

弟の一人であり、且つコミンテルン總裁の重職にある。われこそ『第二のレーニン』なれと自負したのもあながち自惚のみとはいへない。トロツキーはレーニン生前の諒解あり、その選出にも『最も有能』の及第點をつけられたことから、ジノウイエフに譲るわけにゆかぬ。先づトロツキーの方から、挑戦して、彼とカーメネフに對し、一つの『爆彈』論文を投げつけた。

それは一九二四年の春早々、本文の記者のモスクワ滞在中のことである。トロツキーの秘書レンツネルが、トロツキー全集の第三巻に、十月革命當時の演説や論文を蒐集して刊行した、巻頭の序文『十月革命の教訓』の一文こそトロツキーがジノウイエフとカーメネフに對して放つた攻撃の第一矢であつたのである。

『十月革命の教訓』は實にトロツキー一流の名文をもつて書かれたもので、本文の記者もこれを再讀、三讀して、實に巻を閉づるを惜しんだ。即ち、トロツキーは、

十月革命は近き將來における各國人の手本となるもので、大いにこれが研究の必要がある。恰も今後の戦争が、歐洲（第一次）大戦の經驗を基礎とせねばならぬが如く、十月革命の教訓を學ばずして、今後何れの國の革命も企て得られない。然るにポリシエウイキーの多數は、十月革命は既に完成した、ロシアでは再びかかる革命がくり返されるようなことはない。従つて十月革命はこれを後世の史家にまかすべく、現代の革命家はこれを研究する必要がないとしてゐる。何たる見違ひであらう。われ等は十月革命について、徹に入り細にわたつてこれを研究し、今後

おける世界革命の手本としなければならぬ……。  
と前提し、十月革命の裏面史の解剖にうつり、從來共産黨幹部が世人の記憶から消し去らうと努めてゐた一大秘密を暴露した。

十月革命裏面史の一大秘密とは何か。それは外でもない。十月革命の決行に當り、ジノウイエフとカメネフが『革命尙早論』を唱へて、レーニンの意見に反對したことである。即ち二人は十月革命の劈頭において、この革命を尙早となし、斷乎これに反對して、その最も肝腎な時に、同志の氣勢を鈍らせた。然るに革命成功の瞬、この二人の『落伍者』は恰も革命の殊勲者の如く最も重要な地位につき、自分達の力でとつた天下の如く振舞つてゐる……

事實はたしかにトロツキーの所論の通りであつた。ジノウイエフとカメネフとは、革命の最重要時に、黨首レーニンにそむいた。黨員の行動として、まことに由々しい過失をなした。しかしレーニンはこうした黨員の過失に對し、當の本人が、自らこれを認めて改めさへすれば、少しも追責しようとしなかつた。

十月革命成るや、ジノウイエフとカメネフは再びレーニンの傘下に戻つて來た。同志に對して寛弘なレーニンは、ジ・カ兩人の十月革命反對の重大過失を、とがめることなく、却てジノウイエフをベトログラード、カメネフをモスクワ各ソヴェト議長の要職にあげ、二大高弟の手によつて、革命の二大根據地を固めた。否、レーニンの二人に對する信頼はただにそれだけに止まらなかつた。

つた。

即ちレーニンは更にジノウイエフを擧げて、第三インターナショナルの議長となし、またカメネフをして全露ソヴェト副議長たらしめ、労働者上りで、當時まだ政治の経験に乏しかつた正議長カリーニンの輔佐役、否、事實上の全露ソヴェト議長たらしめたのである。これはいふまでもなくレーニンが世界革命の牛耳をジノウイエフに握らしめ、ソヴェト政治の樞機をカメネフの手に託したもの、即ちレーニニズムの内外二大政策をこの二人に委ねたのである。そしてレーニンがその晩年病床につくや、カメネフはいよいよ正式にレーニンに代るべく、勞農内閣議長代理となつた。

### 三、三頭組の底邊

一九二〇年春、本文の記者がモスクワを訪ねた頃、ジノウイエフとカメネフとは、トロツキーとともに『レーニン配下の三羽鳥』といはれ、たいした羽振りであつた。しかし一九二二、三年レーニン病臥の頃から、この三羽鳥の間に、そろそろ『レーニンの後継者』の椅子を指して、競争が始つた。一九二四年の春、本文の記者がレーニン死去直後のモスクワを訪ねた頃が、この競争の最も激化した時であつた。前記『三頭組』の一角に對する攻撃の第一矢トロツキーの『爆彈論文』が、全露を騒がせた時であつた。

當時本文の記者の奇異に感じたことは、トロツキーの「三頭組」に対する狙ひどころである。

トロツキーは何故「三頭組」の中心スターリンに対する攻撃を後廻しとして、ジ・カ兩人にのみその鋒先を向けたか。思うに、その頃なほ「三頭組」の中で、内外に名を知られたのは、ジノウイエフとカーメネフで、スターリンは例によつて表面に立たず、裏面にあつて實力の扶植のみ汲みとしてゐたので、トロツキーの目にすら「三頭組」の有力分子は、ジ・カ兩人であつたと見たのであらう。或は當時のトロツキーは眼中にスターリンが無かつたのかも知れぬ。

なるほどその頃のジノウイエフとカーメネフは、素晴らしい勢力であつた。何しろ前者はレーニン・グラードの赤色總督にしてコミンテルンの總裁を兼ね、後者はモスクワ探題であつて、且つレーニンの病床に就いて以來、ソヴェート内閣の議長代理（即ちレーニンの代理）と來たのであるから、大變な勢力であつたわけである。さればレーニン逝くや、世人はこの二人の中の誰か一人が、必然「第二のレーニン」たるべしとなし、また實際ジノウイエフは自らレーニンの後繼者をもつて任じ、レーニン歿後最初の二年間、ロシア共産黨「ボリシエウイキー」の大會などある度毎に、幹部を代表する施政方針報告の役（生前レーニンはいつも自らこの役にあつた）に當つたのである。

トロツキーが「三頭組」の實勢力が、ジ・カ兩人にあるとなしたのは、決して奇とするに足らない。當時世人一般もそう信じてゐたのである。然るに事實は、全くその反對であつた。「三頭組」の實力者は、寧ろスターリンであつたのである。スターリンは「三頭組」の形成する「三角の底邊」

であつた。表面に現れないが、その底力は強いものであつた。しかるにトロツキーはスターリンの攻撃を後廻しにして、先づ、ジ・カ兩人に向つて攻撃の第一矢を放つた。私は思ふ。この一事こそトロツキーが自ら自己の破滅を招いた最初の、また最大の失策であつたと。「三頭組」の中堅は、スターリンであつた。トロツキーにして「三頭組」をひと纏めに、敵に廻す勇氣と、これに打ち勝つ成算がなかつたとしたならば、當然ジ・カ兩人を味方に引入れて、スターリンを孤立せしむる作戦をとるべきではなかつたか。

トロツキーはジノウイエフとは和し得なかつたとしても、カーメネフとは義兄弟の仲である。（トロツキーの妹オリガ・ダイドウナは有名なカーメネフ夫人である）カーメネフを抱き込むことによつて、ジノウイエフをも引きつけることが出来たであらう。況んや、ジ・カ・ト三人とも同じく猶太人出身なるにおいてをやである。猶太系ボリシエウイキーの三頭聯盟を以てすれば、孤立したスターリンを打倒することは、難事ではなかつたかも知れぬ。然るにトロツキーは、その「三頭組」に対する攻撃の鋒先を先づジ・カ兩人に向けた。

トロツキーがこの「十月革命秘史の落伍者」を摘發したことは、云ふまでもなく、ジノウイエフ及びカーメネフにとつて最も手痛いところを衝いたものである。トロツキーの投じた一石「十月革命の教訓」は、果して黨の内外に、大波瀾を捲き起した。

しかしこのトロツキーの「三頭組」の二頭に対する攻撃の結果は、どうであつたか。ジ・カ兩人



は勢ひ、スターリンの庇護下に立たざるを得ないこととなつた。即ちこれがため「三頭組」の結束を固くしたと同時に、愈々スターリンをしてこの「三頭組」の推しも推されもせぬ中心人物たらしめた。それは必然の成行であつたのである。

#### 四 漁夫の利

レーニンの死後、間もなく、黨の幹部大會に、スターリンはレーニンの遺書によつて、書記長辭任を申出でた。スターリンは大會に臨んで、

レーニンの遺書にある如く、余は極めて粗暴な男である。しかしそれが生れつゝの性格であるから、如何とも致し難い。余は書記長を辭任し度い。……

と簡単な挨拶を述べたが「生れつき粗暴な男だ」との卒直な告白は、却て勞農黨員の喝采を博したのみならず、スターリンに捨てられては、いよいよトロツキの重壓におし潰されてしまふと周章て出したジ・カ兩人は、極力スターリンの辭任に反対したばかりでなく、書記長のために、大いにその権限の擴張を主張した。かくして、ジノウイェフ及びカメネフ對トロツキの政争によつてスターリン一人漁夫の利を占め、愈々鞏固にその黨内における中心地位を築き上げた。

スターリンは「トロツキが同志の古傷をつツ突き出して、その痛みを新たならしめるが如き行動を取つたのは、甚だ苦々しいことである。己にその當時ジ・カ兩人とも、そのあやまちを悔いて

これを改め、またレーニンがこれを許したものである以上、今更事新しく騒ぎ立てるのは、同志としての情誼に悖り、また徒らに黨員の結束を紊さんとするものである」となし、トロツキに對して厳しい叱責を加へ、ジノウイェフとカメネフのために辯護の任にあたつた。

一九二四年の春、スターリンは「トロツキズムとレーニニズム」と題する演説及び「十月革命とロシア共産黨の戰略」と題する論説において、

トロツキはわが黨、殊に十月革命の局に當つた黨の幹部をこきおろし、これによつて、更にレーニニズムの王冠奪取に移ろうとしてゐる。そして彼がレーニニズムの王冠を奪はうとするはトロツキズムを以て、唯一のプロレタリアのイデオロギとなし、これを黨の組織の上に確立しやう。即ち一つの黨内において、革命主義者と機會主義者、及び彼等の大小團體の共同生活を許さう」といふ新奇な理論を打ち樹てんとする意圖に外ならぬ……

と説き、トロツキの野心の那邊にあるかを、深刻に抉つた。

こゝにおいてジ・カ兩人も亦勢を得て、トロツキに對する逆襲に移り、トロツキの黨規紊亂トロツキズムの矛盾誤謬等に向つて、盛んに逆襲の矢を放つた。黨の大勢は「三頭組」に傾き、トロツキの旗色漸やく振はず、やがて黨員の間にトロツキを黨規に照して處分すべしとの聲が起るに至つた。

たゞ一九二五年一月十七日、聯邦共産黨IIポリシエウイキの中央執行委員及び監察委員聯合會

議において、いよいよトロツキー處罰問題が提起される段に至つて、ジノウイェフとカーメネフとは、あくまで嚴罰説を主張したのに對し、スターリンは寛容説を唱へ、こゝに「三頭組」の間にも、トロツキーに對する私怨、個人的復讐心に目がくらんだかに見へたのに反してスターリンの態度には、先づ敵をたたいておいて、その直後にこれを庇護するといふ如何にも男らしいものがあつた。ポリシエウイキーの多數人心はいよいよはつきりスターリンの周圍に集つて來た。

思ふにスターリンが幾多勞農巨頭の間に立つて、嶄然その頭角をあげたのは、この時からのことである。勿論、それまでも、彼の勢力は相當大きなものであつたが、しかしその頃までは隠れた勢力であつた。彼の隠れた潜勢力は、まづ、トロツキーを抑へて後に彼を庇護し、ついで、ジノウイェフとカーメネフとのトロツキーに對する個人的復讐を抑へたときから、漸やく表面に大きく現れて來たのである。

## 第五章 兩雄並び立たず

### 一 第三勢力

ソ聯共産黨にポリシエウイキーの中には、革命の前後から、表面に立たず、裏面にかくれて隠然大きな勢力をなした一つの「底流」があつた。底を行く流れは、外にこそあらはれないが、グングン押して行く力は、何よりも強く、いはゆる「底力」といふのが、それであつたのである。しかしこの「底流」を指導するものは誰か、その流れ行く方向は、どこか。何しろ外にはあらはれない、裏面にかくれてゐる、底に沈んでゐるので、最初の間、さつぱりわからなかつた。しかもなほ「革命の巨舟」ソヴェート聯邦は、知らず、識らずの間に、いつの間にか、この「底流」に押されて行く外はなかつた。革命初年のポリシエウイキーは大體、レーニン直系と、トロツキー派の二大勢力によつて指導されたと見てよい。この兩巨頭の采配下に、ジノウイェフ、カーメネフ等のレーニン直系と、ラコフスキー、スミルノフ、ピヤタコフ、ムラチコフスキー等々のトロツキー派の猛者連が、十月革命の舞臺面にはあらはれ、華々しく飛躍したのである。しかしこの兩派のかけにかくれて、ジリ／＼潜勢力をかためつゝあつた第三勢力のあつたことを見逃してはならぬ。第三勢力とは何か

前記の「底流」を指しているものであり、この「底流」、この「第三勢力」こそは、同時にまた前記革命前の「床下派」であり、革命後の「前線派」でもあつた。

レーニンの病臥、ついで死去の後、レーニンの後継者がきまらず、レーニンの後にレーニンなしとまで言はれて、ソヴェート政治の中心は、共産黨の最高機關たる政治部（ポリト・ビウロー）の手に移り、合議制となつた。ポリト・ビウローの役員七、八名が、合議協力もつてレーニン一人に代はることとなつた。しかしポリト・ビウローといつても、いつまでもドン栗の背比べの状態を續けて行くわけにゆかぬ。やがてわれこそ「第二のレーニンなり」と自負して立たうといふものがあらはれた。即ちジノウイェフとトロツキーとが「レーニンの後継者」たるべく、競争舞臺に立つた。少くともそうした觀を呈したのである。

最初ポリト・ビウローの中に、前項所記の通り、ジノウイェフ、カメネフ及びスターリンの三人が、三角同盟をつくつて、トロツキー對抗の共同戦線を張つた。この三角同盟は「三頭組」（トヨイカ）と名付けられた。この「三頭組」の筆頭は、最初ジノウイェフで、その有力な支持者がカメネフであるとなしたトロツキーは、先づその「十月革命の教訓」と題する論文において、ジ・カ兩人に對して、「爆弾」を投げつけたことは、既に記した通りである。即ちジ・カ兩人が、十月革命の際、時期尙早を理由として、革命の蜂起に大反對を唱へ、最も肝腎の秋に、脱黨まで敢てし革命の發展を阻害した……といふ大きな古傷をつつき出した。しかしそうしたトロツキーの行動

は實に同志の古傷をさらけ出すといふ苦々しい作戦であつたのみならず、敵の主力點、即ち「三頭組」の中心勢力を見あやまつたものであつた。

ジノウイェフとカメネフは、レーニンの二大高弟として、並び稱せられ、革命前から内外に知られ、革命後も常に表面に立つて活躍し、従つて「三頭組」の有力分子と見られたのであるが、しかし「三角の底邊」はスターリンであつた。底邊は下にかくれて見へないが、しかし「三頭組」の「底力」はスターリンであつたのである。然るにトロツキーがジ・カ兩人を攻撃の目標となし、スターリンを眼中におかなかつたのは、千慮の一失で、まことに大きな錯誤であつた。トロツキーの巨弾にふるへあがつたジ・カ兩人は、果然スターリンの庇護下に小さくなり、こゝに始めて久しくかくれて見へなかつた黨内の「第三勢力」の「底力」が、そして「三頭組」の「底邊」がそろそろ表面にあらはれ出した。それは前項所記の通りである。

## 二 昨日の味方今日の敵

一九二五年の春、本文の記者は、日ソの條約の成立を機會に、モスクワに遊んだ。その頃トロツキーは、陸海軍人民委員の重職を奪はれ、利権局長、電化局長、工業科學學校技術局長の三職をあてがはれた。總理格の彼が局長の椅子に落され頗る不遇の境地にあつた。流石のトロツキーも「三頭組」攻撃の失敗で、旗色振はず、たゞ理論闘争を唯一の武器として、反スターリン派の運動指導

を續けた。

失意不遇のトロツキーをして、やゝ意を強うせしめたのは、前記の「三頭組」の内訌から、昨日の敵カールメネフとジノウイエフが、今日の味方となつて來たことである。

トロツキー處罰問題に端を發した「三頭組」の同志討は、その後間もなく「農業國ロシアに社會主義建設は可能か否か」の問題についての理論上の衝突によつて、激化され、兩者間の溝渠は急に深まつて來た。

ジ・カ兩人は「ソヴェート・ロシアは技術的に甚だしくおくれてゐる。それは社會主義の建設にとつて、絶對的障礙である。西歐革命にしてわれ等を支持しない場合、ソヴェート聯邦一國における社會主義經濟の建設は、結局失敗に終る外はない」となしスターリンの「一國社會主義建設可能説」に對し、極端の悲觀説をもつて大反對を唱へ出した。そしてこの「ロシア一國の社會主義建設不可能論」はトロツキーの「不斷の革命原理」(パーマネント・レヴォリュション)と通ずるものがあり、やがてジ・カ兩人はスターリンをすて、トロツキー側に走つた。これに對し、スターリンは右翼派のブハーリン、ルイコフ及びトムスキーを味方に引入れ「新三頭組」を形成した。そして先づ理論闘争で應酬することとし「ソヴェート聯邦一國における社會主義の建設は十分可能である。ただ革命の存続保障を期せんがためには、少くとも二三西歐強國の革命を必要とするのみ」との見地に立つて、ジ・カ兩人の悲觀論を反駁した。兩派の論争は、聯邦共產黨第十四次大會において、

その最高潮に達した。同大會においてスターリンは、さきにトロツキーが「十月革命の教訓」において、ジノウイエフとカールメネフに對して攻撃を加へ、スターリンがその庇護に當つた點、即ち兩人が十月革命の落伍者であつたといふことについて、攻撃の鋒先を向け、

「ジノウイエフとカールメネフが十月革命に不信を抱いたこと、二人が今度ロシアにおける社會主義建設の可能性に對して不承認の態度に出でたこととの間に離るべからざる連鎖がある。わが黨は一致團結を欲し、またこの方針を貫徹するであらう。ジ・カ兩人にしてこれを欲すれば、兩人とともに、兩人にしてこれを欲せざれば、兩人なしに……」

との聲明によつて、兩人に去就の決意を促した。ジノウイエフとカールメネフは、スターリンの提議した二つの道の中の後者を選んだ。即ち幹部反對側に廻つた。

然らばトロツキーは如何にして、つい昨日まで「十月革命の教訓」をふりかざして攻撃を加へた敵手ジ・カ兩人に對し、提携の握手を伸べたか。トロツキーは「余の生涯」の一篇において、當時の事情について、左の如き説明を述べてゐる。

「三頭組」は本來結束固いものではなかつた。ジノウイエフもカールメネフも理論及び政治上の識見においては、スターリンの上にあつた。ただ、この二人には個性の意地ツ張り力が足りなかつた。しかし、スターリンよりもより國際的で、またレーニンの指導下に長い國外生活の間に修養したジ・カ兩人の眼識は、他の一面却つて二人の弱點をなした。時勢は國家主義の高潮を促し

さかんに舊いロシアの愛國主義が、新しい社會主義語に翻譯される時代となつた。ジ・カ兩人が國際主義の主張を支持しやうと試みたことは、スターリン配下の官僚派をして、二人を目して、「二等トロツキスト」視せしめた。

ジ・カ兩人が最初烈しくトロツキー攻撃の火の手をあげたのも、一つはこの非難を避けんがためであつた。しかし、さうした努力も効果がなく、スターリンの配下の諸機關はいよ／＼その太い骨を露出するに至り、二人はやがて自らスターリンに反抗するやうな形勢となつた。しかし、ジ・カ兩人が「三頭組」の内訌を移して、中央執行委員會に持ち出して見ると、絶對多數はスターリンの占むるところであつた。ジ・カ兩人との接近がトロツキー派の間にバラドックスと見るものおつたのは當然である。

トロツキー派の中には、ジ・カ一派との提携に反対したのも少くなかつた。中にはスターリンと結んで、ジ・カ兩人を向ふに廻すべしとなしたのもあつた。ムラチユフスキーの如きは、スターリン派と、ジ・カ派との何れとの提携にも反対し、スターリンは人をだますし、ジノウイエフは逃げてしまふ」と歎息したものである。

しかし、かかる問題は、結局個人的感情などで支配さるべきでなく、政治的の評價によつて決せられなければならぬ。

ジ・カ兩人は明らかに一九二五年後における論争において、トロツキー派の正當であつたこと

を承認した。彼等はトロツキー派の政綱を容れた。かゝる場合トロツキー派として、ジ・カ兩人と提携せざるを得ない。況や、ジ・カ兩人の背後には、幾千かのレンジグラードの労働者があるにおいてをや。

### 三 雀ヶ丘のピクニック

トロツキーはボリシエウイキーの黨内における所謂「外様大名の筆頭」である。そしてジノウイエフとカーメネフとはレーニンの二大旗本頭である。この三人の提携はボリシエウイキーの黨史上極めて重大なる出来事であつた。

スターリン派にとつては、トロツキーだけでも容易ならぬ強敵である。然るに、今や更にジノウイエフとカーメネフの一派をも併せて敵に廻すことゝなつた。加ふるに反対派の幹部にはト・ジ・カ・三人の外、エウドキーモフ、ラシエウイツチ、ムラコフスキー、スミルノフ、ラヂツク等、みな一流どころの領袖株が加つた。ここにおいてか、平素スターリン派に對して少しでも不平を抱いてゐた黨員は、先を競つてこの三巨頭の下に馳せ集つた。

一九二六年、ボリシエウイキーの黨内、反スターリン各派大同團結なるものが結成され、スターリンにとつて恐るべき一大敵國が築き出された。

「三巨頭」の提携と反對各派大同團結の成立とともに、黨内不平分子の反幹部運動は俄かに活潑

となり、党内黨を作ろうとする傾向が、日と共に露骨となつて來た。反對派は到るところに秘密機關を設け、或は秘密出版物を出して同志間に宣傳し、或は暗號を作つて相互間の聯絡をとり、徐ろにスターリン派勢力顛覆の陰謀がめぐらされた。

一九二六年の夏、ある日モスクワ郊外ナボレオン戦争で有名な雀ヶ丘の林の中で、反對派はピクニックを装ふて集會を催し、そこでトロツキー派の頭目ラシエウイツチが、スターリン攻撃の大演説を試みた。勿論反對派の方ではその一切の計畫運動がスターリンに知られてゐないものと考へてゐたらしいが、しかし反對派の中には幾多スターリンの密偵が入つてゐたので、秘密結社の組織も秘密機關紙も、集會の様も、スターリンにはすべて手にとる如く分つてゐた。しかしスターリンは反對派の運動を一々知つてゐながらも、直ちにこれに制裁の手を下さうとしなかつた。むしろ素知らぬ顔を装ふてゐた。ただ雀ヶ丘の山林集會のあとで、この集會の牛耳をとつたラシエウイツチに對し、東支鐵道理事としてハルビンに轉動を命じたが、それも榮轉優待の形式をとり、頗るおだやかな態度に出た。

そこがスターリンの最も「巧みな手」であつたのである。彼は反對派壓迫の鐵腕を下す前に、先づ反對派をして十分その陰謀の計畫を進めさせ、その間に彼等の黨規違反の證據をじつかと握り、いよいよ手を下す時には、もう反對派をして、逃げたり、法の網目を抜けたりするやうなことの絶對出來ぬ破目に陥らしめる作戰方針をとつたものである。そこでスターリンは少しも急かす周章て

ず、たたひそかに監視の目を光らせたのみで、表面では殆んど知らぬ顔をしてゐたのである。

#### 四 理論闘争

もとより、トロツキー、ジノウイエラ、カメネフ三巨頭提携は由々しき強敵であることは、スターリンもよく承知してゐたところであるが、しかし、最初からこれに打ち勝つて成算があつた。第一スターリンの率ゐる幹部派の掌中には、黨のあらゆる機關と、その「鐵の黨規」なるものがある。幹部派はこの機關と黨規によつて、いつ何時でも、黨員の多數を意のままに動かす、反對派に向つて彈壓を加へ得る優越地位にある。第二、反スターリン派の行動、特にトロツキーと、ジ・カ兩人の提携には、態度の公明を缺いた點が少くない。即ちジ・カ兩人の「味方より敵」に轉じた動機が如何にも政權の私慾に動かされた如く見え、一般の同情をひくことが出来なかつた。この點の如き反對派にとつて大なる弱點であつたと同時に、それだけスターリン派の強味となつたわけである。かくして勝利の成算を胸に秘めたスターリンは、反對派の行動に對し、最初はなるべく高壓手段を避け、先づ主として理論闘争を以て、これに應戰することゝした。彼はトロツキー等の猛烈なる幹部攻撃に對し、「中國革命の將來觀」「中國革命問題」「孫逸仙大學生との會見談」「中國革命と第三インターナショナルの使命」「ソヴェート聯邦の國際地位と國防」「ロシア反對派の政治相」「トロツキー派の過去と現在」等々の論文、演説、インターヴューにおいて、反對派に逆襲し

反駁論戦、大いにつとめた。スターリンがその生涯中、理論に最も力を入れたのはこの頃のことである。スターリン曰く、

トロツキズムの特色は三つある。即ち第一、トロツキズムは「永久不斷の革命」の理論の上にたつ。トロツキーの云ふ「不斷の革命」は何を意味するか。それは革命力としての農民を計算に入れざる革命である。トロツキーの所謂「不斷の革命」はレーニンのいへる如く、農民運動を、飛び越えて「政權を奪取する」遊戯である。かかる革命はこれを實行した場合、必ず失敗を免れない。何となればロシアのプロレタリアは、その同盟者たる農民を失ふからである。第二、トロツキズムはボリシエウイキーの結黨心と、そのあらゆる機會主義傾向を排斥する黨の根本方針に對して心服しない。トロツキズムは組織關係において、一つの政黨内における革命主義者と機會主義者との對立の原理である。第三、トロツキズムはボリシエウイキーのリーダーに對して、常に不信任を表示してゐる。その聲望を傷け、權威を傷害せんとしてゐる。ボリシエウイキーの黨内にあつて、トロツキズムほど、露骨にそのリーダーに對して、信用毀損をなす思潮はない。反對派はレーニン式戰略から去つて超左傾冒險政策に移つた……彼等はプロレタリア國（ソヴェト聯邦）と聯邦共產黨を攻撃することによつて、英國の保守黨のために、對露戰爭の準備を容易ならしめつつあるのである。換言すれば、これによつて「チェンバレンとトロツキーとの共同戦線」が築きあげられつつあるのである。

彼等はレーニニズムの軌道から脱線した。彼等はレーニニズムの屋上に架するにトロツキズムをもつてせんとし、更にまたトロツキズムを以て、レーニニズムにかへんとしてゐる。これ實に反對派領袖の、最大罪過であつて、わが黨は斷じてこの罪をゆるすことが出来ない……こうした當時のスターリンの所説、所論は悉くトロツキー相手の「理論闘争の武器」としたものであり、スターリン對大同團結の政争史研究の好資料であることはいふまでもないと同時に、理論家としてのスターリン、彼の理論スターリニズムの根本を究める上においても、参考となるものが少くない。

## 五 スミルガ事件

スターリン派トロツキー派の理論闘争は一九二五年から一九二七年にかけて殆んど間斷なく繼續され、時々激烈なる論争の火花を散らした。スターリンと相並んで幹部派の采配をふるつたブハーリンは、元來學者肌の温厚君子であるが、彼にして尙ほ且つ激昂のあまり、ある大會における反對派との論戦に際し「ジノウイェフは曾て余にトロツキーを逮捕して銃殺せんことを説いたことがあつた。然るにジ氏は今や走つてト氏の采配下にある。何たる變節ぞ？」云々の激語を發するに至つたことさへある。

しかし理論闘争だけでは、反對派は容易にひるまない。彼等は却つてスターリンに反對派彈壓の

勇氣ないものと見くぶり、グン／＼その手をひろげて、全国各地に反スターリン運動の陰謀をめぐらした。やがてかくれた秘密運動から、そろ／＼表面にあらはれた運動に移るといふ勢を示した。ただ一九二六年秋反対派大同團結の方でも、一時的退却を得策としたものか、同年十月十六日附の聲明において、われ等の意見は正當で、黨の圏内においては鬭争の權利を保留する。しかし黨の分裂を來たすやうな行動はとらない。ことを誓つた。その結果同年の冬は、比較的無事に過ぎたが、翌一九二七年早々スミルガ事件なる出來事がおこつた。スミルガは反対派の首領中、最も勇敢な鬭將の一人で、彼の黨規違反行動は、あまりに大膽露骨に失し、黙過方針のスターリンもとう／＼スミルガだけは放任しておくことが出來なくなり、シベリヤのある閑職に敬遠的に轉任を命じた。スミルガがモスクワのヤロスラウリ停車場を出發するに當り、反対派はこの機會において、反スターリン示威運動を試みんとして、多數の同志が驛頭に集つて盛んな見送りを催し、驛の構内一杯にトロツキー、ジノウイェフ及びカーメネフ等反対派巨頭の肖像畫のポスターをかかげた。

しかし、かかる露骨な反スターリン運動に對しても、スターリンはなほ手を拱いて見たか見ぬふりを續けてゐた。蓋しスターリンの胸中には來るべき黨の第十五次大會を機として一舉に反対派をたたき伏せる秘策がめぐらされてゐたのである。然るにそれと氣づかぬ反対派はスターリンの壓迫手ぬるきは、その力がないからであると見くぶり、益々大膽なる振舞に出た。一九二七年の暮に至り、中國革命問題が論争の焦點となるや、反対派の氣勢はいよ／＼高潮に達した。トロツキーの云

ふところによると、中國におけるスターリンやブハーリンの中國共產黨指導方針は、全くポリツェウイキの傳統を打破したものである。即ちスターリン等は中國共產黨に對し、國民黨に加入せんことを勧め、土地革命の尙早なることを説き、また蔣介石との提携を教へた。かうしたスターリンとブハーリンの誤れる對中國政策は、中國革命の惨敗を招いたのであるといふのである。反対派の若手連は中國革命に對する失策は、反對派のために勝利の絶好機會を與へたものとなした。

## 六 大同團結の切崩し

一九二七年の秋、十月革命の記念日にあたり、反対派はつひに街頭に出て、示威運動を決定するに至つた。しかしこれほ却つてスターリンのために反対派彈壓の口實を與へたものであつた。スターリンはいよ／＼機會が來たと見た。彼が二年間滿を持した弓はつひに矢を放つた。十月革命十週年の直後、黨の監察委員會及びゲ・ベ・ウの鐵腕が動き出した。かねて調べぬいておいた反対派の秘密機關に向ひ、一齊に踏み込んだ。秘密集會所や、秘密印刷所、暗號通信や武器彈藥等に至るまで、反幹部運動、黨規紊亂、反革命陰謀の證據が片つばしから摘發檢擧された。

やがて一九二七年末、全聯邦共產黨第十五次大會が開かれた。この時既にスターリンの掌中には歴とした證據が握られてゐた。反対派はたとひその主義主張に堂々たるものがあり、またその政策戰略に優越なるものがあつても、次から次へと黨規紊亂の罪證をあげられては、頭をあげて見よう



がない。

同大会は十二月十八日の會議において、中央監察委員長オルジョニキーゼの反幹部派問題に関する委員會の審議報告の後、決議案を討議し出席代表二名も棄権なく、満場一致でこれを可決した。該決議は先づ既に除名されたトロツキー及びジノウイエフを首班とする反幹部派の一味中、目星しい領袖連七十五名及び所謂サフロノフ派と稱する別動派廿三名全部を、反革命分子となし、一舉に黨外に驅逐したもので、トロツキー派中、カーメネフ、ラコウスキー、スミルノフ、ラヂツク、スミルガ、ピアタコフ、ラシエウイツチ、ムラロフ、エウドキモフ、バカエフ、サファロフ等の如き鉅々たるソヴェート露國建設當初の闘士連は悉く、共産黨から姿を消すこととなつた。

翌十二月十九日の最終會議において、十一名の中央執行委員幹部會員の選舉が行はれ、更に同日、第一回會議を開いて、共産黨の最高執行機關たる政治部員九名の選舉を行ひ、その結果、左の九名が當選した。

ブハーリン、ウオロシロフ、カリーニン、クイブイシエフ、モーロトフ、ルイコフ、ルズタ  
ーク、スターリン、トムスキー。

これと同時に書記部を選舉し、左の五人が當選した。

スターリン（書記長）モーロトフ、ウグラーノフ、コシオル、クビヤク。

以上の大會決議と幹部の選舉は、いふまでもなくトロツキー派の大敗と、同時に、スターリン派

の全勝を如實に語るものであらねばならぬ。

トロツキー派は、殆んどその領袖株の全部をあげて、黨外に押し出され、幹部派は悉くスターリン系の人を以つてかためられてしまつた。

ソ聯は、第二黨の存在を許さぬ。トロツキー等がこれまで幾分でも政治的に活動し得たのは、共産黨内にあつたからである。然るに今や彼の名は黨籍から削られてしまつた。今後のトロツキー及びその一味は、公然「革命の敵」としてソヴェート官憲からあらゆる壓迫と監視を受けることとなつたわけである。如何に機略縦横のトロツキーと雖も、峻烈、辛辣、世界に比類なきソヴェート政治警察ゲ・ベ・ウにつきまとはれては手の出しやうもない。

トロツキーにとつて、もう一つ大きな打撃となつたことは、ジノウイエフとカーメネフが、大會のこうした一網打盡の除名處分に膽をつぶして、俄かに腰を屈し、膝を折つて、早くもスターリンの前に宛を説いたことである。

十二月十九日、第十五次黨大會の最終の幕で、ルイコフは昨十八日除名された反幹部派カーメネフ、ジノウイエフ、エウドキモフ、バカエフその他十二名が、連名して提出した左の如き陳情書を朗讀した。

我等は將來共産黨大會の決議に對し、絶対無條件に服従し、同時にその理論の誤謬を認め、且つまた今後反幹部派としての宣傳運動を停止し、そのイデオロギーを撤回するは勿論、朋黨的組

織を解散することを言明する。

右陳情書の朗讀終るや、大會は、同書中の「反幹部派を全體として黨に復歸せしめんことを中央委員會及び中央監察委員會に要求する」件を否決し、ただ六ヶ月の期間において、反幹部派各自の行動を監視し、その誓約に違反せず、且つ、反幹部派問題に關する大會の決議に一致する事實を認められた時において、はじめて、各別に正式復黨を許可する旨の決議を可決した。

ここにスターリンの下した鐵腕の下に、反對派の大同團結はガラ／＼と崩れ、大同團結三巨頭中のジノウイエフとカーメネフの二人は、早くもトロツキを振りすてて幹部派の前に兜を脱いだ。かくしてスターリンはさきに、ジノウイエフとカーメネフを扶けてトロツキを抑へ、次いでトロツキを庇つてジ・カ兩人を逐ひ、最後にト・ジ・カの三人を一まとめに打倒したのである。勿論それには對手側の公明ならざる態度、その不純なる政爭動機等々の弱點も、スターリンの勝利の原因となつたであらうが、しかし、ここまで漕ぎつけたスターリンの手腕には、ただたゞ驚歎の外なしと云はねばならぬ。

スターリンの共產黨第十五次大會における獅子吼の一節に曰く、

反對派はすべての問題にわたつて意見を異にしてゐる。されば反對派は自家のイデオロギ、自家のプログラム、自家のタクチックス、自家の組織方針を有する團體である。即ち彼等は新政黨に必要なすべてを具備してゐるのである。ただ彼等に一つ足らぬものがある。それは彼等が

力をもたないことである。……

と眞向から反對派をのんでしまつたかたちであつた。

## 第六章 政權を目指して

### 一 書記部の牙城に據る

スターリンを中心とする幹部派対大同團結の闘争始まるや、ソヴェート政治の中心は、黨の中心機關ポルト・ピウロー（政治部）をはなれて、黨書記部に移つた。何しろ黨の領袖間の争ひが、ポルト・ピウローの主要役員間の争ひであつたのだから、自然ポルト・ピウローは、その機能を一時停止せざるを得ないことゝなつたわけであらう。

これよりさき「三頭組」對トロツキーの闘争の當時、己にポルト・ピウローは跛行状態にあつた。その頃トロツキーが病氣であつたので、ポルト・ピウローの會議は、トロツキーの病室で行はれたが、しかし重要問題は、豫め「三頭組」もしくは三頭にルイコフ、トムスキー、ブハーリン、クイブシエフの四頭を加へた「七頭秘密政治部」で決定されたのであるから、正式のポルト・ピウロー會議では、トロツキーが何と云はうと、他の部員は冷淡な態度で耳を傾けようとしなかつた。トロツキーを押しつけてから、間もなく「三頭組」が崩潰して、ジノウイェフとカーメネフが、昨日の敵トロツキーに走り、反スターリン派大同團結を結成するや、ポルト・ピウローの主要役員

三人迄が、幹部反對側に廻つたので、ポルト・ピウローはいよいよ一時その存在を失ふことゝなつた。

ポルト・ピウローに代つて、黨の中樞機關となり、スターリンの牙城となつたのが、黨本部の書記部である。一九二二年第十次共產黨大會の決議によつて、黨書記長（ゲン・セクレターリ）に就任したスターリンは、革命の當初ベテルブルグのクセシンスカヤ邸で、ブラウダ紙の共同編輯に當つたモーロトフを第一書記に、さきに前線政務長官として南露に出動中、ウクライナの地方黨部で見出した逸材ラーザリ・カガノウイツチをモスクワに呼び寄せ、第二書記に擧げ、この二人を參謀として、大同團結切崩の作戦に乗出した。

レーニン歿後におけるスターリンとトロツキーの争鬪戦は、まさに信長倒れて後の羽柴秀吉と柴田勝家の對立に比すべく、前記第十五次黨大會は、秀吉と勝家の雌雄を決した賤ヶ嶽の戦にたとへるべきでなからうか。ロシア共產黨史における最も興味ある一章をなすもので、スターリンの今日あるのは、實にこの一戦における勝利に因るとしなればならぬ。何しろ相手は、十月革命の元勳トロツキーに加ふるに、ジノウイェフとカーメネフの二人、これまたレーニンの二大高弟で、スターリンに比すれば、みな黨のリーダーとしての先輩である。しかしスターリンの牙城、黨書記部にはモーロトフとカガノウイツチといふ二人の名參謀がある。作戦頗る巧妙を極めた。トロツキー派は朝に一城を失ひ、夕に一城を奪はれ、やがて刀折れ矢盡き、第十五次黨大會には、つひに枕を並

べて除名處分の討死を遂げた。

## 二 アルマ・アタへ

スターリンにとつて、最も手強い相手は、何といつても、トロツキーであつたとしなければならぬ。ジノウイェフとカーメネフに至つては、最初からたかをくくつてゐたように思ふ。一九二八年の年頭、トロツキーに對してはトルキスタンの山奥アルマ・アタへ追放處分を決行したが、ジノウイェフとカーメネフに對しては、第十五次黨大會の決議通り、半年を経て、復黨を許可することゝした。但し復黨したとはいつても、もうすつかり陣笠になつてしまひ、日毎に影が薄くなつて行くのみであつた。

本文の記者は一九二九年の春、七度目の歐洲旅行に際し、暫らくモスクワに滞在したが、もうジノウイェフとカーメネフはどこにゐるのかさへつきとめることが出来なかつた。カーメネフ夫人だけはまだウオツクス（對外文化協會）會長の地位にあつたが、しかし本文の記者が尋ねた時でもその會談中始終御目付役がついてゐたような始末であつた。

トロツキーのモスクワ逐ひ出しは、相當な騒ぎであつた。最初一九二八年一月十六日と豫定されてゐたが、この日カザン驛のトロツキーの乗用列車前に、多數の群衆が集まつて、トロツキーのために、可なり熱烈な示威運動を試みたので、トロツキーの出發間際になつて、突然延期され、十八

日こつそりヤロスラウリ驛から誰も知らぬ中に送り出すこととなつた。

當時幹部筋では、トロツキーが自由意志で、モスクワを去る如く宣傳したので、ト氏は特にこの宣傳を否定するために、家から出る時も、汽車に乗る時も、頑強に拒絶し、これがため、ゲ・ベ・ウの當局者は、無理にトロツキーの居室の戸をたゞき破り、腕つ節の太い警官四、五人で、彼を昇ぎ出すといふ騒ぎを演じた。

またトロツキーと同行を許されたものは、夫人と長男のレフだけであつたが、レフはあまり突差の出發で、その愛妻（ヨツフェの長女）と別れる間もなかつたといふくらいであつた。

流刑地のアルマ・アタは、舊名ウエルヌイといひ、カザツクスタンの首都である。モスクワを距る四千キロ、最近トルク・シブ鐵道の開通と共に、この地にも鐵道が通じたが、トロツキーの流刑期間は、鐵道は同地を距る二百五十キロのフルンゼ驛までしか通じてゐなかつた。

この地方は、地震と水害の多いところで、またマラリヤ熱が猖獗し、ベストの流行することもあるといふ恐ろしいところである。

しかも、この地にトロツキーの家族は滿一ケ年間、配所の生活を營んだのである。トロツキーの言葉をかりて云へば、手紙、書籍、そして自然の間の生活を送つたのである。

アルマ・アタの流刑生活そのものの悲惨であつたのに加へて、トロツキーは流刑中に、モスクワに残つてゐた次女ニーナの訃報に接した。長女も次女も肺病にかゝり、次女まづ早世した。流石の

トロツキも涙を流したことであらう。

流刑地におけるトロツキは何をなしたか。性來勉強家の彼は夫人と長子と、タイピストの女と、三人を相手として勉強をはじめた。手紙を書く、コミンテルンに提出すべきテーゼを立案する、同志に檄文を送る……トロツキの著書中、四月から十月までの七ヶ月間、政治に関する發信手紙八百通、電信五百五十通、受信手紙一千通、電報七百通と云ふ統計が擧げてあるのを見ても、彼の當時における勉強振りが思ひやられる。

流刑地のアルマ・アタと各地との交通は殆んど杜絶の状態にあつた。加ふるにトロツキの身邊には、いつもゲ・ベ・ウが監視の目を光らせてゐたのである。しかも、かうした水ももらさぬ監視の下をくぐりながら、トロツキはソ聯内はいふまでもなく、世界中の同志に號令し、頻繁な文通を續けてゐた。

さすがにトロツキは天成の革命家であつた。彼はトルキスタンの山奥にありながらも、世界の氣勢に注意を怠らなかつた。彼は常に各地のそして各國の同志と氣脈を通じ、ひそかに再擧の計をめぐらし、到るところで、反對派運動を指導し、その結果、一九二八年の秋頃、反對派は再び各地において頭をもたげ出した。

ここにおいて、一九二八年十月に至り、ソヴェート政府はトロツキとその同志間の通信を阻止することに決し、十二月十六日モスクワから特派されたゲ・ベ・ウの代表は、トロツキに向つて

政治運動の絶對停止を要求した。これに對し、トロツキは中央執行委員会にあてて、政治的運動の停止は絶對に出来ないことを訴へたが、しかし、その結果、モスクワの態度はますます強硬となり、結局翌年一月國外追放といふことになつた。

一九二九年一月二十日、アルマ・アタに到着したゲ・ベ・ウの代表ウオリンスキは、トロツキに對し、刑法第五十八條第十項により、反革命犯と認め、國外追放に處すとの命令を手交し、トロツキ及びその家族は、アルマ・アタをすて、土耳其に向ふことゝなつた。

### 三 右翼派彈壓

スターリンは大同團結と戰ふこと三年、結局トロツキをアルマ・アタに、ついでトルコに追放し、さきに復黨したジノウイエフとカーメネフを再び黨籍から除名した。しかしそれだけではまだスターリンの獨裁權は、完璧とはいへない。ポリト・ビウロの中には、ルイコフ、ブハーリン、トムスキの三人が残つてゐる。三人ともスターリンにとつて同輩格である。トロツキはスターリンと同年輩であるが、革命家としての閱歷において、スターリンに比し、少くとも十年以上の先輩であり、且つその傲岸な性格は、彼をしてスターリンの下風に立つをゆるさぬは勿論、同列に立つて協力することも、彼の潔しとしないところである。トロツキとスターリンとは、兩雄並び立たず、互ひに相手を倒さねばやまない宿命關係をもつて、同じ革命の舞臺にあらはれたのである。

然らば他の革命先輩のスターリンに対する関係はどうであつたか。ジノウイェフ、カメネフ、ブ  
ハーリン、ルイコフの四人は、スターリンより年は若い、概して黨歴において同輩と見てよく、  
ボリト・ピウローに入つたのも、殆んどみな時を同じうしてゐる。しかしジノウイェフは、レーニ  
ンの生前すでにコミンテルン總裁、カメネフはソヴェート中央執行委員長代理、ルイコフはレー  
ニンの代つて、長くソヴェート内閣議長の椅子を占め



(ブハーリン)

ブハーリンは理論方面における黨内の第一人者、それ  
く自信もあり、自惚もあり、勿論スターリンの下風  
に立つを喜ぶものではなかつたが、しかしトロツキー  
の如く絶対にスターリンのリーダーシップを否認する  
ものではなかつた。ジノウイェフとカメネフはスタ  
ーリンとともに「三頭組」を形成して、トロツキーに  
對抗したことは、有名な事實であり、またブハーリンとルイコフはスターリンを扶けて、反スタ  
ーリン大同團結を向ふに廻はし、激烈なる理論闘争に當つたのはつひ昨日の出来事である。従つてこ  
れ等の長老連は少くとも、スターリンと協力することには、異議がなかつたわけであり、たとそ  
の下風に立つことを喜ばないにしても、血で血を洗ふ同志討ちをやらうなどは考へてゐなかつた  
であらう。しかしいつの間にか、スターリンの下風どころか、モーロトフやカガノウイツチなどい

ふ革命第二期生の傾使下に甘んじなければならぬ事態になつて來た。

大同團結の切崩が終つて、ルイコフ、ブハーリン、トムスキーの協力が、もうスターリンにとつ  
て、必要でなくなつた。一九二八年から一九二九年にかけて、スターリンは黨の政策を「左へ」のコ  
ースにとりかへた。左翼のトロツキー、ジノウイェフ、カメネフを向ふに廻はして戦つた當時、  
黨の政策を「右」に向け、左翼彈壓の作戦を進めたが、今度は其の逆を行き、右翼派ルイコフ、ブ  
ハーリン、トムスキーを抑へるために、黨の指導方針を「左」へ向けた。こゝがスターリン政策の  
弾力性といはれてゐるところである。

一九二九年春、本文の記者が、トルコのスタンブルに、失意亡命のトロツキーを尋ねた頃、恰  
かもスターリンの右翼彈壓の眞最中であつた。私はトロツキーに「ソ聯におけるスターリンの右翼  
排撃を何う見るか」と質問したところ、トロツキーは破顔一笑「スターリンは國內に残つてゐる余  
の同志(トロツキスト)の鞭撻下に、右翼派彈壓をやつてゐる」と意味深長な答を與へた。

一九三〇年十二月十九日ルイコフはソヴェート内閣議長の椅子を、モーロトフに奪はれ、通信人  
民委員の件食に引下げられた。これと前後して、ブハーリンはコミンテルン總裁を、トムスキーは  
プロフィンテルン總裁を罷免され、右翼派は極めて手軽にあつさり片付けられてしまつた。

#### 四 スターリン戦術

スターリンが政敵の大ものを片つ端から薙ぎ倒して、とうとう「グレムリンの主人公」となった手腕の凄さはたゞ驚嘆の外なしといはねばならぬ。スターリンは如何にして、幾多政敵の大ものを駕御し、壓迫し、征服し得たか。スターリンには他の企及し得ない一つの天下取りの名戦術があるといわれてゐる。その戦術とは何か。端的にいへば、「競争者の競争者」を利用することである。スターリンがソヴェート榮冠に向つて、一歩々々と攻めよつた過程を見ると、政敵打倒に、いつもこの戦術をつかつてゐる。即ち第一に、ジノウイエフ及びカーメネフと聯携して、トロツキーをひき下ろし、第二に、ルイコフ、ブハーリン、トムスキー等と協力して、ジノウイエフ、カーメネフ及びトロツキーの大同團結を切崩し、第三に、自家直系の「門下生」モロトフ、カガノウイツチ等をひきあげて新幹部を構成し、それに據つて、ルイコフ、ブハーリン、トムスキー等の右翼派を片付け、それでとうとうソヴェート獨裁王へ漕ぎつけた。最後の一幕だけは、自分の腹心を用ゐて、相手の右翼派を片付けたが、他の場合はいつも「競争者の競争者」を巧みにつかつた。以上は結果からみての話で、こうした戦術がどの程度計畫的意識的にとり上げられたかどうか判らぬが、少くともかゝるスターリン戦術の勝利は勿論その人の偉大なる手腕によるどころとしなければならぬ。しかし彼をして思ふ存分その手腕を揮はせたのは、主として黨書記部といふ鐵壁の牙城に據つたこと

であると思ふのである。

スターリンが書記長として黨内隱然大勢力をなし、幾多先輩格、同輩格の領袖を抑へ得たについて、こゝに特記すべきもう一つの原因がある。それは革命の初年、彼がゲ・ベ・ウの手によつて、領袖の黨員に關する秘密材料を蒐集したことであるといふ説がある。十月革命に際し、當時の赤衛兵とチェ・カーが、全国各地の警察を襲撃し、搜索し、秘密書庫から革命黨員、即ち現在ソヴェート巨頭連に關する色々の調書を差押へた。この調書は勿論主として革命黨員の「罪跡」の調書であるけれども、中にはいろいろ變つた記録もある。革命黨員といつても窮すればドンするで、その不遇時代、壓迫と窮乏に堪えかね、或は一時轉向したり、官邊に買収されたり、中には逆にその手先につかはれて、同じ革命黨員のスパイとなつたりしたものさへ少くない。スターリンはそうした調書を秘書のマレンコフやメフリスに命じて、一々精細に整理し、全部書記部の秘密書庫に入れてしまつた。今は時めくソヴェート巨頭でも、スターリンの前に頭のがらぬものがあるのは、さうした「古い調書」を出すぞ、出すぞと云はれるのが恐ろしくモならぬからであるともいわれている。しかし如何に政敵、否、政友を脅かす有力な證據を握つたといつても、自分自身に同じような古傷があつては、到底その睨みを利かすことが出来ない。しかるにスターリンにはどこをつついてもそうした「傷」らしいものが見當らぬ。彼はその床下時代隨分過激な恐ろしい直接行動をやつた。しかしそれはすべて黨のため、主義のため、革命のためにやつたことで、黨から見ても「大手柄」

となつても「罪科」とはならぬ。ポリシエウイキーの首領として、その一生を通じて、主義者としての閑歴に、何等指をさゝれるような汚點を、一つも残して居らぬのが、スターリンの何よりの強味であるとしなければならぬ。先年ゲ・ベ・ウに睨まれて、スターリンに叛旗を翻へし、いはゆる「不歸國組」となつた元駐日及び駐佛ソヴェート大使館参事官ベセドフスキーは「テルミドールへの途上にて」なる小冊子を著したが、同著はさかんにスターリン政治の内幕を暴露し、またさかんに攻撃を加へてゐるが、しかしスターリンその人の主義者としての志操の把持については、筆を極めて賞讃し「何所からつツついてもボロが出ない」と書いてゐる。またベセドフスキーと相前後して同じく「不歸國組」となつたドミトリエフスキーも、その著書「スターリン」において「スターリンはその名の示す如く、鐵の如き人である」と書いてゐる。即ち二人とも、スターリンの政策には反對であつても、その個人の操持に對しては、一向攻撃し得ないのみならず、却て力強く驚歎したり賞讃したりしてゐるのである。

## 第七章 喬木風強し

### 一 キーロフ暗殺事件

トロツキー追放され、ジノウイエフ、カメネフ、ついでルイコフ、ブハーリン、トムスキー等相次いで、黨外に逐はれて以來、反スターリン各派は、すつかり床下にもぐり、潜行作戦に移つた。そしていくつかの陰謀團の結成に向つて邁進した。

反スターリン派が、床下移行後、スターリン政権に向つて放つた第一矢は、一九三二年十二月レニングラードにおけるキーロフ暗殺である。キーロフはその當時のポリト・ビウローにおいて、最年少且つ末席を占めてゐたのであるが、しかし、彼はスターリンの後継者を以て、將來を囑望されてゐた重要人物である。私はこゝに何故ポリト・ビウローの末席にあつた最年少のキーロフが、スターリンの後継者を以て目されたかといふことについて、少しく説明を加へておく必要があると思ふ。

今から十數年前のこと、すでにスターリン政権が確立した頃、スターリンはポリト・ビウローのある會議に「自分の一身に萬一の事があつた場合、誰を黨書記長に推すべきか」といふ問題を提起



し、且つそれについて「レーニン死去の直後、黨幹部の間に大動搖が起つたことに鑑み、自分の後継者を豫め決定しておくことが、黨中樞機關の動搖を防止する上において最も必要なことである」といふ理由を附した。ポリト・ビウローは詮議の末、これまたスターリンの主張により、この次ぎの黨書記長は、第一、ポリト・ビウロー役員中の最年少者たるべきこと、第二、ロシア人出身であるべきことに決し、その結果右の二條件に合致するキーロフが「スターリンの後継者」といふことに内定したわけである。

かくして反政府陰謀團が、先づキーロフに狙ひをつけたのは、相當の理由があつたわけであるが、しかし結果から見て、それは大なる失策であつた。見ようによつては陰謀計畫實現への第一歩であつたと同時に、その破綻への第一歩であつたともいへるのである。即ちポリト・ビウローの末席を占むる最年少のキーロフ一人を失つただけでは、スターリン政権は微動だもしない。しかもこの事あつて以來、多少でも反スターリン派の嫌疑あるものは、悉くゲ・ベ・ウの監視下におかれ、次の陰謀計畫が甚しくやりにくくなつた。否、キーロフ事件が端緒となつて、先づ合同本部が檢舉され引き續いて併行本部の存在が嗅ぎつけられた。

## 二 合同本部

キーロフを狙つたものは、レーニングラードの一青年黨員（コムソモール）であつた。レーニングラ

ードはジノウイエフが長い間、赤色總督（黨支部長）として駐在したところ、同地の黨員の多くは、ジノウイエフの舊部下である。そこでキーロフ暗殺事件がおこるや、下手人の背景として、ジノウイエフに大きな疑惑がかつたのは當然のことであつた。そこでゲ・ベ・ウの手が動き出した。スターリン自らレーニングラードに乗り出した。彼自らジノウイエフとカーメネフの訊問に當つたことさへあつた。徴に入り細にわたつて調べて行く間に、つきあてたのが合同本部である。トロツキー派の猛者ムラチコススキーや、スミルノフと、ジノウイエフ及びカーメネフ一味が合同して、スターリン始め現幹部を暗殺の手で片付けようといふ大陰謀團が合同本部といふのである。

合同本部の陰謀發覺して、その巨頭は悉く逮捕されやがてその公判が開廷された。

ジノウイエフとカーメネフの法廷における「告白」中、傍聴者に、最も深刻な印象を與へたのは、次の一節であつた。ジ・カ兩人曰く、

われ等反政府同志は、五ヶ年計畫の失敗に終るのを待つてゐた。しかるに五ヶ年計畫は、われ等の豫期に反して、グン／＼成績をあげ、一九三二年、つひにわれ等の最後の望みの綱は切れてしまつた。さきに理論闘争に破れ、今また實際政治にしてやられた。われ等は結局政府巨頭の肉體的滅却（即ち暗殺）をはかるほかにとるべき策がなくなつた。

と。即ち陰謀の動機は、五ヶ年計畫の成功、一國社會主義の勝利にあり、その結果スターリン政権はいよいよ確乎不拔のものとなるであらうといふので、急いで陰謀にとりかゝつたのである。しかも

元來ポリシエウイキーはロシアの各派社會黨、革命黨中、暗殺戰術を最も強く排斥して來た政黨である。ポリシエウイキーは常に彼等の戰術に暗殺なしと傲語して來たのである。個々の要路者を暗殺しても何の役に立つか。大衆を味方に引入れない限り、社會主義の成功は期し得られないといふ信念から、強く暗殺戰術を排斥し、長い間の床下時代も、共同戰線を張つた他の社會黨、革命黨とは、暗殺戰術において、常に反對の立場に立つて來たのである。しかるに、かく傳統的に排斥して來た暗殺戰術を自ら採用しなければならなくなつたのは、「全く主義者としての破綻といふのほかに、窮餘の揚句とはいへ、われ等同志にとつては最大の悲劇である」といふのが、ジ・カ兩人の血の出るやうな告白である。勿論反政府陰謀事件は、ソヴェート政府にとつて不詳の出來事であることはいふまでもなく、かかる不詳事をひきおこしたことは、ソヴェート政治に、幾多大きな缺陷があるからだといひ、國內の不安、スターリン政權の危殆説などが當時さかんに流布されたのは、決して單なる反ソ宣傳のみと見るわけに行かぬが、しかもかゝる事件を巧みに逆用し、法廷において、政敵をして、明らかに「五ヶ年計畫の成功」、「トロツキズムの破綻」を確認せしめたことは、スターリンの大成功といふべく、いつもながらスターリンの手腕には、敬服のほかなしといはなければならぬ。

### 三 併行作戰

一九三五年から一九三八年にかけてのソ聯は、全く反政府陰謀續出の觀があつた。しかも各陰謀は個々獨立し、相互間横の連絡はなかつたが、しかし目的はいづれもスターリン政權の顛覆を指し且つその背後にあつて糸をあやついたのはトロツキーである。

私はこれ等當時の反政府陰謀を通觀して、興味を禁じ得ないのは、陰謀團の併行作戰である。即ち各陰謀計畫が目的を同じうし、且つその總元締が同じトロツキーであつたに拘らず、相互の間に横の連絡がなかつたといふ點である。併行して進み、しかも横の連絡がなかつたため、最初合同本部を檢舉した時、クレムリンでは、それだけで陰謀の全部を抑へ得たものと考へたらしい。併行本部の發覺したのはそれから一年も経つてからのことである。併行本部といふ名稱からして同本部が合同本部と同一方向を指してはゐるが相互間に連絡をとらない。即ち併行作戰によつたものであるといふことを物語つてゐるのである。しかして併行本部を嗅ぎつけ、これを檢舉した時も、クレムリンはこれで陰謀の全部を根こそぎ片付け得たものとして安堵の息をついたのであるが、何ぞ知らん、その後にはトハチエフスキー事件といふ、より恐ろしい陰謀がかくれてゐようとは。そしてトハチエフスキー事件の一段落後更にまた半歳も経つてから、右翼トロツキストがあらはれて來た。恰かも悪性の腫物の如きもの、一つ切つてもう癒つたと思つてゐると、また一つ出てくる。際限がない

から思ひ切つて大々的にメスを揮はふといつてやり出したのが、一九三七年から一九三八年にかけてのソ聯大獄なのである。

併行作戦の目的は、いふまでもなく、甲の陰謀團のあとに、乙の陰謀團を控へさせ、前者が発覚しても後者がそのあとを繼承し、三段、四段構へをもつて、あくまで初志を貫徹し、相手の首を取らねばやまぬといふのである。もし凡ての陰謀組織が併行して進まず、合同陣を張つてゐたならば各陰謀悉く一舉に一網打盡となるであらう。

何しろ陰謀團の首領ジノウイエフ、カーメネフ、スミルノフ、ムラチコフスキー(以上合同本部)ピヤタコフ、ソコロニコフ(併行本部)ブハーリン、ルイコフ、トムスキー(右翼トロツキスト)等々みな揃ひも揃つて十月革命のリーダーであり、すでにソア政府の顛覆で腕だめしを済ました手合である。床下、潜行、カモフラージュ等々の陰謀戦術の大家である。そして彼等の背後に、世界的革命の天才トロツキーが總元締の役に當つたのであるから、陰謀の組織、作戦ともに巧妙を極めたわけである。

併行作戦の一部に自白戦術といふのがある。それは何か。各公判毎に、世間を驚かしたのは被告達がベラ／＼とその罪状を告白したことである。これは勿論一つはゲ・ベ・ウの壓迫にも因つたと見なければならぬが、同時に自白戦術をとつたものであるとも見なければならぬ。即ち肝腎な秘密をかくさんがために、その肝腎な秘密以外のことをベラ／＼としやべつてしまふ、とぼけて他をい

ふのがそれである。然らば肝腎な秘密といふのは何か。それは即ちその陰謀と併行して進みつゝある他の友軍陰謀のことである。この自白戦術、即ち他を自白して、あとに控へた併行友軍をかくす戦術が件はなくては併行作戦は徹底しないのである。スミルノフにせよ、ピヤタコフにせよ、みなこの自白戦術を相當巧みにやつてのけた。

## 第八章 トハチエフスキー事件

### 一 赤色ナポレオン

キーロフ暗殺によつて苦き経験をなめた陰謀團は、その個々のスターリン系巨頭に對する狙ひ討ちの戦術を一擲し、一舉にスターリンを中心とするポリト・ビウロー全部を殺戮する方針をとつた。そしてそれには個々の暗殺團の冒險だけでは到底目的が達せられぬ。どうしても軍隊の力によらなければならぬ。陰謀團が赤色軍のナポレオンといはれたトハチエフスキー元帥に呼びかけ、彼を中

心とする武力陰謀を計畫したのは、こうした経緯によるのである。

トハチエフスキー事件の中心人物トハチエフスキーは、十月革命の最初から、赤色軍において、最も特色ある存在であつた。第一、彼は勞農軍とは最も縁遠い貴族の家柄に生れ、第二、舊帝政軍の士官から身を起した。従つて、第三、彼は教養が高く、外國語にも長



(トハチエフスキー)

じ、また軍事上の専門知識においては、赤色軍の幹部中、彼と匹敵するものはシヤポシニコフ大將あるのみとさへいはれたほどである。以上に加ふるに、第四、彼はまた眉目秀麗の好男子で、貴族育ちの氣品をそなへ、武骨もの揃ひの赤色軍幹部の間に異彩を放つてゐた。

十月革命の劈頭、若き士官トハチエフスキーは、腐敗し切つた帝政露軍に見切りをつけ、むしろこの際ポリシエウイキーに投じて、ロシアを破壊の中心底に陥れることが、故國を建直し、救出する捷徑であるとなし、十月革命の總本部スモリヌイに飛び込み、トロツキーの傘下に馳せ参じた。トハチエフスキーは反革命討伐戦に出征し、出るところ、殊勳をたてた。特にコルチャク軍との戦争において、武將としての材幹を遺憾なく發揮した。

本文の記者が初めて親しくトハチエフスキーの風貌に接したのは、一九三三年の夏モスクワ來訪のフランス政界の大立物エリオール歓迎の夜會においてであつた。輪廓正しい顔には、四十そこくの若さが光つてゐたが、鬚髪に霜を交へてゐたことを記憶する。トハチエフスキーは一八九三年生れであるから、同年は四十一歳、一九三七年陰謀暴露で銃殺された時が四十五歳であつた。彼がウオロシロフ等とともに赤色軍の最高峰、即ち元帥府に入つたのは、たしか四十三歳の時であつたと思ふ。恐らくロシアのみでなく、世界中の最年少元帥であらう。

トハチエフスキー事件を検討するに當つて、見逃すべからざることは、トハチエフスキー自身の閱歴の外、赤色軍過去の歴史であると思ふ。特にトロツキーが陸海軍人民委員であつた當時の赤色

軍の歴史を繰り見て見ると、思ひ當る節が多々あるを發見する。革命初年、軍部前線反對派の中心をなしたツアリツイン兵團と、一九二〇年のソ波戦争の二つをあげて見ても、トハチエフスキー事件によつて來るところを知るに難くない。

## 二 ツアリツイン兵團

革命初年頃のトロツキーの聲望は、レーニンのそれにつぐものであり、特に軍部内における彼の勢威は殆んど壓倒的であつた。しかし赤色軍の一角に、たゞ一つツアリツイン兵團と稱する一部隊のみ、トロツキーを白眼視し、陸海軍人民委員の命令に對して、屢々反抗的態度に出で、やがて同部隊を中心として、いはゆる前線反對派なるものが頭を擡げて來た。しかしてその頃のツアリツイ



(ウオロシ-ロフ)

ン兵團長は、今日のクレムリン巨頭の一人ウオロシ-ロフで、その背後にあつて政治的指導に當つたのが、當時の前線政務長官スターリンであつたのである。トロツキーは陸海軍人民委員としての權力をもつて、再三ウオロシ-ロフに重壓を加へようとしたが、中央の威令は一向ツアリツインに徹底しない。それはスターリンがウオロシ-ロフを庇護し、使喚したるに因るも

のと見られた。従つて陸海軍人民委員部とツアリツイン兵團との關係は、たゞ益々悪化するのみであつた。トロツキーはレーニン首相に「スターリン召還」「ウオロシ-ロフ嚴罰」を要求してやまなかつた。

當時中央と前線反對派との對立は、何を原因となしたか。反對派の不平を鳴らした點は先づトロツキーが無暗に中央集權方針を振廻して、前線部隊を壓迫する。頻りに専門家重用を名として帝制時代の士官を拔擢する。豪華な専用列車に座乗して戦線を駈廻る有様は、いかにも大名式で、あまりに勞農主義とかけ離れた振舞だ……といつたような小さい不満から端を發したのであつたが、何しろそれを背後から操るものスターリンの巨腕であつたのであるから、事態は中々簡單に片付かぬツアリツイン兵團は、盛んにトロツキーの正規軍組織方針に對抗して、バルチザン組織を主張し、中央集權方針に對して、各部隊の自治擴大を強要し、トロツキーの英雄振り、豪華振りに對して、勞農主義の徹底を強調した。最初小さな不平、感情のもつれから始つたのが、いつの間にか、イデオロギーや政策上の大衝突となり、トロツキーの任命をうけてツアリツイン兵團の參謀たるべくやつて來た將校團（舊帝政軍將校）を、ウォルガ河に浮ぶ船中に監禁するといふ様な事件まで引き起すに到つた。事態益々險惡、つひにレーニン自ら調停に乗出し、わざ／＼中央執行委員長スウェルドロフを前線に急派するといふ騒ぎとなつた。

その後、ツアリツイン兵團は、その主力をもつて、第十軍に改編し、他の一部を基本として、騎

兵第一軍を編制したが、兩者ともに前線反対派の中堅となり、同時にスターリン政務長官の支配下にあつた南露赤色軍の各部隊も、いつの間にか反対派にまき込まれ、いよいよ容易ならぬ形勢を展開して來た。たゞ反革命軍を敵として戦闘を繼續してゐた間は、内訌は表面的に爆發しなかつたがいよいよ動亂鎮定して、諸將の凱旋するや、軍部内におけるトロツキーを中心とする中央派とツァリツイン兵團を中堅とする反対派との對立は益々擴大かつ深刻化した。しかしてこれを黨内における政敵トロツキーを倒すための政争に巧みに利用したのがスターリンである。従つていよいよトロツキー失脚して、赤色軍から逐はるゝや、彼及び彼の腹心に代つて、赤色軍の中樞を乗取つたものは、悉く當時のツァリツイン兵團關係者であつた。即ちスターリン政權の確立とともに陸海軍人民委員となつたのが、當時のツァリツイン兵團長ウオロシローフに外ならぬ。トハチエフスキー事件直前における赤色軍の最高峰五元帥中、その筆頭のウオロシローフはいふまでもなく、ブデヨンスイは騎兵第一軍司令官、エゴロフはウオロシローフの後を襲いで第十軍司令官となり、また西南方面軍司令官として、到るところスターリン政務長官の指導下に立つた關係があり、三元帥はともに當年の前線反対派の巨頭であつたのである。

ブリウヘル元帥は、その頃やはり南露正面に出征したが、反対派に加はつてゐたといふ話を聞かない。と同時に中央派でもなかつたらしく、兩派間の中立にあつたのであらう。ひとりトハチエフスキーに至つては、明らかに、少くともトロツキーが陸海軍人民委員であつた間、中央派であつた

ことは疑を容れない。彼は第一、トロツキーによつて採用され、拔擢され、異數の昇進をなしたのである。第二、舊貴族、舊士官出身であつた關係上當然反対派の勞農主義と相容れなかつたわけである。第三、赤色軍の編制、作戰、方針等においても、トハチエフスキーはトロツキーの正規軍編制、中央集權方針を支持し、バルチザン作戰を排撃した急先鋒の一人であつた。こうした關係から見ても、トハチエフスキーはたしかに往年の前線反対派を中心とする現幹部の間における異分子的存在であつたわけである。

一九二〇年の春、ポーランドに對する宣戰が布告された當時、私はモスクワにあつた。ソ聯が始めて國內戦でなく、外國を相手に正式の戦争をやつたのは、この一戦であつた。ワルソーを目標して進む赤色軍の主力、即ち西部方面軍の司令官に誰を任すべきか。當時クレムリンの評定では相當大きな議論があつたらしいが、結局陸海軍人民委員トロツキーの推擧で、若き常勝將軍トハチエフスキーを拔擢することに決した。しかしてトハチエフスキーの配下におかれた第十五軍司令官がコルク、第三軍司令官がヤキールであつたことも、十六年後のトハチエフスキー事件を胚胎した萌芽の一つともいふことが出來よう。一九二〇年秋トハチエフスキーの進撃は破竹の勢ひそのもの、長驅ウイストラ河に迫り、もう一息でワルソー城内に突入するところまで猛進したのであるが、肝腎のところ、波蘭軍の逆襲に會ひ、戦局俄然一變、トハチエフスキーは空しく後退の餘儀なき羽目に陥つた。ト軍敗退の原因は何にあつたか。それは主として、同軍の左翼に連繫した西南方面軍が、

共同作戦に出でなかつたにあるといふ。當時の西南方面軍司令官はエゴロフ、その政務長官がスターリン、同軍の中堅であつた騎兵第一軍の司令官はブデヨヌイ、政務官がウオロシノロフであつた。西南方面軍はトハチエフスキーのワルソー入城よりも一步さきにリウオーフへ入城せんものと、その方向にのみ進み、トハチエフスキーの左翼支援の使命を果さなかつた。中央からの矢の如き命令で、ブデヨヌイ騎兵團がリウオーフ攻撃を断念し、馬首をワルソー方向に向けた時は、もう既にトハチエフスキー軍後退の後であつた。トハチエフスキーをして九切の巧を一養に缺かしめたものは、ウオロシノロフ、ブデヨヌイ等である。ワルソー入城の夢破れて空しく軍をポーランド境外に引いたトハチエフスキー、コルク、ヤキール等の胸中、ウオシノロフ等に對する怨恨燃ゆるが如きものがあつたと同時に、後者も亦前者に對し、日頃の反感を一層深刻にしたといはれてゐるのである。

一九二五年、ウオロシノロフが、フルンゼの後を襲いで、三代目の陸海軍人民委員となるや、當時參謀次長の要職にあつたトハチエフスキーに對し、レニングラード軍管區司令官に轉任を命じたこれはいふまでもなく、前記の如き過去の關係から、トハチエフスキーを危険視し、中央から地方に送り出さうとしたものに外ならない。然るにこれに對し、戰略戰術委員會が一齊に起つて斷乎反對を唱へた。

### 三 戰略戰術委員會

戰略戰術委員會は、トロツキーが陸海軍人民委員であつた當時に新設し、トハチエフスキーの委員長下に、ヤキール、コルク、ウボレウイチ、エイデマン、プリマコフ等（みなトハチエフスキー事件に連坐した）をその委員に任命し、赤色軍の戰略、戰術、各兵科の操典立案に當らしめたのである。ウオロシノロフは陸海軍人民委員に就任すると同時に、トハチエフスキーの同委員會委員長の職をも褫奪しようとした。然るにヤキール、コルク其他各委員舉つて委員長を支持し、萬一委員長を罷免するにおいては、各委員連袂辭表を提出するであらうと、殆んど威嚇的反抗の態度に出た。當時スターリン政權なほ基礎固まらず、従つてウオロシノロフも赤軍將星に對して十分睨みを利かすことが出来なかつたらしく、各委員の要求を入れ、トハチエフスキー委員長の留任を認諾した。かくてトハチエフスキーはレニングラード軍管區司令官となつたまゝ、モスクワにあつて戰略戰術委員會を統裁し、赤色軍の戰略戰術方面の創業に當つた。そして同委員會委員長として赤色軍の機械化方針を強調し、ウオロシノロフの「赤色軍は革命的熱狂を以て戦ふべし」といふ原則に大反對を唱へ、ウオロシノロフをして兜を脱がせたといふ事實もある。但し、この問題についてのウオロシノロフの讓歩は、議論上の敗北といふよりは、四圍の國際情勢が、ソ聯政府をして、トハチエフスキー案を採用すべく餘儀なくせしめたといふ方が適切かも知れぬ。

恰かもその頃、東にあつては滿洲事變が起り、日本の勢力は黒龍江岸に延びて來た。同時に西にあつては、ドイツの政權が反共產主義を標榜するナチスの手に歸した。トハチエフスキーが國防次官となり、元帥府に列し、専ら赤色軍の機械化方針の貫徹に當り、また東西兩正面同時作戰方針を宣言した時の如きは、赤色軍は全く彼一人の双肩にかゝつてゐたかに見えたほどであつた。當時スターリン政權は、たしかに彼に絶對の信頼をおき、彼の手腕に期待をかけたのである。しかし私は思ふ、かくてトシ／＼拍子に出世し、得意の絶頂に達した時が、同時にトハチエフスキーをして英雄主義、功名主義、ボナパルチズム、ついで冒險陰謀に走らせたのではないかと。トハチエフスキーはひそかに先づ戰略戰術委員會委員にはかり、遙かに同委員會の創設者たるトロツキーの指令を仰いで、除ろにスターリン政權打倒の作戰を練つたのである。

トハチエフスキーの武斷政權奪取計畫については、種々の説が傳はつて居り、そのいづれが事實であつたか、疑問とされてゐる。しかし私は各説とも、みなそれ／＼相當の根據ある事實であつたと思ふ。何といつても、トハチエフスキーは赤色軍きつての名將である。種々奇抜な作戰を幾つもたて、この手が巧く行かぬ場合はあの手で行かうと、何段構へかの計畫をたてゝゐたに相違ない。當時頻りに喧傳されたところでは、モスクワ駐屯のプロレタリア師團に秘策を與へ、一夜にしてクレムリンを占據せしむる計畫であつたといふ。同説によれば、プロレタリア師團長ベトロフスキー中將はトハチエフスキー事件後、直ちに逮捕銃殺され、またプロレタリア師團所屬將兵の逮捕説

が頻りに流布されたのも、右に關聯するものらしい。また他の一説によれば、トハチエフスキーはキーエフ軍管區司令官のヤキールをモスクワ軍管區司令官に轉ぜしめ、彼の指揮下にクレムリンを一舉攻略、巨頭一網打盡を決行せしむる計畫であつたといふ。しかしあとで、右翼トロツキストの公判で、ルイコフの自白したところでは、陰謀團は近く歐洲戰爭が始まるであらうとの豫想を下し、その機會に赤色軍の一部が鋒を逆にして、スターリン政權打倒に當る……といふ筋書であつたといふ。また右翼トロツキストの頭目の一人であり、逮捕直前に自殺したトムスキーは、場合によつては戦線を撤回しても可なりとの意見を出したといふことである。

いづれにしても武力によるスターリン政權打倒の大陰謀であつたといふことは、一九三八年三月の右翼トロツキスト公判において、被告ローゼンゴリツ（前商務人民委員）が彼の私宅でトハチエフスキー、クレステンスキー等々が集り、武斷クーデター決行の密議をこらしたといふ事實を自白したといふことでも一點の疑を容るゝをゆるさぬ。殊にトハチエフスキーの陰謀に、航空化學協會長エイデマンが参畫し、また空軍總監アルクスニス、戦車總監ボーキス、飛行機製作の功勞者ツポレフ博士等が、事件後暫らくたつて、逮捕されたことについても、私は多大の興味を禁じ得ない。クレムリン攻撃には戦車を用ひることを利とし、また、空襲の効果も考慮に入れたことであらう。何しろトハチエフスキーは、赤色軍の新式作戰の創案者であつたと同時に、赤色軍を自動車にのせ



同軍に羽翼をつけた當局者である。従つて赤色軍作戦要路者の外、空軍、戦車隊等々の指揮官もまた、大多数トハチエフスキーの息がかゝつてゐたわけである。クレムリンが空軍及び機械化部隊の總監級をトハチエフスキーの「一味と睨んだのは、少しも不思議とするに足らない。加ふるに、トハチエフスキーは同志のコレクとともに、赤色軍大學校長であつたことがある。これがために二人の校長時代大學校に在學した士官の大部分にも陰謀加擔の疑惑の雲がかゝつた。

かくしてトハチエフスキー陰謀は、正規軍によるスターリン政權打倒の計畫であつた。幾多の陰謀中、眞にクレムリンをして心膽を寒からしめたのは、トハチエフスキー陰謀であつたという。さもあるべきことであつたとしなければならぬ。

#### 四 トハチエフスキーの注進

トハチエフスキー事件について、最近英國の前線總理チャーチルが、その回顧録において、一つの重要な國際秘密を暴露した。チャーチルの回顧録の一節に、

一九三六年秋に、ドイツの最高軍部筋から、トハチエフスキー大統領あての通告があり、もしトハチエフスキーがかつてのヒットラーの提案を利用したいなら、早い方がよろしい。そうでないと、近くソ聯に起る事件は、トハチエフスキーの興へ得る對獨援助を無意味なものにしてしまふという意味を傳へた。トハチエフスキーはこの迷惑な暗示について熟考してゐるうちに、ブライグのソ聯大使館を通じて、

ロシアの重要人物と、ドイツ政府との間に、通信が交されてゐることに気がついた。これはスターリンを打倒して、親獨政策に基く新政權を樹立しようとする、いわゆる軍部と古参ボリシェヴィキの陰謀の一部であつた。トハチエフスキー大統領は、知り得たすべてを、スターリンに通告した。その後ソ聯では、無慈悲なしかし恐らく不必要とはいへない軍事的、政治的肅清が行はれ、一九三七年六月には、檢事ウイシンスキーが秋霜烈日の役割を演じた裁判が續いて開かれた。

ジノウイエフ、ブハーリン、ラヂツクその他革命の古参たち、トハチエフスキー元帥（英皇帝ジョージ六世の戴冠式にソ聯代表として参加した）その他多くの陸軍高官が銃殺された。全部で大尉級以上の士官、役人五千名が「清算」された。ソ聯陸軍はその戦力の大きな犠牲において、親獨分子を排除したのである。ソ聯政府の偏見は目に見えて反獨態度に變つた……

共産主義者ならざるトハチエフスキーが、何故かく共産獨裁王スターリンのために、忠義立てにつとめたか。ヒットラーのドイツに壓迫されたチェコスロワキアとして、スターリンのソ聯にたよるより外はないと考へたのも、その「スターリンへの忠勤」の動機をなしたであらうが、しかしチェコスロワキアの大統領の地位を確保するためには、どうしても左翼政黨の力をかりなければならぬ。さうした自家の政治的野心が、トハチエフスキーをして、クレムリンの機嫌を、スターリンの鼻息をうかばしめたのだといふ説もある。トハチエフスキーが國際話題に上る前に本文の記者の記憶に浮んで來ることは、一九三八年、歐洲で度々芦田均氏に會ふた時、談偶々トハチエフスキーに及んだことである。

一九三八年の夏から秋にかけて、私はさかんに歐洲各國を飛び廻つてゐた。その頃、芦田氏もまた歐洲漫遊で東奔西走し、ベルリン、パリ、ワルソー等々到處で落ち會ひ、またこゝで君に會ふ、と互ひに打ち笑つたものである。ある日例によつてベルリンへ突然やつて來た芦田氏に出會つた。芦田氏曰く、昨日ブライトでベーネシュと久し振りに會見し、とても愉快であつた。ベーネシュは巧みに社會黨左派を操縦し、利用してつひに大統領の地位にまで漕ぎつけた……云々と語り、頻りにベーネシュの時勢を洞察する明敏さ、その左翼政黨利用の政治的手腕を賞讃してやまなかつた。その後十年を経た今日、芦田氏は敗戦日本の政界に乗出し、巧みに時流に乗じて、社會黨に接近し、同黨と提携して政權獲得に成功した。先づ片山内閣の副總理となり、ついで社會黨の西尾氏を副總理にして自ら總理となつた。何だか往年のベーネシュの故智に學んだかのような印象を私に與へた。しかしよく泳ぐものはよく溺る。ベーネシュは一九四八年三月の政變で左翼社會黨と共產黨に壓迫され一朝にして、有名無實の大統領になり、ついで共產黨首領ゴーツワルトのため、とうとう大統領の椅子を奪はれ、野に下つてから間もなく長逝した。ベーネシュは左翼を利用して、政權を獲得し、左翼のために政權を奪はれた。ベーネシュが、トハチエフスキーの陰謀を事前にモスクワへ注進したことは、結果において、危いところで、スターリン政權を救つたことになつた。

## 五 右翼トロツキスト

スターリンがトハチエフスキー陰謀をチェコ大統領ベネシュの注進で嗅ぎつけたのは一九三七年三月のことであるが、この陰謀を調べて行くうちに、またしてもその背後に、右翼トロツキストなる陰謀團のあることが、翌年の一九三八年春になつて漸やくはつきりして來た。

右翼トロツキストの中心人物は、スターリンを扶けて、大同團結と戦つた當時の右翼派領袖ルイコフ、ブハーリン、トムスキー等である。是等右翼の巨頭連はルイコフ、ブハーリンを始めとして温厚な君子揃ひで、スターリンは最初、政敵としての彼等をあたまつからあまく見てゐた。ドロツキーやジノウイエフのように恐れもせず、警戒もあまりやつてゐなかつたらしい。ところが右翼トロツキストは一方赤軍の大ものトハチエフスキーを動かしたばかりでなく、クレムリンを守る拔身の劍をもつゲ・ベ・ウ長官ヤゴードの抱込みに成功した。

ヤゴードがメンジンスキに代つて、ルビヤンカ(ゲ・ベ・ウ本部)の主人公となり濟ましてから、ペロ・モーに運河を始め、幾多大きな土木工事を請負ひ、ゲ・ベ・ウの機密費稼ぎをやつたついでに相當自分のポケットも肥やしたらしい。このことについては、第十章に詳記してある。こうした土木負擔で、莫大な利益を收得したばかりでなく、方々の家宅搜索でまきあげた貴重品や骨董品を、ヤゴード長官自ら失敬して自宅に持ち運ばせる。いつの間にか彼の住宅は、金銀財寶

積んで山をなし、往昔帝制時代の舊家、富豪の邸宅も及ばぬといふ豪勢ぶりを示したが、しかしさうしたブルジョア生活振り、露骨な物質慾はスターリンの最も嫌悪するところ、果然ヤゴードに對するスターリンの信任が、年を逐うて薄らいで來た。そこをつけ込んで兩者の間に、種々の離間策を弄したのもあつたらしい。ヤゴードがスターリンの睨みが恐ろしく、懊惱し始めたのは、一九三四年の頃のこと、恰かも反政府陰謀が幾つかの組織にわかれて暗躍をやりかけた時のことである。ゲ・ベ・ウ幹部の動靜に最も細心の注意を拂つてゐた陰謀派は、早くもヤゴードの苦悶を見抜き、陰謀決行の最大障碍たるゲ・ベ・ウを抱き込むはこの時ぞとばかり、先づブハーリンをしてヤゴード説得に當らしめた。公判における被告の證言にもある通り、ブハーリンはヤゴードをクーデター後の内閣總理に推し、且つ、新總理の下に自分は宣傳大臣をつとめるであらう、恰かもヒットラーにおけるゲッペルスのように……と、まことに巧みに持ち上げたものである。藥劑師上りの彼、未來の總理を約束されただけですつかりのぼせ上り、早速ゲ・ベ・ウ長官在職のまま、反政府陰謀の仲間入りを快諾したのである。

チェルチンスキー死後、ゲ・ベ・ウの睨みが利かなくなつた。獲が弛んで來たといふことは、前項にも記した通りである。それは勿論、長官その他の個性の強さ、人格の力が低落したるに因るはいふまでもないが、同時にもう一つ大きな原因のあつたことを特記しておかなければならぬ。即ちゲ・ベ・ウ長官自ら反政府陰謀に片足踏み入れてゐたということがそれである。實際反革命、反政

府運動を取締る役目のゲ・ベ・ウ長官が、逆に陰謀組に加はらうとは恐らくスターリン等の夢にも豫期しなかつたところであらう。勿論、陰謀加擔後のヤゴードの立場は随分苦しいものであつたに相違ない。表面ゲ・ベ・ウ長官として陰謀關係者の檢舉に當らなければならぬと同時に、裏面陰謀團一方のリーダーとして同志を庇護し、陰謀そのものをかくしてやらなければならぬ。但しヤゴードは相當巧みに二つの役を使ひわけた。即ち成るべく檢舉のスピードをおくらせ、また小物には強く當るが、大物に對しては手をふれない。各陰謀の發覺檢舉がいつも怠慢であつたことは、一つは陰謀團の併行戰術の巧みであつたこと、今一つはヤゴード長官が故意に手を控へたことに因るとしなればならぬ。

陰謀團がゲ・ベ・ウのヤゴードと赤色軍のトハチエフスキー、即ち二大武力の代表者を抱き込んだことは、たしかに大成功といふべく、もし決行の時機を逸せず、適時斷行の決意をなし得たならば、陰謀の目的達成は容易であつたかも知れぬ。蓋しスターリン政權は風前の燈火であつた。

合同本部と併行本部は主としてトロツキストとジノウイエフ派、即ち往年の反幹部大同團結の蒸し返しである。従つて彼等が再びもとの首領トロツキの傘下に集つたのは當然のことである。しかし右翼トロツキストに至つては、必ずしも全部が彼の一味同志であつたとはいへない。トロツキストはいつも黨内の左翼をなして來た。右翼のブハーリンやレイコフは常にトロツキにとつての黨内における政敵であつた。右翼トロツキストといふ名稱からしてすでに不合理なのであるが、し

かも右翼派の首領までが、トロツキを總元締にかついだのは、要するにスターリンに對抗し得るもの、彼あるのみとなしたからではあるまいか。

## 第九章 肅清の旋風

### 一 赤色軍の大手入

ボリシエウイキールソ聯共産黨には、その創立の當初から、一つの不文律の内規があつた。それは黨規はあくまで峻厳でなければならぬが、黨員に對しては如何なる過失を冒しても、死刑だけは行はないといふことである。特にレーニンは黨員の過失に對して、寛大であつた。たとへば十月革命の蜂起に大反對を唱へ、一時脱黨までしたジノウイエフとカーメネフに對し、革命成功後少しもとがめることなく、却て二人を大いに用ゐた。スターリンの時代になつてからも、この不文律の内規は嚴存したらしく、たとへばあれほどスターリンにたてつき、スターリンもまた最大の政敵となしたトロツキーに對し、國外追放を命じただけである。

しかしこの「黨員には死刑を行はず」の内規も、合同本部發覺の頃から、効力を失ひ ジノウイエフ、カーメネフ等古參黨員は片端から銃殺に處せられた。

その頃ヒットラーがライム一派の突撃隊員を手づから射殺したといふ事件があつた。スターリンはヒットラーに學んだといふ説もあつたがしかし陰謀そのものが、スターリンを肉體的に片付けよ

うとしたのであるから、どうしても陰謀の首領株には死刑を行はざるを得なかつたのであらう。チャーチルがその回顧録に書いてゐる如く、無慈悲な、しかし不必要とはいへない措置であつたといへるだらう。

一九三七年から一九三八年にかけて、肅清の旋風はソ聯の全土を吹きまくつた。一九三七年五月トハチエフスキー事件勃發の報傳はるや、本文の記者は取るものも取り敢へず、通過査證（入國査證をとるいとまがなかつたので）だけで、ソ聯に入つた。それは實に肅清旋風のさ中に、その中心地モスクワに飛び込み、その實相を見極めようといふのであつた。

トハチエフスキー事件暴露とともに、トハチエフスキー元帥以下ヤキール、ウボレウイチ各軍管區司令官、コルク前赤色陸軍大學校長、エイデマン航空化學協會長、フェルドマン陸軍省總務局長、レニングラード軍管區副司令官、前駐英武官ブートナ、赤色軍最高幹部どころ七人が、秘密軍事裁判一審で即時銃殺に處せられた。事件は必然世界的センセーションをまきおこしたが、しかしそれは單に次いで來るべき大量檢擧、銃殺の手始めに過ぎなかつた。その後一九三七年から一九三八年にかけての大獄は、實に赤色陸海空軍の幹部大半を片付けてしまつたのである。

先づ、五元帥中、助かつたのは、ウオロシロフとブデヨンスイの二人だけで、あとの三人、トハチエフスキーは銃殺、エゴロフは一九三八年初頭ルビヤンカ入獄、ブリウヘルまた、張鼓峰事件後失脚、相次いで銃殺されらしい。ウオロシロフ國防人民委員の輔佐役に當つた國防次官に

して一九三八年の一年間に失脚したもの六人、即ちトハチエフスキーは前記の通り銃殺、ガマルニツクは自殺、アルクスニス、オルロフ及びウイクトロフは銃殺、エゴロフまた然りである。軍管區司令官としては、前記のヤキールとウボレウイチの外、トハチエフスキー事件後にレーニングラードに榮轉したドイベンコ、白ロシアのペーロフ、北高加索のカシーリン、後バイガルのウユリカーノフ、ウラルのハイリット、ハリコフのドウボウヴィ、沿海州のレワンドフスキー、後高加索のクイブイシェフ、その他戰車總監ボーキス、國防省防空局長セジャキン、同省外事局長ゲッケル等々、赤色軍最高幹部どころは片つばしから逮捕され、その中多くは銃殺された。

海軍の手入はさらに激しく、赤色海軍の双璧といはれたオルロフ、ウイクトロフ兩大將は、ともに國防次官の椅子から引下され、一九三八年五月銃殺された。艦隊司令官はバルチックのシヴコフ太平洋のクレイエフ、黒海のコチャノフ、北海のドウシエノフ等悉く銃殺、海軍大學校では校長ロドリ中將を始め、教官の大部分これまた一九三八年春銃殺されたといはれてゐる。陸海軍に引きつゞいて空軍もまた相當大きな痛手を負つた。即ち空軍總監として國防次官を兼ねてゐたアルクスニスと、ソ聯航空界の大恩人といはれるツィボレツ博士の二人を失つたことは、赤色空軍にとつて何より大きな損失といはなければならぬ。

ツィボレツ博士はA・N・T機の製作者（アレクサンドル・ニコラエウイチ・ツィボレツの頭文字をとつて命名したもの）として知られ、ソ聯飛行機の親といわれたほどのソ聯航空界きつての

巨人である。ソヴェート政府は、あらゆる優遇と尊敬を拂つて博士の研究を奨励したのであるが、一九三八年暮アルクスニス空軍總監の逮捕後間もなく姿を消してしまつた。

軍部の肅清工作は、上層部から逐次下層部に及んだが、佐官級、尉官級の犠牲者は幾萬人あつたか。一九三八年春赤色軍二十周年に際して、記念章を授與された將校名簿によつて調査したところによると、佐官級四千人のうち二千人はやられ、尉官の犠牲者はキーエフと白ロシア軍管区だけでも定員一萬八千人のうち九千七百四十二人、モスクワ軍管区では四千人中二千九百八十四人であつたといふ。但しそれは一九三八年二月頃までのことで、その後また肅清の手はどこまで延びたか。何しろ軍部の手入は、たゞに陰謀参畫の證據歴然たるものばかりでなく、後記エジョフ長官の「やり過ぎ」で、陰謀を企てさうな單に疑ひありと見られたものでも、何等かの理由をつけて逮捕するといふのであるから、赤軍創立以來空前の大獄となつたのである。

## 二 外交陣撫て斬り

一九三七、八年のテロ旋風で、最も手厳しく肅清されたのは赤色軍であるが、その次は外交陣であつたとしなければならぬ。軍部と外交筋が何故かく、ゲ・ベ・ウの手にかゝつたか。それは少しも不思議とするに足らぬ。即ち兩者ともに最初の人民委員にトロツキーを戴き、従つて部内に多数のトロツキー派が残つたからである。また軍部は巨頭自ら陰謀に参畫し、外交官は陰謀團と外國との連絡に當つたことも、エジョーフの觸手が、最も鋭く、兩者の上に動いた有力な原因であるとしなければならぬ。

一九一七年十月革命成り、ソヴェート政府樹立さるゝや、レーニンはトロツキーをあげて外務人民委員（外相）に任じた。トロツキー時代の外交大立物、即ちソヴェート外交の大先輩はもう大概に故人になつてゐる。長らく駐英、駐佛大使であり、貿易人民を兼ね、一時大いに羽振りをかかせた本文の記者にも日ソ貿易の展開について重要なインタヴューを與えたクラインは、レーニンの死去後間もなく病死し、彼と前後してバリとロンドンに大使であつたラコフスキーは、併行本部で、二十年の流刑服役中である。日本にも知られてゐるヨツフェはこれまた一九二七年トロツキーに、貴公の主張することは、正當である。しかし斷行の勇氣を缺いてゐる」との遺言書をのこして自殺を遂げた。二代目の赤色外相チチェーリンの病歿したのは、一九三三年のことであるが、政治的にはそれ以前に死んでゐた。以上の中、クラインを除き、その他は悉くトロツキストとして自他ともに許した領袖株である。その末路蕭條、終りを全うし得なかつたのは當然のことであるといはなければならぬ。

然らばリトヴィノフ外相の時代になつて、外交の現役にのこつたものゝ運命は如何。その次官が三人までそろつて一九三六、七、八年の大獄にひつかかつた。即ちクレステンスキーは右翼トロツキスト事件で處刑され、カラハンはエヌキーゼ事件に連坐して、姿を消し、ソコリニコフは併行本

部で檢舉され、あぶないところで、生命だけ助かり、今なほシベリアのどこかで流刑服役してゐることであらう。

大使級で眞先に召還されたのは、一九三六年駐日大使から駐獨大使に轉じたばかりのユレネフである。

ユレネフがトロツキストとして第一の黒星をつけられたのは、彼のベルシア駐在當時のことである。一九二七年、スターリンの對中國政策が蔣介石の上海クーデターで一大頓挫を來たした時のこと、大使館内の黨員討論會で、ユレネフ大使はトロツキストの立場から、堂々とスターリンの國共合作政策をこきおろした。これに對して、反駁論をまくしたてたのが、一等書記官のストラウツキであった。當年の論敵二人が相前後して日本に來任したのも奇しき縁といふべきか。やがて一人はすであの世の人となり、今一人も日本引揚後杳として音沙汰がない。

日本に駐在したことはないが、日ソ北京條約の締結者であり、北京、ワルソー、アンカラ等に大使として駐在したカラハンは、前記の如く宮殿陰謀の巨魁といはれるエヌキーゼの側杖を喰つて銃殺された。カラハンはその晩年バレーの名女優セミヨノワと結婚したが、それも彼の運命に禍ひしたといふ説もある。

戀の勝利者にして同じくカラハンの轍を踏んだのが、テロの當時ポーランドに駐在したダフチャン大使である。ダフチャンはカラハンと同郷のアルメニア人で、二人とも美貌の持主、ソヴェート

外交官切つての好男子と並び稱されたほどである。その頃、カルメンのはまり役として名を賣つた大劇場専屬のオペラ女優マクサコワとの戀が成功し、ワルソー大使館でたのしい新婚生活を送つてゐたところ、一九三八年春モスクワからマクサコワが大劇場出演を命じて來た。そこで生木をさかれたダフチャンは、余は今様ベトロニーだといつて大使の顯職をふりすて、愛人のあとを追ひ、モスクワへ行つたが、しかし、今様ベトロニーはそのまゝ逮捕の身となり、マクサコワは無罪放免となり、本もの、ベトロニーとは大分筋書が變つてしまつた。

公使級の犠牲も多數に上つた。エストニア駐在のウスチーノフは一九三八年々頭病死を傳へられ、自殺説が事實らしい。ラトヴィア駐在のブロードフスキー、リシアニア駐在のポドリスキー、フィンランド駐在のアスミス各公使は一九三七年から一九三八年春にかけて、召還されたまゝ歸任せず、珠數つなぎに逮捕された。

スカンヂナヴィアではストックホルム駐在、赤い戀、で有名なコロンタイ女史だけは無難であつたが、オスローに駐在したヤクーボウイチは助からない。何しろオスローは亡命のトロツキイがそこからソ聯國內の陰謀團に指令を發してゐたところである。さうした反スターリン派の潜水運動を知らずには怪しからぬと睨まれたわけである。最初ヤクーボウイチはそれと氣付いて、暫らく歸國を漕つてゐたが、ソ聯に残つてゐる長男と次男が逮捕されたと聞き、わが子に累を及ぼすに忍びないといふ親心から、逮捕、銃殺を覺悟の上で、悄然オスローを立つて、モスクワに向つ

た。

スペインに駐在し、内亂の難局に當つて、相當棟腕を揮つた大使ローゼンベルグと總領事アントノフ・オヴセエンコは相前後して召還され、相ついでルビャンカに押へられた。スペインにおけるトロツキストを支援したといふのが祟つたらしい。アントノフ・オヴセエンコは十月革命に際し、冬宮攻撃軍の指揮をとつた當年の革命ヒーローである。バルセロナ總領事からロシア共和國司法人民委員に榮轉召還命令を受け、得々然としてモスクワへ歸つて行つたのであるが、その榮轉は彼を召還する瞞しの手であつた。モスクワ歸着後、司法人民委員の椅子につく代りに、ゲ・ベ・ウ司直の手に捕はれの身となつた。

召還されたものは、みなこうした目に遭ふので、命令を受けても歸らぬものが出て來た。いはゆる「不歸國組」(ネ・ウオズウラシチエンツイ)といふのがそれである。一九三八年春ルーマニア駐在參事官ブテンコはブカレストから突然姿を消し、全歐を騒がしたが、間もなくローマにあらはれ、世人をして二度吃驚させた。つゞいてギリシャ駐在代理公使バルミンもまたパリにのがれ「不歸國」を聲明した。第三人目がブルガリア駐在公使ラスコニコフで、彼は歸國すると稱してソフィアを立つたが、モスクワへ歸つた模様がない。

「不歸國組」は反逆者である。裏切者である。外交官ではないが、コミンテルンの派遣員から、「不歸國組」となつたライスといふ男は、瑞西の山間で慘殺された。犯人の自白したところによる

と、ゲ・ベ・ウはライス一人を討ちとるために、十萬フランの懸賞を投じたといふことである。されば「不歸國組」に加はつたものは、みな逃亡先の國の官憲にすがつて、身邊の安全をはからねばならぬ。彼等が頻りに姿をくらまし、鳴をしづめてゐるのは、こうしたゲ・ベ・ウの追手をのがれようとするに外ならぬのであらう。

これは大獄前のことではあるが、駐日參事官から駐佛參事官に轉じたベロドフスキーがパリーの大使館の石塀を越へて不歸國組に入り、また彼と前後してスカンチナウイア方面に在動してゐたドミトリエフスキーも、召還命令を拒否して、ストックホルムに居残つた。二人とも、不歸國聲明を發してから、著述を刊行して、ソヴェート政治の内幕暴露に健筆を揮つたが、暫らくして鳴を静め今はどこにどうしてゐるかわからない。

もう一人、外務關係ではないが、大もの「不歸國組」がある。それは、長らく赤色軍の西歐特務機關長として、パリ、ブラッセル、アムステルダム等を根據に、八面六臂の活躍をしてゐたクリウイッキーである。彼はその親友ライスが慘殺されたことを聞いて、同じ危険がわが身にもふりかゝつて來はしまいかと疑心暗鬼に襲はれ、スターリンに絶縁状をたゞきつけたまゝ、「不歸國」を宣明した。その後のクリウイッキーは、米國にわたり、さかんに赤色軍やゲ・ベ・ウの機密、特にトハチエフスキー事件、その他の陰謀の真相を米國の新聞紙上に暴露した。こうした暴露記事を一冊に集めたのが、有名な「スターリンにつかえて」(イン・スターリンス・サーヴィス)である。し



かしやがてある日のこと、ニューヨークのあるホテルの一室に、彼の死骸が発見された。不歸國組にして、一人珍らしい幸運者がある。それは前記ギリシヤ駐在代理公使の地位をすて、不歸國組に入つたバルミンである。彼は米國にわたり、米國々籍に入つて、今次の大戦にも、米國將校として出征した。スターリンと絶縁してから十年にして、彼は米國で、前大統領ルーズヴェルトの次女との間の戀に成功し一九四八年夏カナダのある小さな町の教會で結婚の式を挙げたといふ。

## 第十章 亡命のトロツキー

### 一 査證をもため惑星

これよりさき、トルキスタンの山奥アルマ・アタから、さらに「反革命犯人」として國外追放となつたトロツキーは、一九二九年二月十二日、汽船レーニン號にのせられ、黒海の波を越えてボスフォラス海峡に入つた。この日トロツキーはトルコ大統領ケマル・パシアにあてて、

コンスタンチノーブルの門前において、余は貴下に余が決して自己の自由意思によつて來たものでなく、力に強ひられて己むなく今この國境をふみ越えるものであることを通告する。

との聲明を發し、トロツキー一流のゼスチュアを演じた。しかしケマル・パシアの方からは、何の手應へもなかつた。

トロツキーが陸海軍人民委員であつた頃、ソ聯は力をつくして、ケマルのトルコを援助した。特にギリシヤとの戦争に際し、ケマル軍が奇勝を博したのは、主としてトロツキーの援助によつたのであつた。トロツキーはケマルにとつて大恩人である。従つてトルコに亡命して來たトロツキーは、そこでトルコ政府から特別の歡待を受けるであらう、また自由に、その得意の潜行作戦をめぐらす

ことが出来るであらうと、多大の期待を抱いて来たのである。しかしこの期待は、スタンブールに到着後、間もなくあて外れとなつてしまつた。ケマル政府は、トロツキーに對し、その建國の恩人として生命の安全はあくまで保障するが、しかし、モスクワ政府に對する關係上、トロツキーの政治的運動は、絶対に許容しないとの方針をとつた。マルモラ海中のプリンキボ島にかくれたトロツキーは、また／＼そこで讀書と執筆に、その日を送る外ないこととなつた。しかし如何なる不自由の境地にあつても、潜行作戦を全然やめてしまふやうなトロツキーではない。彼はひそかにプリンキボ島から、クレムリンを狙ふ陰謀の手を出したのである。そこでスターリンは、トロツキー監視のために、スタンブールへブリュムキンなるものを、ゲ・ベ・ウ代表として特派して来た。ブリュムキンといへば、革命の初年ドイツ大使ミルバツハ伯を暗殺した男である。さうしたもの凄いで、ゲ・ベ・ウの猛者をあげて、トロツキーの監視役としたのであるが、何ぞ知らん、スタンブールへやつて来たブリュムキンは、いつの間にかスターリンからトロツキーに鞍替してしまつた。スターリンのトロツキーに對する監視役が、トロツキーのスターリンに對する陰謀の相談役に豹變してしまつたのである。しかし、このことは、やがてクレムリンの探知するところとなり、ブリュムキンはモスクワへ、公務の連絡かた／＼歸つて行つたきり、行衛不明となつてしまつた。ミルバツハ大使暗殺といふやうな大罪を犯して、なほ且つ無罪放免となつたブリュムキンも、トロツキーへの鞍替では、もう助からなかつた。ブリュムキン事件以來、トロツキーに對する監視は、トルコ官憲とゲ・ベ・

ウとの協力によつて、いよ／＼嚴重を加へて来た。さすがのトロツキーも、生命こそ安全だが、政治運動の方は手も足も出なくなつた。そこで彼はトルコから居を轉することゝしたが、何しろ大きな世界的危険人物である、天威の革命兒であるトロツキーに對し、入國の査證を與へようといふ國がない。トロツキーが「査證(ウイゼ)を持たぬ惑星」と自稱して、慨嘆したのは、この頃のことである。いろ／＼奔走、工作の揚句、漸やくフランスの査證が手に入りパリに居を移すことが出来た。しかしパリにやつて来たトロツキーも今度は政治運動の方は自由になつて来たが、生命の安全は、誰も保障してくれない。かれの身邊にはいつもモスクワの廻し者がつきまといつて離れない。いづどこで、どんな目にあはされるかわかららない。さうした危険状態にあつては、政治運動の自由も、これを十分に活用することが出来ぬ。そののみか、そろ／＼人民戦線にかはつて来たフランス政府も、またモスクワの要求によつて、トロツキーを壓迫し始めた。機を見るに敏なる彼は、蒼惶としてパリを脱け出し、ノルウエーのオスローに新しい居を定めた。

## ニ オ ス ロ ー

ヨーロッパの花の都のパリから、北歐の小都オスローにかくれたトロツキーは、一見いよ／＼闘志衰へ、政治運動からすつかり手を引いてしまつたかに見えた。さう装ふべく彼もまた頻りにつとめたのであらう。そこでトロツキーに對するゲ・ベ・ウの目も、あまり光らなくなつて来た。オス

ロー政府の壓迫も、甚だ緩漫なものであつたらしい。ところがトロツキーはさうした新しい環境をもつて、陰謀作戦の遂行上、極めて有利であると考へたのである。彼はそろ／＼オスローから號令を下して、スターリン政權打倒の新作戦にとりかかつたのである。

トロツキーのオスローの寓居には、ひそかにピヤタコフが忍んでやつてくる。スミルノフが訪ねて来る。ラヂツクを通じて、トハチエフスキーの密書が届けられる。ルイコフやブハーリンなどからも密使がやつて来る。トロツキーはそこからスターリン反對の巨頭連と氣脈を通じ、ソ聯國內各方面に根をはつてゐるトロツキストを糾合して、先づ合同本部、ついで併行本部、最後に右翼トロツキストとトハチエフスキー等々の陰謀計畫を指導した。

陰謀はいくつかの組織にわかれ、各團體の間には、横の連絡がなく、いはゆる「併行」してゐるのであるが、その元締はいづれも同じトロツキーであつた。かくしてオスローはいつの間にか、スターリン打倒の陰謀作戦地となつたわけである。しかしやがて合同本部が檢舉され、つづいて併行本部もあげられた。しかしまだあとに右翼トロツキストが控へてゐる。その次ぎにトハチエフスキーの武斷陰謀團が待ちかまへてゐる。右翼トロツキストの中にはゲ・ベ・ウの長官ヤゴードも參畫してゐる。トロツキーは、一度、二度失敗しても最後には必らず目的を達し得ると確信してゐたのである。しかし肝心なところで、最後の二大陰謀も洩れてしまつた。まづ右翼トロツキストが捕へられ、間もなくトハチエフスキーの武斷陰謀團も一網打盡、その頭目悉く銃殺に處せられ、トロツ

キーの雄圖は空しく畫餅に歸することゝなつた。

各陰謀失敗の次に來たものは、必然クレムリンのノルウエー政府壓迫であつた。トロツキーをしてオスローを對し陰謀の策源地となさしめたノルウエー政府に對して、重大なる抗議が提起された。オスロー官憲は、トロツキーに對して、退去要求をつきつけるべく餘儀なくされた。ここにおいてトロツキーは、ソ聯國內の同志に「隱忍自重、あくまで假面を脱ぐな」といふ悲壯な命令を發してオスローを立ち、遠くメキシコに渡つてコイオアカンなる一寒村に、身をかくすことゝなつた。

### 三 コイオアカン

コイオアカンに移つたトロツキーは、如何なる還境におかれたか。何しろオスローを知らぬ間に反スターリン陰謀の策源地にされたといふ苦い經驗に懲りたクレムリンのことである。コイオアカンに嚴重な監視の網が張られたことは想像に難くない。一旦入國を許したメキシコ政府は、當然トロツキーの身邊安全を保障しなければならなかつた。トロツキーの寓居は、夜間強力な電燈をもつて照らしされ、何人もよりつくことの出来ない設備までして警戒これつとめるといふ有様だつた。

オスローからコイオアカンに居を移すと同時に、トロツキーは、その作戦方針を一變した。オスローにゐた當時の陰謀作戦を斷然放擲して、今度は第四インターナショナルを中心とする思想作戦に打つて變つた。

トロツキーと第四インターナショナルとの關係を記すに當つて、私はどうしても、前記ブリンキボ島におけるトロツキーとの會見を想起せしむるにあらぬ。

トロツキーは私の質問に對し、余の第四インターナショナル創立説は、全然事實無根の虚説である。余は第三インターナショナルの創業者であり、何人にもこれを譲り渡さぬであらう。余はいつまでも第三インターナショナルの旗手をもつて終始するのである。との答へを與へたのである。このトロツキーの答辯から考へて見ても當時彼が如何にかたく再びモスクワに歸り得るものと信じてゐたかを推察することが出来る。しかしその後の事態は悉く彼の志と違ひ、トロツキーはつひに第三インターナショナルを、スターリン等の手から取り戻すことが出来ず、結局自ら第四インターナショナルを創設して、以て自ら創業の任に當つた第三インターナショナルに對抗しなければならぬ羽目に陥つた。

第三、第四兩インターナショナルの對立は、兩者ともにその作戦が潜行的であり、機密的であるため、表面にはあらはれず、従つて人の目にはたたないが、その國際的軍大性に至つては、決して蔑視するをゆるさない。勿論第四インターナショナルは、亡命客や處々にかくれてゐる革命家の團體に過ぎない。資金はいつも枯渇してゐる。しかしそれかと云つて、第四インターナショナルが無力であるかといふに、さうではない。むしろ第三インターナショナルは、その主體たるソ聯共産黨が、スターリンの現實政策によつて、そのイデオロギーが幾多の矛盾を生じ、思想的に悩んでゐる

のに反して、第四インターナショナルは、十月革命當初來のイデオロギーその儘で進まうとしてゐる。即ち前者は、國家的背景、大きな財源をもつてゐるが、イデオロギーの上において、種々の矛盾をもつてをり、後者は物質的に無力である代りに、思想の上において、強い力をもつてゐるのである。

この二大インターナショナルの實戰的大衝突は、スペインの内亂に際して具現した。スペイン赤色政府の支援者は、第三インターナショナルと第四インターナショナルとの二つであつた。しかし兩者間の暗闘は常に絶えたことがなく、スペイン赤色政府はために、一方フランコ軍とたたかひつゝ、同時に他方内部の抗争を続けなければならなかつた。マドリードにゐたソ聯政府の代表者間にもクレムリンの指令によつて動くものと、トロツキーの采配下に立つものとがあつて終始紛争をくり返してゐた。スペイン赤色政府が最後に崩壊滅亡の悲運に陥つた主要なる原因は、實にその支持者たる第三、第四兩インターナショナルの對立抗争にあつたとさへいはれてゐるのである。これをもつてしても、第四インターナショナルが如何に大きな國際的存在であつたかを推察することが出来るのである。クレムリンが常に第四インターナショナルに對して警戒の目を光らせてゐたのは、勿論よくその相手の何物なるかを知つてゐたからであるとしなければならぬ。

但し、第四インターナショナルの強味が、そのイデオロギーの徹底性、一貫性にあるといふことは、いひ換へれば、このイデオロギーの本尊であるトロツキーがリーダーシップを揮つて來たこと

が、第四インターナショナルの存在を大ならしめた主要原因であるといふことになるわけである。スターリンが特にトロツキーを危険視したのもまたここにあるとしなければならぬ。

幸運はつひに再び「天成の革命家」トロツキーに戻つて來なかつた。ブリンキボから、パリに、パリからオスローに、オスローからコイオアカンに、轉々流浪を續けたトロツキーは、彼の待望した歐洲大戦勃發後間もないこと、その最後の亡命地メキシコにおいて、つひに出入りの一青年に、棍棒で打たれて無残な最期を遂げた。いきをひきとる寸前、

「スターリンはいつも失敗を繰返して來たが今度はつひに成功した。」

といふ意味深き臨終の言葉を殘してこの世を去つたといはれてゐる。まことに悲惨な淋しい最期であつたが、しかもなほ且つ彼の死は、國際的出來事の一つたるを失はなかつた。

あゝした殆ど全世界から隔離された亡命孤獨の逆境にあり乍ら、なほ且つ世界各國から「危険なる革命家」として恐怖され、また政敵スターリンをして、枕を高くして安眠する能はざらしめたトロツキーは、たしかに一つの特種な國際的存在であつたとななければならぬ。然らば彼の存在をして、かく特色づけ、國際的意義をもたせたものは何か。それは勿論彼の革命家としての經歷やその個性の強さばかりでなく同時に彼をリーダーと仰ぐ第四インターナショナルの勢力によるものであつたとななければならぬ。

トロツキストは今なほ多數ソ聯の内部に、特に共產黨の中に殘つてゐるだらうことは、現當局も

認めてゐる事實である。然しトロツキストの多くは、一九三七、八年のテロ以來、すつかり地下に潜るか、地上にあらはれてゐるものも、假面をかぶつて、スターリン政權の爲めに、忠勤を勤んで居り、容易にその正體を捕捉することが出來ない。しかもトロツキーの命令一下、彼等は一齊に假面を脱ぎすて、驟起することになつてゐたのである。しかるにトロツキーの死によりそのリーダーを失つた第四インターナショナルは必然無力とならざるを得ない。かくて二十年の長きに亘り互に喰ふか喰はれるかの兩雄激闘もトロツキー倒れてつひにその幕を閉じたのである。亡命地にあつて手も足も出ない状態にあり乍らも、常にスターリンの周圍に、陰謀の網を擲げ、刺客の手を廻はし相手をして安眠し能はざらしめたトロツキーの潜勢力も驚歎に値するが、スターリンもまたさるもの常にその陰謀の網を破つて遂に最後の勝利を勝ち得たのである。

## 第十一章 ゲ・ベ・ウ

### 一 ルビヤンカの主人公

ソ聯を擧げて、肅清地獄に投じ、一億七千萬の國民を、テロの暗闇に閉ぢこめたものは何か。それはいふまでもなく、共產黨幹部を、クレムリンを、スターリンを守る「拔身の劍」ゲ・ベ・ウに外ならぬ。

ゲ・ベ・ウの前身をチェ・カーといひ、兩者を通じてこの「拔身の劍」を握つたものは、六入ある。即ち初代のウリツキーから二代目チェルチンスキー、三代目メンジンスキー、四代目ヤゴード、五代目エジョーフを経て現代のベリヤに及んでゐる。

ウリツキーが始めてチェ・カー（反革命取締特別委員會）の長官にあげられたのは、十月革命劈頭のことで、ポリシエウイキーの本部がまだレーニングラードのスモリーヌイにあつた頃のことである。彼はまだ自ら「拔身の劍」を振り廻はすに至らぬ中に、逆に反対派の社會革命黨員に暗殺され、彼に代つて二代目長官となつたのが、チェルチンスキーである。

チェルチンスキー時代のチェ・カーは、名實共に鋭い「拔身の劍」であつた。彼の爲めに斬りま

くられた反革命派は、幾千、幾萬否な幾十萬をもつて數へなければならぬであらう。秋霜烈日そのもの、彼は、時々テロをやり過ぎて、レーニンから制肘を受けたことさへある。レーニンの死去後チェルチンスキーは主として黨書記長スターリンの指導下に動くことゝなつた。その頃チェ・カーはもうゲ・ベ・ウにかわつてゐた。ゲ・ベ・ウのことをルビヤンカといふ。それはモスクワに移つてからルビアンカ廣場に面する五階建のビルがその本部となつたからである。

ゲ・ベ・ウは黨の政治部と書記部に隸屬し、スターリンは細大洩れなくゲ・ベ・ウに對して指導權を振廻はさうとした。しかしチェルチンスキー時代のゲ・ベ・ウは一から十まで、スターリンの願使に従ふものではなかつた。傲岸にして直情徑行のチェルチンスキーは、往々独自の行動をとりスターリンに反抗したこともある。ある日彼はスターリンと何かの問題について激論し、非常な昂奮状態で歸宅したまゝ、心臓麻痺で急死を遂げた。無暗に熱し昂奮し、のぼせあがる癖のチェルチンスキーと、あくまで冷靜で、決して昂奮しない、どんな場合でもニコ／＼笑つてゐるスターリンとは到底相撲にならぬ。チェルチンスキーは、まだ五十代の働きざかりで頓死した。

チェルチンスキーの死後、その後任問題がボリト・ピウロー内で激しい爭論をまき起した。次のゲ・ベ・ウ長官として、ジノウイエフは自派のスマルガを推し、スターリンは同族であり、腹心とする、オルチョニキーゼを拔擢しようとして双方譲らず、結局兩方にとつて無難な毒にも藥にもならぬメンジンスキー次長を昇格させることで漸やく折合がついた。

メンジンスキーはポリシェウイキー幹部の中で、特異な存在であつた。その出身がポーランドの相當名を知られた學者の家である。ペテルブルグ大學を卒へた上に、フランスに留學し、専門の法律を勉強した。彼はたゞに學識が深く、外國語に長じたばかりでなく、藝術の方面において玄人を凌ぐものがあつた。三月革命後、ポリシェウイキーがネワ河畔に建つ舞妓クセシンスカヤ邸に陣取り、スターリン、モロトフを始め、過激派の猛者が土足のまゝソフアーの上にふんぞりかへり、さかんに口角泡を飛ばして、赤い氣焰をあげたものだが、ひとりメンジンスキーは奥の一室に閉ぢ籠り、靜かにクセシンスカヤの残して行つたグラント・ピアノを弾きつゝ、革命の風雲どこを吹くかといつた風であつた。

メンジンスキーはルビヤンカの主人公、ゲ・ベ・ウ長官になつた時も、長官室へ眞先に持ち込んだのはピアノであつた。病身に上品、高雅な優しい性格の持主メンジンスキーが、ソ聯全國民の恐怖の的たるゲ・ベ・ウの長官となつたことは、まことに皮肉な出來事である。彼は勿論長官として黨幹部會議へ報告の任に當つただけで、逮捕、投獄、銃殺といつたやうな手荒い仕事は、全部次長のトリリッセルとヤゴダに任せ切つてゐた。メンジンスキーはスターリンの豫期した如く、毒にも薬にもならぬ無難な存在であつた。

メンジンスキーは一九三四年五月十日、突然病死した。平素から病身であつた彼のことが、何人も彼の死が病氣に因るものと信じてゐたが、何ぞ知らん、一九三八年春の右翼トロツキストの公判で

次長のヤゴダが長官のメンジンスキーに一服盛つたのだといふことを、ヤゴダ自身がベラノと自白に及んだ。

メンジンスキー毒殺の報道を手にして本文の記者が想ひ出さずに居れなかつたのは、トロツキーの著書「余の生涯(マヤ・ジーズニ)」である。トロツキーは一九二九年トルコに亡命してから間もなく、あの白砂青松、風光明媚のプリンキボ島で執筆し、自叙傳を書いた。それは上、下二巻から成り、トロツキー一流の名文で、本文の記者も多大の興味をもつて、くり返し讀んでみた。その中の一節に、

ある日メンジンスキーが自分のところへやつて來た。色々雑談を交はしたあとで、彼は急に聲をおとして「同志トロツキー！ 貴下はスターリンが貴下に對して、面白からぬ工作を進めてゐることを知つてゐますか？」といふ。余は驚ろいて「何ッ？ バカなことを」と彼がもつと話を續けようとしたのを遮ぎつた。メンジンスキーは余が彼の話に乗らないことに失望して、肩をすぼめながら辭去した……

とある。私はこの一節を讀んで、もうこれだけで、メンジンスキーの運命がきまつたと直感した。果してメンジンスキーは、その後一年たぬ中に、天命ならざる死を遂げた。

メンジンスキー長官の生前、二人の次長ヤゴダとトリリッセルの間に、次の長官の椅子を狙つてかくれた競争が始まつたが、間もなくブリュムキン事件で、トリリッセルは難なく蹴落され、ゲ

・ベ・ウ内部の重要事務はヤゴード一人で切廻すことゝなつた。プリムキン事件といふのは、既述の如くトリリッセルの推挙で、トルコ亡命のトロツキー監視のためにスタンブールへ派遣されたプリムキンがいつの間にか、相手のトロツキー側に寝返り、トロツキーと國內残留のトロツキストとの間の連絡係りとなつた。このことが發覺してプリムキンが銃殺されると同時に、彼の推挙者であつたトリリッセルもまた直ちに歩脚したわけである。

プリムキン事件を利用して、ヤゴードは巧みに一石二鳥の手を打つた。彼は同事件によつて、第一、競争者トリリッセルをはたきおとした。第二、トロツキーと國內同志の連絡を素ツ破抜いてスターリンの覺え目出度きを得た。換言すれば、次の長官の椅子が約束された。かくなつた以上は一日も早く長官になり度い。彼は御手のものゝ毒藥一服を、メンジンスキー長官に盛つた。ヤゴードはチエルチンスキーやメンジンスキーに比較して、小ものである。小ものであるだけに、忠勤なのであらう。プリムキン事件の論功として、約束通り、四代目のルビヤンカの主人公として、次長ヤゴードが拔擢された。

## 二 經費稼き

ヤゴードは藥劑師出身で、郷里のシンビールスクにゐた頃、同市にかくれてゐたポリシエウイキ一の領袖スウエルドローフ（十月革命後、中央執行委員長となつた）の門を叩いて、マルキシズム

の講義を聴き、赤い教育を受けた。革命後スウエルドローフの推輓によつて、チエ・カーに入り、グン／＼出世して、つひに長官まで漕ぎつけた。彼の得意としたことが三つある。その一つは、御手のものゝ一服盛ること、第二は經費稼き、第三は裁判の名監督であつたことである。

ヤゴードの一服でやられたものは少くない。彼自ら右翼トロツキストの公判で告白したところだけでも、大ゴリキー、小ゴリキーのベシコフ、前記の長官メンジンスキーの三人は、たしかにヤゴードの盛つた一服の犠牲であつた。拔身の劍を揮ふ外に「一服盛る」に巧みな専門藥劑師のゲ・ベ・ウ長官！ルビヤンカは飛んでもない主人公を迎へたものである。

小ものヤゴードがゲ・ベ・ウ長官になつてからは何事につけ、スターリン書記長の命是れ従ふのみであつた。その頃からゲ・ベ・ウは、俄かに人員を増加し、組織を擴大した。殊に鐵道や國境の警備を名として、ゲ・ベ・ウ軍なるものを編成し、これに普通の赤色軍以上の裝備をつけた。これはゲ・ベ・ウの睨みを一般の官民の外、軍隊にも利かせようといふ遠謀深慮から出發したものと思はなければならぬ。人員の増加、組織の擴大、そしてゲ・ベ・ウ軍の新編成に伴ひ、豫算は急激に増加して來た。内務人民委員部の豫算では、とても賄ひ切れない。加ふるにゲ・ベ・ウには莫大な機密費が必要である。如何にして増大豫算を補填すべきか。スターリンは「大きな土木工事の請負で經費を稼げ」とヤゴードに命じたが、ヤゴードはこのスターリンの命令をまことに手際よくやつてのけた。



ペロ・モール運河、ウオルガ運河、黒龍鐵道の複線、バイカル湖北方を迂迴するバム鐵道等々の大工事は、ゲ・ベ・ウが政府から請負ひ、莫大な工事費の支給を受けた。何しろ勞銀いらすの囚人をつかつての工事であるから、ゲ・ベ・ウの利益は莫大である。この莫大の収益こそ、ゲ・ベ・ウにとつてまさに「鬼に金棒」といふべく、ルビヤンカの活動は、無制限にのびて來た。

しかし経費稼ぎ、土木工事請負が、うまく行つて、金が儲かると、つひその一部を自分のポケットに入れ度くなる。その上、方々の家宅搜索などで没收した財寶を、失敬して自宅へ持ち込む。そうした事が度々重るとつひ長官の上の長官スターリンの目が光る。スターリンはそうした物質慾の濃い黨員が大嫌ひである。たゞ然し、スターリンはまだそれを見ぬ振りをしていた。

合同本部の裁判においてはヤゴードはジノウイエフやカーメネフの如き大ものをして、彼の吹く笛のまゝに踊らせすぐれた手並みをみせたものであつた。ところが合同本部に對して、鮮やかであつたヤゴードが、同じ陰謀でも併行本部の段になつて俄かに手先が鈍り出した。ヤゴードはスウェルドローフの門弟であり、その姪の婿である。スウェルドローフはトロツキの親友であり、且つスウェルドローフ、トロツキー、ヤゴード三人とも同族のユダヤ人である。異いぞ！とスターリンがその鋭い感覺を働らかせて見ると果してそこには異いものがあつた。併行本部の後ろにかくれてゐたのが右翼トロツキストである。右翼トロツキストは一方軍部の巨頭トハチエフスキー、他方ゲ・ベ・ウの長官ヤゴードを味方に抱き込み、この二つの「實力」「武力」をもつて、スターリン政

權を打倒しようといふのである。さすがのスターリンもこれには驚いたことであらう。スターリンを守る「拔身の劍」が、いつの間にか、スターリンを斬らんがために磨かれてゐようとは……

### 三 密告逆戦術にのせらる

ヤゴードに代り、五代目ゲ・ベ・ウ長官として登場したのはエジヨーフである。時恰かも反スターリン陰謀續發の秋である。スターリンはエジヨーフをして「拔身の劍」を磨かせ、思ふ存斬りまくることとしたのである。エジヨーフは正直者である。彼ならば右顧左眄することなく、スターリンの命ずるがまゝに、直進するであらう。そうしたスターリンの期待は裏切られなかつた。エジヨーフ長官は、一九三七年から一九三八年にかけ、二年間、スターリンの爲めに、晝夜兼行「拔身の劍」を揮ひまくつて、大いに忠勤を働んだ。しかし彼はこの間大きな失策を演じた。右翼トロツキストの公判の劈頭において、クレステンスキー（外務次官）が堂々と豫審における陳述を覆へしはつきり裁判の裏をかいてしまつた。

ルビヤンカは一九三六、七、八年、大いに密告を奨励した。トロツキストは地下に潜つてゐる。假面をかぶつてゐる。容易に正體をあらはさない。こうしたかくれたトロツキストを密告せよ、密告したものには、相當の行賞があるであらう……といつてさかんに密告を奨励した。するとあたまのよいトロツキストは逆にスターリン直系派の者を、あれはトロツキストだ、反スターリン派だ、

と逆密告をやつたものだ。正直なエジヨーフは、それを一々取りあげ、正真正銘のスターリニストを少からず、壁につきつけてしまった。間もなく党内にエジヨーフの「肅清やり過ぎ」に對して、反對の聲があがつて來た。恰度その頃、肅清工作は一段落を告げ、エジヨーフはその使命を終つた彼は先づ遞信人民委員に左遷され、ついで間もなくソヴェート官邊から姿を消してしまつた。

#### 四 曇りから晴れへ

エジヨーフに代つて、六代目ゲ・ベ・ウ長官となり、今日なほその現職にあるのは、ベリアである。ベリアの就任した時は、もうすでにスターリンが、肅清工作中止の宣言を發した後のことで、彼は最初から「拔身の劍」を鞘におさめて出て來た。ゲ・ベ・ウはエジヨーフ時代の陰鬱な空からベリアの時代に變つて明るく晴れ渡つた。



(ベリア)

ベリアはいはゆる郷土組の一人である。即ち彼はスターリンと同族のジョルジア人で、一説には親戚關係にあるともいはれてゐる。長く郷里のコーカサスにあり、地方黨部の書記長であつた。一九三八年末、中央に乗り出し、いきなりルビヤンカの主人公になつた。しかしそれは恰かもテロの大風一過後の

ことであり、且つ歐洲の風雲急を告げソ聯はいはゆる對戦體制をとるの必要に迫られた時である。ニコノフ、顔のゲ・ベ・ウ長官ベリアは、ソ聯の國內を明るくし、國民をして政府に親しませるよう導いた。やがて今次の大戦が始まり、ソ聯もまた戦渦にまきこまれ、最初の二年間、非常な苦戦を嘗めた。そうした苦戦中でも、ソ聯の國內に何等の動搖を見せなかつたのは、ベリアの手腕凡ならざるに因つたとしなければならぬ。彼は開戦と同時に戦時内閣に入り、戦争指導の最高機關に列し、大いにスターリンを扶けた。ベリアがルビヤンカに入つてから、もう十年になる。その間「拔身の劍」を鞘におさめて抜かぬところに、ベリアの凡ならざる所以があるのではあるまいか。

## 第十二章 五ヶ年計畫

### 一 一國社會主義

これよりさき、一九二八年、スターリンはトロツキーの追放で、反対派の主要勢力が一應片付いたと考へたらしい。まだあとにブハーリンやリュコフの率ゐる右翼派といふ異分子が、残つてゐるが、これはたいして恐るゝに足らない。斯くたかをくゝつてゐたらしい。實は彈壓された反対派は地下にもぐつただけで、反対運動をやめたわけではない。却て潜行運動に移つただけに、反対派の運動は、眞剣となり、危険性を増大した。その後まもなく幾多の陰謀が續發して、スターリンの獨裁政權は、屢々危急存亡の間をさまよつた。しかしそれはまだ氣付くに至らなかつたスターリンは、少くとも表面においては、たしかに一九二八年で、反対派排撃が一段落を告げたと信じたらしい。長い間トロツキーを首領とする反対派との闘争のために、渾身の智腦をしぼつてゐたスターリンは、今や反対派に對して、何等顧慮することなく、その全力をあげて、自家の政策斷行に傾倒する機會が到來したと考へた。平素高唱して來た「一國社會主義」の理念貫徹、これが具現實行に向つて邁進しなければならぬ。それがまた政治家として、主義者として、當然なすべき義務である。

一九二八年秋、スターリンはいよいよ一國社會主義の建設に乗り出すべく、決然として起つた。一國社會主義具現の實行案が、有名なソ聯經濟建設五ヶ年計畫である。

五ヶ年計畫の記述に移る前に、一應一國社會主義とは何か。その梗概を検討しておく必要がある。スターリニズムとは何ぞや。一國社會主義とは何か。勿論小冊子の盡すところではないが、こゝにその綱領だけでも記述しておきたい。

スターリンが新原理一國社會主義の根本論據としてあげたのが次の二つである。スターリン曰く一國社會主義の第一の論據は資本主義國間幾多の反目があるといふことである。詳しくいへば、資本主義の陣營には、第十六次黨大會で喝破せる如く、四大反目がある。第一、戰勝國と戰敗國間の反目、第二、戰勝國同志間の反目、第三、強國とその植民地との間の反目、最後に、第四、資本階級と労働階級との階級闘争がそれである。かくして資本主義の各國は、お互ひ同志の間で、唾み合つてゐる。彼等は少くとも當分の間、協力一致して「赤いロシア」に對し、「シベリア出兵當時の如き」討赤十字軍「をおこし得ない状態にある。そこで、彼等白色國が、互ひに反目し合つてゐる間に、われ等ボリシェウイキーは先づ一つの國、即ちソヴェート聯邦において、社會主義國を建設して見よう。それはまた十分可能なことであるといふのが、スターリニズムの第一の論據である。そしてその第二の論據は、ソヴェート聯邦は、農業國であり、また産業の發達が、非常におくれてはゐるが、しかし天然資源は無盡藏で、自給自足が出来る。如何なる建設にも必要な材料を提供し

得る……といふ點である。

一方資本主義國は、互ひに唾み合つてゐるので、彼等は到底力を協せて「赤いロシア」に攻めて來るような餘裕をもたぬ。他の一方ロシア國內にあつては、無盡藏の資源がある。従つて資本主義國の包圍の中にあり乍ら、われ等ボリシェウイキーが、ロシア一國において社會主義經濟を建設することは、十分可能なことである……これが即ちスターリニズムの「一國社會主義建設可能」の原理であつてパーマネント・レヴオリューション（不斷の革命）を標榜するトロツキズムとは、全然その方向を異にしてゐるのである。單に純理論的見地から兩者を比較するならば、或はトロツキズムの方が、マルキシズムをより嚴格に正解してゐると見るべきかも知れぬ。しかしトロツキズムはそれだけ理想に走り過ぎる嫌ひがある。これに反して、スターリニズムはどこまでも實際に即してゐるのではあるまいか。殊に當時國內到るところ、外國の爲めに、露國の資材を投じて平然たる第三インターナショナルの行動に對して不満の聲が漸やく高まつて來た折柄でもあり、スターリンの「國內建設第一主義」は廣く多數國民の趨向に投じた。加うるにスターリンは黨の幹部機關を握り、ソヴェート官憲の權力に據つて起つたので、流石のトロツキー派も、齒がたえず、爭覇五年の後、つひに無残な敗北を遂げた。トロツキーに次ぐ大立物ジノウイェフやカーメネフは前記の如く、合同本部陰謀發覺して公判に引出さるゝや、五ヶ年計畫の失敗を待つてゐたが、同計劃は豫期に反して成功した。われ等は理論においても、實際においても免を脱ぐの外ないこととなり、窮餘

の揚句、スターリン暗殺の陰謀を企てた」と自白し、明らかに一國社會主義の勝利を認めた。

## 二 第一次計畫

一九二九年の春、本文の記者の五度目の赤露入りは、恰かもソ聯が第一次五ヶ年計畫の實行に乗り出したばかりの時に投じた。前年の秋、全聯邦共產黨大會は、スターリンの提唱にかゝる一國社會主義實現の具體案として、五ヶ年間の長期にわたる生産大擴張計畫を決議した。ついでこの黨大會の決議に従ひソヴェート政府は尨大なる第一次五ヶ年計畫を發表し、直ちにその實行にとりかゝつた。

ソヴェート政府のこうした學國的政策的遂行には、いつも大がりの宣傳が伴ふ。到るところ街頭のポスターに、映畫館の映畫面に、劇場の舞臺に、五ヶ年計畫がさかんに宣傳されてゐる。計畫實行の根幹をなす各地の炭坑、鑛山、工場は社會主義者の御題目「八時間労働」をかなぐりすて、晝夜兼行の大増産に移つた。

一九二九年のソ聯は、全く國を擧げて、この計畫の實行に没頭してゐた。明けても暮れても「ピヤチレトカ」（五ヶ年計劃の略稱）で話が持ち切りである。各部門毎に社會主義競争が始まつた。それまでやかましかつた黨内の理論闘争、トロツキスト排撃などは、トロツキーの國外追放と五ヶ年計畫の發表を契機としてバタリと取止めとなつた。五ヶ年計畫の流行は、各自の家庭にまでしみ

込み、私の家では借金を五ヶ年々賦で返すことにした。私の家内は五ヶ年計畫で稼ぎ、シユバ一枚買入れることにした」といつたような具合に、なんでもかでも五ヶ年計畫でなければ、夜が明けぬといつたかたちである。國全體が一つの大きなオーケストラとなつて、五ヶ年計畫の大奏樂を始めたかの觀がある。こうした舉國的五ヶ年計畫大騒ぎのさ中に、私はモスクワへ飛込んだのである。すつかり今までのソ聯とは勝手が違ふ。理論闘争がない。ゲ・ベ・ウが「拔身の劍」を鞘におさめてゐる。トロツキーを追ひ出したあとのソ聯は、いふまでもなくスターリンの獨り天下である。彼はもう何等後顧の憂ひなく（實は大いに憂ふべきものが潜在してゐたのであるが）自家の提唱たる一國社會主義原理の實現、即ち五ヶ年計畫の遂行に取りかかり得たわけである。

五ヶ年計畫は、その名稱の如く、五ヶ年間を割つてその期間に計畫的に、逐年的に、組織的に、國內の産業を建直し、生産の大増收をはからうといふのであつて、部門によつては五倍、六倍乃至は十倍にも増加しようといふまことに放膽な、急激な、そして大がかりな計劃である。この計畫一度發表されるや、ソ聯の國內では上記の如く萬事を忘れてこの計畫に没頭したが、國外では「またポリシエウイキーの大法螺か、クレムリンの夢であろう、ユートピアであらう」とあたまからこれを、冷笑と輕侮をもつて迎へた。世界各國の識者は舉つて五ヶ年計畫を一笑に附した觀があつた。日本もその例に洩れなかつたことはいふまでもない。しかし一九二九年、自ら五ヶ年計畫實行の現場に飛び込んだ本文の記者は、最初からソ聯の五ヶ年計畫に對して、國外識者の冷笑的態度とは正

反對の見地に立たざるを得なかつた。何しろ一九二九年春、上記の如き「五ヶ年計畫の舉國的大オーケストラ狂奏樂」中に飛び込んで耳を聳さんばかりのピヤチレートカ大宣傳に酔はされた私は、たゞもうこれはいはれた計畫である。この計畫で農業國のソ聯が工業國に一變するかも知れぬとの強い、そして直覺的な印象におさへつけられてしまつた。

本文の記者は新聞記者としてその後四年目に、再びソ聯を訪ひ、一九三二年から一九三三年にかけて二年間（第一次計畫の最終年と第二次計畫の初年即ち五ヶ年計畫にとつて最も大切な二年）をモスクワに滞留した動機もこの五ヶ年計畫への強い關心からであつた。ソ聯は天産無盡藏の國であると同時に、ソヴェート政府は強大なる獨裁権力である。この強權をもつて柔順なる一億七千萬の國民を動かし、無盡藏な天産をドシ／＼開拓して行くのであるから、五ヶ年計畫は、十分實現の可能性がある。そしてその實現の曉、ソ聯が大きな生産國となるは火を賭るよりも明らかであるといふ結論を當時筆者は下してゐた。

果して破壊を知つて建設を知らぬといわれていたポリシエウイキーは、驚ろくべき建設能力を發揮した。何しろ「戰をする氣持で頑張れ」といふのが五ヶ年計畫遂行當時の全國的宣傳標語である。主要な工場内では、軍隊的な規律が布かれ、怠業者はドシ／＼嚴罰に處せられる、能率をあげたものには勳章を授ける、社會主義競争で勝利を獲得した工場や農場は、全國的に仰々しく表彰される。敗北者は嚴しい譴責を受ける。石炭、石油、鐵の生産高はこれを毎日の新聞紙上に掲載（この發表

は歐洲戰爭勃發の直前中止となつた。して、その増産を奨励する。能率増進のスタハーフ運動のおこつたのも第一次五ヶ年計畫遂行中のことである。ソ聯邦の英雄は生産業務者中からもドンク選抜表彰された。列國は第二次五ヶ年計劃の終り頃に始めて、これを正視し、今更らの如く周章て出すようになったらしく思ふ。しかしこの八年の間に、五ヶ年計畫を二つ繰返し、ソ聯は、もうすつかり強大な國になつてしまつた。五ヶ年計畫は上記の如く、五年毎にあらゆる生産を十數倍に増加しようといふ急激な計畫であるだけに、大きな無理があり、國民に對して大きな犠牲を要求するものである。殊に第一次五ヶ年計畫は、殆んど國民一般の生活を無視したかの嫌ひがあつたほど無理な計畫であつた。特に第一次五ヶ年計畫は重工業に重點を置き、輕工業は一時休業といつたかたちであつたからさあ大變である。國民は穿くに靴なく、着るに衣なしといつた慘狀が、國內各所で起つたわけである。一九三二年の秋第一次五ヶ年計畫の末期（同計畫は一九二八年下半年に始まり四ヶ年半で完成した、さなきだに無理な五ヶ年計畫を四ヶ年半でやつてのけたのだから一層無理が加はつた）には國內の一般狀態、國民の生活狀態は悲惨なものであつた。そしてこうした慘狀を見たものは、勿論五ヶ年計畫失敗説をとりあげざるを得ない。當時のソヴェート政府は對外政策において徹頭徹尾平和強調方針を堅持し、列國に向つて不可侵條約の締結を提議する、安全保障聯盟の結成を唱導する、ついに今までソヴェートの敵として蛇蝎の如く嫌つてゐた國際聯盟に自ら進んで加入するといつたやうな具合に、一にも平和、二にも平和といつた態度であつたが、これも五

ヶ年計畫破綻で戰爭が恐ろしいからだとい一般に見られていた。

併しこうした平和一點張りの政策も、實は五ヶ年計畫遂行のために、一つは戰爭を避ける、二つには列國から機械や資本を輸入する遠謀深慮の政策であつた。國民生活は極度に低下し、政治の蔽物庫といはれるウクライナその他饑饉が起るといふありさまであつたが、その間にウラルの山間に、ドンバスの盆地に、クズネツツの炭田に、トルキスタンの砂原に、シベリアの密林をきり開いたあとに、新しい工業都市が勃興する、大きな工場が建てられる、煙突が林立する、鋤と鐵、馬と牛ばかりであつたあの廣漠無涯の麥畑に、コンバインが姿をあらはす、見慣れぬトラクターが駆け廻る、ソ聯の様相はモスクワから遠くはなれたところで、そして外國人の眼のとどかぬところでグン／＼變つて行くのであつた。

### 三 興味點二つ

本文の記者が、ソ聯五ヶ年計畫について、その頃特に興味を禁じ得なかつたのは、そのスピードの目まぐるしい速さの點であつた。何故ソ聯はテンポをかく急いだか。スターリンのいふところによると、ロシアの産業狀態は、歐米先進國に比して、少くとも半世紀おくれである。しかもこうした後進國において、工業の發達を必要條件とする社會主義を建設し、先進國の資本主義經濟と競争しようといふのであるからどうしてもレーニン標語の如く、歐米先進に「追ひ付き」これを「追

越さなければならぬ。そのためには「並足」では間に合はぬ。「駈足」で走らなければならぬ。特に最初の第一次計畫は、超スピードで進められなければならぬ。最大のテンポをもつて、邁進しなければならぬこととなつたわけである。従つて第一次計畫は非常に無理な計畫となつた。且つこの計畫は社會主義經濟の基礎工事として、重工業にのみ、力をいれ、輕工業には手が廻り兼ねた結果、一層その無理が強められたようである。

もう一つ本文の記者が、注目したこの計畫の興味點は、經濟建設計畫は、同時に軍備充實計畫でもあつたといふことである。第一次計畫は主として重工業に力を入れた。それは重工業は、社會主義經濟の基礎工事であるからだと説明されて來たが、重工業の多くは、軍備と密接な關係をもつ。急テンポ、超スピードをもつて、先づ重工業の發展に力を注いだ結果はどうであつたか。

スターリンは五ヶ年計畫によつて社會主義經濟の基礎を築きあげると呼號し乍ら、他面において軍備の充實に向つて邁進したといふことが出來ると思ふ。社會主義經濟の基礎工事と、軍備の充實とに同つて一石二鳥の方策をとつたところそこにスターリンの政治的手腕のあざやかさを認めぬわけに行かぬのである。然らばこの點における五ヶ年計畫の成敗は如何。

固より五ヶ年計畫は無條件で及第點をつけるわけにゆかぬ。ソヴェート經濟の全面から觀たならば、幾多の缺陷があり、完全な成功とはいへない。しかし少くとも軍事上から、これを見たならば確かに驚ろくべき成功といはなければならぬ。

一九三三年の春、本文の記者が恰度モスクワにゐた時のこと、共產黨幹部大會において、スターリン自ら、第一次計畫竣工報告に當り、萬丈の氣焰をあげた。スターリンの演說中、私が今もなほ一字一句をあまさず、よく記憶し、その時の調子やゼスチュアまで、暗記し、今次の戦争となつてソ聯軍裝備の案外優秀なるを見るにつけ、いつも想起せし居れないのは、スターリンが一段と聲をはりあげて、氣焰をあげた一節である。即ちスターリン曰く、

ロシアには從來飛行機工業が無かつた。然るに今それがある。以前わが國には化學工業が全然無かつた。然るに今それが立派に出來てゐる。今まで自動車工業が皆無であつた。然るに今それも見事に出來た。

このスターリンの演說の一節は、ロシアの原語では、なかなか巧妙な對句の羅列でスターリンの獅子孔がこの一節に及ぶや、満場總立ちとなつて、鼓の如き拍手を辯士に浴びせかけた。ついでまた他の一節において、

從來國防上、幾多の缺陷をもつてゐたソヴェート聯邦は、五ヶ年計畫（第一次）竣工の結果、いつ何時、何所から攻められても、これに對して十分抵抗の出來る準備が出來た。あらゆる現代の新式武器を製作する用意が出來た。もし五ヶ年計畫を遂行しなかつたならば、殊に五ヶ年計畫において重工業の巨人的躍進をはからなかつたならば、ソヴェート聯邦は恐らく今日の中國、即ち何等獨立した軍事工業をもたない中國のような國となつたであらう……

といひ、スターリン自ら第一次五ヶ年計畫が軍事上において、大成功であつたことを自畫自讚した。果して今次の世界戦争で、ソ聯軍は驚ろくべき多数の飛行機、戦車その他の兵器を、ドシ／＼前線にくり出した。その少からぬ部分が英米から供給されたものであるには相違ないが、しかし自國産も相當なものであつた。スターリンは社會主義の基礎建設と同時に、強力なる國防國家をつくりあげた。

#### 四 富農と闘ふ

五ヶ年計畫は、概して工業方面において、所期の成果をあげ、農業方面で、幾多の失敗をくり返した。農業部門は五ヶ年計畫の鬼門であつたといふことが出来よう。

五ヶ年計畫における農業對策の眼目は、個人經營農業を、コルホーズ、即ち共同經營の軌道に乗りかへさすにあつた。しかしこのコルホーズは農民、特に富農（クラーク）の執拗な反對にぶつつかつて、蹉跌をくりかへし、これを今日の程度の成功まで漕ぎつけるには、苦辛慘澹たるものがあつた。

大體コルホーズ運動は、まづ第一次五ヶ年計畫における富農との血みどろの闘争に始まり、次に第二次計畫に入つて精巧な新式農具を武器とする農村征服政策で、大いに成績をあげたが、結局、その後半期に入るや農民自らコルホーズに據つて、巧みに自家の利益をはかり、政府は半ば農民に

してやられたかたちとなつた。

先づ第一次五ヶ年計畫當時のコルホーズ運動はどうであつたか。最初から富農階級の大反對にぶつつかり、大頓挫を來たした。殊にウクライナにおける富農の反抗強烈を極め、結局政府は強權を發動する外なく、ゲ・ベ・ウは隨所に富農の集團的逮捕を執行し、これを北氷洋岸のソロフキに送り出すといふ騒ぎとなつた。スターリンが黨大會に臨み、

世界に聯邦共產黨IIポリシエウイキーほど強力なる政黨他にありや。世界いづくにソヴェート政府の如く鞏固な政權があるか。この政權、この政府にしてなほ且つ農村政策を果し得なかつたとすれば、その責めわれ等ポリシエウイキー自身にあるとしなければならぬ……

といつて、全黨員を叱りつけたのはこの頃のことである。本文の記者は一九三二、三年のモスクワ滞在中、ある劇場で「穀物」（フレープ）といふ芝居を、二、三度くり返して觀覽したことがある。共產黨派遣の宣傳員と、富農を中心とする農民團との闘争を演出したもので、勿論政府御用の芝居であるから、最後の幕は黨員の勝利に終つてゐるけれども、それまでの幾幕かは、悉く富農のため黨員がしてやられてゐるのである。しかも最後の勝利とはいつても、それは主としてゲ・ベ・ウの力によつたように記憶してゐる。とにかくゲ・ベ・ウの強權にかゝつては、富農もかなはぬ。農村至るところ、コルホーズが出現し、宣傳員は凱歌をあげてモスクワに引揚げるところで幕となつたが、しかしこうした強權による成功の價値のないものであることをよく知つてゐるスターリンは



「成功に酔ふて眩暈するな」といふ有名な標語をかゝけて、嚴しく黨員を誡めた。果して成功は一夜の夢に過ぎなかつた。夢がさめて起きて見ると、裏の畑を耕やしてゐるは、依然として個人農ではないか……といふのが、第一次計劃におけるコルホーズ運動であつたのである。

第一次計畫の苦い失敗に懲りたスターリンは、第二次計畫の劈頭、コルホーズ運動の戦法を一變した。即ち従來の無手戦法をやめて新式農具を武器としての農村征服に移つた。恰かもよし、第一次計畫で建設したハリコフ、スターリングラード、チェリヤピンスク等々における農具工場がどしどしコンバインやトラクターを製作し出した。各地に機械トラクター・ステーションなるものを新設し、そこに腕利の青年共産黨員（コムソモール）を配置し、コルホーズに加入したものには、トラクターを貸してやる、種子も供給してやる、肥料もとりよせてやるが、個人農に對しては、ゲ・ベ・ウの鐵拳以外何も與へぬといふ新戦法をとり出した。さすが頑固な富農もこれには兜を脱がざるを得ない。あの廣漠萬里際涯のないソ聯の農村は、二年とたぬうちにすつかりコルホーズもしくはソウホーズとなつてしまつた。ソヴェート政府は「全聯邦コルホーズ化す！」と傲語し、再び個人農征服の凱歌をあげた。しかし間もなく今度もまたスターリンの標語「成功に酔ふて眩暈するな」をくり返さねばならぬことゝなつた。

即ち第二次五ヶ年計畫の後半期に入つて、コルホーズ政策は二つの難關にぶつつかつた。その一つは工業におけると同様、機械、器具の大破損である。農村にもスタハーノフ運動者があつて收穫

増加を焦せる。そのために農具を酷使用する。まだ使ひ慣れないコンバインやトラクターのことであつた。それにロシア人は無器用で、機械を手荒く取扱ふ。破損機械、故障器具が續出する。ソ聯の農村は「トラクターの墓地」となつたといはれたのは、この頃のことだ、いかに機械トラクター・ステーションが血眼になつて、修理と補給を急いでも到底間に合はぬ。もう一つソヴェート政府の頭痛のたねとなつたのは、コルホーズに入つた農民が、いつの間にかコルホーズそのものゝ主人公となりすまし、個人の利益のみをはかつて、國家全體の利益を一向顧みないといふことである。

従來ロシアの農民（ムジーク）といへば、愚直で、お人よしである。機轉が利かない。血の廻りがおそい。従つて爲政者の思ふがまゝにこきまわされる。ムジークといへば、純情朴直な愚民の代名詞であるかの如く誰しもが考へてゐた概念である。しかしそれは大なる錯覺であることが、コルホーズ運動の度重なる失敗ではつきりわかつて來た。ムジークは決してさような愚直一方でなく、實はなかく頭がよい。特に數理の打算が早い。朴直さうに見へて、中々横着で、隅におけない。ソ聯における政府と農民、クレムリンとムジークとの闘争は、一勝一敗をくり返した。假りにゲ・ベ・ウといふ腕力と、トラクターやコンバインといふ機械力をとりあげたとしたならば、或は政府側の負けとなつたかも知れぬ。さすがのスターリンも、餘ほど手を焼いたと見えて「相手がわるい。彼等は正面からの戦闘でかなはぬと、裏へ廻つたり、地下を潜つたりして、新らしい戦術を用ゐる。油断ならぬは、ムジークである。クラークである」と歎息したといはれている。

## 第十三章 よりよく、より楽しく

### 一 ゴリキー歸る

第一次五ヶ年計畫は、重工業にのみ力を入れ、且つ極度にテンポを急いだために、非常に無理押しとなり、國民の生活は、窮乏を告げ、ところによつては、履くに靴無く、着るに衣なしといった惨状を呈した。しかし第二次計畫に入つて、紡績業、製革業、日用品製造等の輕工業にも相當の豫算を計上し、テンポも多少緩和された。俄かに國內の空氣が明朗さを加へ、國民の生活は急にらくになつて來た。本文の記者の見るところ、第二次計畫の前半、即ち一九三三年から一九三五、六年までのソ聯が、スターリン政治の最善政期間であつたと思ふ。スターリンが「われ等の生活は、よりよく、より楽しくなつた」といつて自畫自讃したのは、この頃のことである。またスターリン自ら筆をとつたといはれる「各自働らく能力に相當する配給」を約束したスターリン憲法の出來上つたのも、一九三五、六年のことである。

恐ろしい、苦しいとばかりいはれたソ聯の生活が、俄かに「よりよくより楽しく」なつて來た。これはまたどうした風の吹き廻はしであらう。一九三二年から一九三三年にかけて、足かけ二年、

モスクワに滞在してゐた本文の記者は、はからずもこうした風の吹き廻はしに自らぶつつかつた。そしてそれは、一つはスターリン政治にゴリキーの感化力が影響し、スターリニズムにゴリキーズムが反映した結果であるといふ面白い事實につき當つた。

マキシム・ゴリキーは農民文豪として知られ、左翼革命家であつたことは、いふまでもないが、最初からボリシエウイキーであつたか、メンシエウイキーであつたか、それともその中間位にあつたか、はつきりしない。十月革命に際しても、革命そのものには、賛意を表したが、ボリシエウイキーの極端なる破壊政策に對しては、頻りに反對の聲をあげた。殊にチェ・カーヘゲ・ベ・ウの前身の恐怖政策と、過激群衆の舊文化遺産の破壊に對しては、懸命の抗争を試みたものである。屢々皇族や、由緒ある貴族のために、生命乞の運動に奔走し、彼のおかげで、危いところで九死に一生を得たものが少くない。殺伐たる革命の荒野にも、草花を咲かせ度い。残忍冷酷な階級闘争にも人情味を加へ度いといふのが、ゴリキーの切なる念願であつた。ゴリキーの十月革命の序幕における對過激派抗争振りは、たしかに弱きもの、味方、騎士か俠客そのもの、概があつた。しかもレーニンは決してゴリキーを敵視することなく、却て彼の進言忠告に耳を傾け、屢々チェ・カー長官チエルチンスキーの行過ぎ恐怖政策を制したことがある。流石はレーニンだけあり、彼は明かにゴリキーを優遇し、兩者の間には、過激政治破壊運動の絶頂時すら、あたゝかい親交が續けられた。レーニン病氣の頃、政治の中心は「三頭組」の手に移り、特にジノウイエフが、巾を利かせてゐ

だが、彼は大のゴリキー嫌ひであつた。ゴリキーもまたジノウイエフを好まなかつたらしい。何しろ一方は生粋の大ロシア人で、あくまで練の太いムジグ型、他方は細く鋭い才子肌のユダヤ人と來てゐる。肌が合はぬとはゴリキーとジノウイエフの如きを指していふべきか。やがてジノウイエフの壓迫に堪え切れず、且つ持病の肺患もわるくなつて來たので、ゴリキーは革命の故國をすて、再びイタリーのカプリ島に身をかくした。

しかしジノウイエフの覇權は三日天下であつた。間もなく「三頭組」崩潰して、スターリンの天下となるや、クレムリンから、頻りにカプリ島へ、歸國慫慂の電報が飛んだ。その頃ゴリキーもまた望郷の情やるせないものがあつた。一九三一年、ゴリキーは再びカプリ島を出て、久し振りにソ聯へ歸つて來た。「ゴリキー歸る」の放送で、ソ聯は國を擧げて歡呼した。さながら凱旋將軍の如くモスクワに着いたゴリキーには、特に對外文化協會の大家屋が明渡される。モスクワの目貫きの大通りツウエルスカヤ街が、ゴリキー街に改名される。モスクワ最大の文化公園にゴリキーの名が冠せられる。外國文學輸入の機關が、ゴリキーの統裁下に新設される。全聯邦文士協會は滿場一致で、ゴリキーを會長にかつぎあげる……それはそれは大變な騒ぎとなつた。それもその筈である。當年のゴリキーは、實にクレムリンの主人公スターリンから、單なる革命の同志もしくは文豪としてでなく、師に對するの禮をもつて迎へられたのである。果然ゴリキーの歸國とともに、かれ獨特の哲學が、そろ／＼スターリンの心境に反映し、こゝに秋霜の如きスターリン獨裁政治の上に、何

かしら春の暖か味が加はり出して來た。殺風景を極めたゲ・ベ・ウの國、過激派の天下に、どこからとなく、なごやかな風が吹きそめて來た。「人間を尊重せよ」「裕福なる生活へ」「よりよきより樂しき世界へ」等々の耳新らしい新標語が、續々スターリン獨裁王の口から唱へられ出す、新聞紙上、幼兒を抱いてニコ／＼笑ふスターリンの寫眞が掲載される。……

## 二人間尊重論

スターリンが始めて「人間を尊重せよ」とクレムリンの高塔から、放送した時、全く藪から棒とでもいふべきか、世人は狐につまゝれた感に打たれざるを得なかつたほど、思ひがけない出來事であつた。スターリンの「人間尊重論」に曰く、

余の曾てシベリア流刑地にあつた頃のこと、ある日、村の若い衆が馬數十頭をつれて、川へ沐浴に行つた。晩方になつて歸つて來たものを數へて見ると、馬はみな揃つたが、人が一人足りない。そこで「誰か早く救出に行つてはどうか」といふと、若い衆は異口同音、「馬が一頭でも足らぬといふなら、何をやめても救出に行かねばならぬが、人間の一人や二人、どうなつたつてよいではないか」といひ、誰一人探しに行こうといふものがなかつた。近頃ソヴェート官界でも、とかく人間を輕視する傾向がある。なげかはしいことである。われ等はずと人間を尊重しなければならぬ……

まことに平易通俗の訓話である。人間は馬より大切であるといふ。當然の話である。たゞしかしこうした人間尊重論をスターリンの口から聞こうとは、何人が豫期し得たことであらう。それはいふまでもなくスターリンその人の心境變化の現象であるとしなければならぬ。然らばかくスターリンをして人間觀を急角度にかへさせたのは誰であるか。私はその傑作「ドン底」において「人間！それは誇り（ゴールドスチ）だ！」と喝破したゴリキーに外ならぬと斷言するに躊躇しないものである。

### 三 裕福なる生活へ

スターリン政策の中で、最も多數民衆の反感を買つたのは、前項所記の如くコルホーズ運動の強制である。ために幾百萬の富農は、或は殺され、或は北氷洋岸ソロフキに流された。貧農もまた打ち續く饑饉で、餓死するもの幾十萬、農村到るところ怨嗟の聲が起る、地方によつては暴動さへ爆發するといふ騒ぎとなつた。そこでスターリンは、自ら農民出身であり、農民の氣持を最もよく理解してゐるゴリキーに、何とかムジークを治める名案がないものかと相談に及んだ。これに對してゴリキーのスターリンに授けた秘策は如何。有名な「裕福なる生活へ！」の標語がそれである。この標語は、實に一方富農の反政府感情を和らげたと同時に、他方貧農の向上を促し、いはゞコルホーズ政策に、花と實をもたせたものであつた。流石は大ゴリキーだけあつて、まことによく農民の

心をつかまへたもの、同時に彼に教を乞ふたスターリンもまた中々の偉物であるとしなければならぬ。

一九三三年から一九三四、五年頃にかけてのソ聯國內の生活は、たしかに明朗を加へて來た。第二次五ヶ年計畫の上半期が、スターリン善政の絶頂時であつたといへるであらう。輕工業が盛んになつて來た。日用品が全國に行きあたり、各地の農村は「裕福なる生活」を目標に見ざましく活氣づいて來た。眞にスターリンの誇號した如く、「よりよく、より楽しく」なつて來た。

しかしかくスターリン政治の上に、ゴリキーズムが反映する。「ドン底哲學」が影響する。人情味が増はる、なごやかな風が吹く、生活が裕福になる、よりよくより楽しくなつて來る、そこで、「偉大なる先生」「民族の父」といつたような讚辭が、スターリンに呈せられる……といふようなことになる、好事魔多しといふべきか、これを謳歌するものがあると同時に、他の反面、いよいよスターリン政權が腰を据える、その倒壞が至難になつて來る、ゴリキーの存在は、スターリン政權を長命ならしめるものである。ゴリキーの死を一日早からしめることは、スターリン政權の生命を一日短からしめるものである！となし、ひそかにゴリキーの命を狙ふものがあらはれて來た。それは即ち反スターリン陰謀團であつて、同團の指令を受けたゲ・ベ・ウ長官ヤゴドダが、クレムリン侍醫に命じて先づゴリキーをして發病せしめ、ついでその病勢を急速につのらせ、死に到らしめたといふ奇々怪々の犯罪行爲となつた。

あまりに奇々怪々で、そんなことが？ とあたまつから疑問を挿み度くなるのであるが、しかし右の事實は、一九三八年春、右翼トロツキストの公判で、前ゲ・ベ・ウ長官ヤゴード自らはつきり告白したところである。

#### 四 スターリン憲法

スターリンは今日でこそ、押しも押されぬスターリニズムの巨柱、一國社會主義の本尊であつて、理論方面においても、相當な權威をもつてゐるが、革命初年頃の彼は、たゞ大膽不敵の直接行動家としてのみ知られた。何しろコーカサスの山の中、靴工の家庭に長じたジウガンウイリである。十六、七歳の頃から革命運動に身を投じ、無鐵砲な冒險を得意として、各地に變幻出沒、牢獄に投込まれたり、逃出したり、しかも一度も國外に亡命することなく、終始國內に踏み止まつて、潜行運動に没頭してゐたコーバである。彼には獄中と流刑時の外、殆んど讀書と思索の餘暇がなかつた。長い間、國外に亡命し、研學、讀書、思索に最も都合な環境におかれたトロツキーや、ジノウイエフ等に比べ、學問上の素養において、スターリンが多少遜色のあつたことは、當然のこと、いはねばならぬ。しかしこうした方面の短所は、一面から見て寧ろスターリンをして今日あらしめた所以の一つであつたともいへるのではないか。トロツキー、ジノウイエフ、カーメネフ、ブハーリンなどが、學殖が深く、識見が高かつたればこそ、時に無暗に理想に走り過ぎ、時に獨自の見地

に立つて、黨首レーニンにたてつき、自ら求めて、自家の地位を危うしたのであるが、理論方面を不得意とするスターリンは、終始一貫「レーニン先生の弟子」として、師の教へ通りに行動した。それがレーニンをして、スターリンに滿腔の信頼をおき、黨の書記長に任せしめた所以でもあつたと思ふのである。

レーニン死去の後も、スターリンはまだ「理論方面において、修養の途上にあると自ら己を知り、爲にその周圍に、師を、顧問を、相談役を、智恵袋をおくことを忘れなかつた。コルホーズ政策の蹉跌するや、カプリー島からゴリキーの歸國を求めた。スターリン憲法は、スターリン自ら筆をとつて草案をつくり、マレンコフをして仕上げさせたと傳へられてゐるが、ゴリキーに教を乞ふた點もまた少くない。特に同憲法の中にあはれた幾多過激政治の緩和點は、多くゴリキーの進言によるといふ説さへある。しかしゴリキーは不幸にしてスターリン憲法の發布を見ずに、ヤゴードの一服で早世した。

#### 五 肅情から對戰體制へ

こうした「楽しい、より幸せ」の期間は、あまり長續きはしなかつた。やがてスターリン善政をねたみ、呪ふものがあらはれる。この調子で行くと、スターリン政權はいよいよ深く根をおろしてしまふかも知れぬと、陰謀工作を急ぎ出す。トロツキー追放の頃から、地下にもぐつたトロツキス

トがそろ／＼あたまをもたげ出す。そここゝに反スターリン派が陰謀團を結成する。そこでクレムリンが俄かに緊張し出した。ゲ・ベ・ウは再び「抜身の劔」に磨きをかける。一九三六年の秋から、ソ聯はまたしても暗い雲につつまれ、やがて一九三七、八年、國をあげてのテロ地獄に投げ込まれることゝなつた。

これよりさきキエフの暗殺が端緒となつて、陰謀團合同本部が暴露した。合同本部を衝いてゐる間に、併行本部があらはれて來た。チエコ大統領ベーネシュから注進があつて、トハチエフスキ一の武力陰謀團を抑へた。この武力陰謀團の背後には右翼トロツキストが控え、この團體の中には、當時のゲ・ベ・ウ長官ヤゴドダが、一枚役を買つてゐた。そこで、クレムリンは上を下への騒ぎとなつた。エジヨーフを抜擢して、ヤゴドダの後を繼がせ、片つ端から陰謀團彈壓にとりかゝつた。

一九三七年から一九三八年にかけてのソ聯は、再びゲ・ベ・ウの國、恐怖の國と化し、軍人、外交官、黨の領袖、人民委員（大臣）等に誰一人自己の安全を保障されたものはない。逮捕、投獄、銃殺……それはそれは暗い恐ろしい地獄の國となつてしまつた。

一九三七年の春、トハチエフスキ一事件勃發の直後、本文の記者は、このテロ地獄のソ聯へ飛び込んだ。ゲ・ベ・ウの活躍に慣れた私でも、一九三七年春のモスクワ滞在は息苦しかつた。間もなく西ヨーロッパに抜け出し、このテロの進行を、ベルリンや、パリや、ワルソーで見張つてゐた。こうしたテロの旋風が、ソ聯の全土を吹きまくつてゐる間に、他の一方歐洲の風雲漸やく急を告

げ、低氣壓は先づチエコとポーランドにさしかゝつて來た。ヒットラーのドイツ、ナチのドイツは歐洲征覇を目指して、活潑に動き始めた。歐洲の戦争は不可避となり、ソ聯もまたその渦中に投げ込まれる危険がさし迫つて來た。

内戦多事の秋に當つて、クレムリンの主人公スターリンはこの危局を如何にして切り抜けるか。彼は陰謀彈壓を急いだ。一日も早く國內の紛擾を片付けて、外患に對處する方針をとつた。一九三八年夏から秋にかけ、ゲ・ベ・ウはいよ／＼晝夜兼行「抜身の劔」をふり廻はした。最後に右翼トロツキストを一人のこさず、壁につきつけた。クレムリンは一九三八年十二月三十一日をもつて、肅清の終了聲明を發した。一九三九年の年が明けると、テロの大風一過、ソ聯は眞ッ暗闇から明るみに出た。エジヨーフは、もう「御用済み」となつて、通信人民委員の件食に左遷され、彼に代つた新ゲ・ベ・ウ長官となつたベリアは、最初から「もう手荒いことはやらぬ」といひ、ニコ／＼顔で登場して來た。ゲ・ベ・ウはエジヨーフの鬼面から、ベリアの菩薩面と變つた。手のひらを返したような變り方である。

スターリンは肅清完了と同時に、來るべき歐洲戦争に對處すべく、いはゆる「對戦新體制」をとることゝした。こうした急角度の「舵の替方」はスターリンの最も得意とするところである。

それらの背景をなす一九三七年は第三次五ヶ年計畫發足の年であつたが、國內にテロが始まると同時に、國外ではヒットラーの活躍で、歐洲の風雲が急を告げた。そこで第三次五ヶ年計畫は、再

び重工業、軍事工業重點方針に逆戻りとなつた。國民の生活は政治と經濟の兩方面から、暗い息苦しいものとなつたのは當然である。テロの旋風は全聯邦を吹きまくつた。國民は戦々競々である。毎日毎夜續々ゲ・ベ・ウに曳かれて行く。恐ろしいテロ地獄である。ところがあのテロ地獄の中でも、石炭、鐵、石油の増産に、拍車をかける、戦車と飛行機の製作に、莫大な資金が投ぜられる。ゲ・ベ・ウの看視下、戦々競々裡に、軍需工業がもの凄い發展を續けた。

私は五ヶ年計畫は實は十五ヶ年計畫であつたと思ふ。如何に急激な増産計畫といつても、最初の五ヶ年だけでは、目的が達せられぬ。あまり無理を押すと、國民が困苦缺乏に堪え切れなくなるかも知れぬ。そこで第二次計畫で少しく加減し、一いき入れ、第三次計畫でまた／＼拍車をかけ、五ヶ年計畫三つを強行して、始めて強國ソ聯が完成するといふのが、クレムリンの方寸であつたらしく。

一九四一年九月一日、ヒットラーはソ聯に進軍の命令を下し、獨ソ戦争が始まつた。聞くところによると、ヒットラーもまたソ聯が第三次五ヶ年計畫の完成で戦備成るべきことを豫知し、五ヶ年計畫竣功の一年半前、即ち一九四一年の夏、對ソ進撃を開始したのだといふ。

## 第十四章 外交四度の轉換

### 一 二元外交

ソヴェート政府の外相、即ち外務人民委員は、今日まで四代變つた。初代外相はトロツキーで、二代目がチチェーリン、三代目がリトヴィノフ、そのあとを續いで今日に及んでゐる四代目がモーロトフである。

ソヴェート政府成立して、トロツキーが始めてペフチェフスキー橋畔の舊外務省を乗取り、赤色外相の椅子に腰をおろしたばかりのところへ、本文の記者は舊知の新次官ポリワノフの紹介で飛び込み、インターヴューを求めた。得意滿々の初代赤色外相トロツキーは、

余は外務省の店を閉める爲めに、外相となつたのである。資本主義の列國とは、決戦あるのみ。毫も外交を必要としない！

と、當るべからざる氣焰であつた。外相自ら外交無用論を説く。トロツキー時代のソヴェート政府には、殆んど外交らしい外交が無かつた。たゞ一つプレス・リトウフスクにおける獨逸全權との講和會議でト外相自ら乗出して折衝に當つたが、結局奇想天外の「脱戦宣言」を相手側に投げつけ

て會議を引揚げたのみであつた。

極力反對したブレスト・リトウフスク講和が、レーニンの強硬主張によつて、いはゆる「條文を見ずに盲判」が捺されるや、トロツキーは外相の椅子をチチエーリンに譲り、新たに陸海軍人民委員の重職に轉じた。

チチエーリンは赤色外相たること十二年の久しきにわたつたが（一九一八年三月から一九三〇年七月まで）その間のソヴェート政府の外交は、いはゆる「二元外交」であつた。外務人民委員部の管掌する正當外交の外に、もう一つコミンテルンの秘密外交があつた。

チチエーリン時代のソヴェート外交は、一方いはゆる「二十四ヶ國の封鎖」を破り、列國との平和關係を回復して、親善促進をはかると同時に、他の一方ひそかに、列國內の革命運動を煽動して世界をかきまはすといふ二重の使命を帯びてゐた。當時のソヴェート外務當局者は表面ソヴェート政府を代表して、列國との條文や通商關係の發展をはかるとともに、裏面ひそかにコミンテルンの運動を援助し、同時に二重人格のつかひわけをやらねばならぬ立場におかれた。ところでこの表裏二様の使命たるや、全然反對の方向を指すもので、一方に力を入れると他の一方に支障を生ずる。チチエーリンがいかに列國に對して、平和親善方針を高唱しても、列國は依然ソヴェート外交を、「赤い外交」だ、ロシアは「國際異端者」だ、ソヴェート外務省は「コミンテルンの代理店」だとなし、「赤いロシア」はいつの間にか「世界中にくまれもの」となつてしまつたような始末で、



(リトヴィノフ)

チチエーリン外相は、この「二元外交」で屢々難局に直面し、相當苦勞を重ねたようである。

一九三〇年七月、チチエーリンは外相の椅子を次官リトヴィノフに譲つて淋しくソヴェート官界から退場した。チチエーリン失脚の原因は何であつたか。彼がトロツキーと親しく、トロツキストと見られたことなど、たしかにその一因をなしたと思ふが、しかしチチエーリン引退の根本原因は、要するに「二元外交」が、不必要となつたことにあるとしなければならぬ。スターリンは冷徹なる共産主義理念をもつて、人事を取扱ふ。

## 二 一國社會主義を基調として

リトヴィノフがチチエーリンに代つて、三代目ソヴェート外相となつたのは、恰かもスターリンがトロツキーの國外追放後二年、しつかとわが手に獨裁權を把握したのと時を同じうした。それは一見偶然の如くにして偶然ではなかつたのである。スターリンの獨り舞臺となつたソ聯は、一國社會主義の新原理により、先づ國內建設に全力を傾倒する方針をとり、五ヶ年計劃の實現に、邁進することゝなつた。國內建設、特に五ヶ年計劃の如き大事業を果すためには、先づ列國との親善關係



の確立が何より緊切なことになつて来る。こゝにおいて、スターリンは、二元外交のチチェーリンをおしのけ、平和一本建の外交推進のために、リトヴィノフを登用した。チチェーリン外交は、レーニン在世時代に始まり、スターリン時代となつて、はじめの五、六年はその儘繼續したといふことが出来る。スターリン独自の外交のあゆみ出したのは、リトヴィノフ登場以後のことである。

一九三〇年七月、リトヴィノフは外相就任の劈頭、モスクワ駐在の各國記者との會見において、ソヴェート外交の最大使命は、社會主義の建設のために、平和を維持し、外部的紛争から自由なる立場を確保するにある。ソヴェート聯邦は、その建設計劃の擴大と、そのテンポの急速度を加へるに従つて、益々平和の確保を必要とする。われ等は現在資本主義國にとりまかれた一つ國において、社會主義建設をなすべく餘儀なくされてゐる。われ等は資本主義國家と、社會主義國家との二つの異つた社會組織の平和的共存の方法を見出すために、最大の努力をなすであらう。と、ソヴェート外交の新方針を明らかにした。かくして、リトヴィノフの外相就任以來、ソヴェート外交は、「平和の確保」を急務とする、「資本主義列國との共存方法」を見出すことに努力することとなり、コミンテルンの世界かき廻し運動は、俄かに控え目となつた。

スターリン外交の新政策具現の一つが、國際聯盟への加入である。國際聯盟は、チチェーリン時代のソヴェート外交が、資本主義の牙城、討赤參謀本部として、仇敵視してゐたところである。そうした聯盟に、ソ聯自ら進んで加入しようといふのだから、大變な轉向といはなければならぬ。リ

トヴィノフ時代に入つてからのソヴェート外交は、中味はともかく、表面はたしかに「赤味」がとれて來た。その結果從來列國から「赤い國」「國際異端者」と目され、「世界中の憎まれもの」であつたソヴェート聯邦は、漸やく列國から相手にされ、接近されるようになった。この點リトヴィノフは、常に「二元外交」の難局に當つて、屢々苦境に立つた前任者チチェーリンに比して、幸運であつたといはなければならぬ。

リトヴィノフは平和政策の一枚看板で、自らチエネワに乗出して國際聯盟會議にソ聯を代表し、また不可侵條約や、侵略國定義協定などを持ち出し、さかんに活動した。その間の彼の大きな成功は、フランスとの接近と、米ソ國交の回復である。フランスは革命の當初から、最も烈しい反ソ態度をとつて來た國であり、米國は十六年間、ソヴェート政府の承認を拒否して來た國である。然るにリトヴィノフは一九三三年の一年間に、フランスと接近して、不可侵條約を締結する、米國とは新たに國交を回復して、リ外相自ら華盛頓にのり出すといふ勢ひ、一九三三年から一九三四年にかけてのソヴェート外交は、成功續きで、トン／＼拍子の觀があつた。日ソ國交も一九三二年の秋、恰度本文の記者がモスクワに着いた頃から、急激に好轉し、ホロンバイル事件、松岡全權の訪露等に際して、ソヴェート側は非常な好意的態度を示し、一九三三年春國際聯盟の滿洲問題討議の提案に反對し、また北鐵賣却を提議するに至つた。

一九三二年第一次五ヶ年計畫は、四ヶ年三ヶ月で所期の成果をあげて完成し、一九三三年第二次

計畫はそのスタートを切った。五ヶ年計畫はグン／＼進行する、平和外交はトン／＼拍子に成功して、五ヶ年計畫に大きく寄與する、一九二二年と一九二三年は、リトヴィノフ外交と五ヶ年計畫とが、最も調子よく協力した時であつた。

平和外交のおかげで、外患の恐れをなくして、國內建設が進む。五ヶ年計畫に必要な機械その他の大きな註文で、資本主義國を巧みに釣る……といったような調子で、兩者互ひに助け合つた觀があつた。

一國社會主義を基調とし、五ヶ年計畫の進行協力を目的とするスターリン外交は、意外な成功をおさめた。資本主義の列國は、社會主義國の建設に、妨害を加へるところか、さかんに機械を賣り込む、技師を派遣する、日本の如き、鐵道技師の一團がわさ／＼ソ聯へ出かけ、ソ聯鐵道の改善に色々な助言を與へる。かくして資本主義國は社會主義の建設を妨害するどころかさかんに援助した。おかげで、第一次五ヶ年計畫は四ヶ年三ヶ月で完成した。重工業が到るところに鬱然と勃興した。恐らくスターリンはクレムリンの大奥で、微笑を禁じ得なかつたことであらう。

「一國社會主義」原理の根底の一つは、前記の如く、資本主義國は常に相互に反目してゐる。それ故、一團となつて、赤い國「ソ聯」に當るようなことは、容易にあり得ない。否、彼等の中には、その内訌に當つて、相手を制する爲めに、ソ聯の力に倚らうとするものさへ出て來そうである。そこでスターリンは資本主義國との單なる平和親善外交から竿頭一步を進めて、自ら進んで、資本主

義國の内訌渦中に投じ、それによつてソ聯の國際地位強化をはかるに如かずと考へたらしくみられる。一九三三年の暮、スターリンはリトヴィノフ外交に一つの大きな轉換を命じた。

### 三 ラデツクの「敵の敵利用」論

一九三三年十二月十六日のソヴェート政府機關紙イズヴェスチヤ紙上、有名なカルル・ラデツクの「ソヴェート外交政策の基調」と題する論文が載つた。ラデツク論じて曰く、

ソ聯邦の外交政策は、平和保持を眼目としてゐる。さればこそ列國に對して、不可侵條約の締結を提議してやまない。各國はそれ／＼の都合主義からこれに應ずるに至つたが、日本のみは自分の手足を自由にしておき度いためか、今もつてわが提議に應じない。世界は今やヨーロッパと極東において、二つの陣營にわかれて、尖鋭に對立しており、戦争の準備は着々と進められてゐる。この間にあつて、ソ聯邦はあくまで中立の立場を堅持しようとしてゐる。しかしある強國がソ聯のこの中立態度を不利となし、ソ聯邦に對して、攻撃を開始するが如き事態を惹起することもあり得る。この場合、ソ聯は起つて、これが撃退に向ふことは勿論、他の列強が、ソ聯邦に援助を申込んで來るならば、これを利用するであらう。また敵の敵と共同することが、利益なればたとひ敵の敵が如何なる國であらうとも、この場合問題とせず、協力するであらう。そしてソ聯邦に協力を申込む國が、また如何なる目的、如何なる打算をもつてゐようと、それはソ聯の知

つたことではない……

この論文を一讀して、本文の記者は、クレムリンの外交に、重大變革のおこつたことを鋭く感知せざるを得なかつた。リトヴィノフ外相は屢々、ソ聯は國家の一つのグループに加盟して、他のグループに與するようなことは斷じてしない」と言明したことがあり、また元來ソ聯はわれのみ社會主義國であつて、他の資本主義國は、すべてわれ等の敵であるといふ建前である。資本主義の列國をして互ひに抗争せしめることには、百方術策を弄してやまないが、しかし資本主義の何れの國とも相與みして、他の資本主義國に當るが如きは、その主義、その理念の上からいつても斷じてゆるさぬところであるとなして來た。しかるに今や、ラヂックの筆によつて、敵の敵を利用すべしといふはソ聯外交の急轉換とみななければならぬ。

しかも當時のラヂックはスターリンのスポークスマンであつたからである。これは餘談であるがラヂックと本文の記者とは相識ること久しい間柄で一九二〇年の赤露入りに際しクレムリンの城内のアパートで會つたのが最初で、それからモスクワ訪問毎に度々彼と會つた。

口も八丁、手も八丁、演説も得意で文章もたいしたもののである。

その彼も併行本部事件に一役買つて出たといふ嫌疑で捕えられ、公判の結果二十年の懲役を云ひ渡され、今なほ服役中だといわれている。

さて前述のラヂックの論文に對する筆者の豫感が正しかつたことはその後のソ聯外交政策によつ

て確められた。

リトヴィノフの外相在任は、十年の長きにわたつたが、その後半期は、主として英佛米に親近することに眼目をおいてゐたようである。

一九三六、七年、テロの旋風吹きまくるや、リトヴィノフの部下から幾多の「陰謀組」を出したこれがためリトヴィノフの地位は俄かに搖ぎ始めたが、陰謀關係では、ともかくも彼は難を免れた。しかし彼の推進した英米佛親近外交が一時不必要、少くとも行過ぎとなつては、リトヴィノフもまた「御用濟み」たらざるを得ない。一九三九年リトヴィノフは住み慣れた「クズネツキー橋」(ソ聯外務省)を去り、モーロトフ首相が外相を兼攝することゝなつた。

#### 四 獨リ不可侵條約

モーロトフ新外相は、ソヴェート外交の重點を、英佛米から、ドイツにおきかえた。

この轉換決行に先立つて、モーロトフは外交方面の人事に、大異動を行つた。そうした異動の中で、世人の意表に出でたのはデカノゾフの登場である。つひその頃まで郷里のコーカサスにくすぶつてゐたデカノゾフは、一九三八年秋突如としてクズネツキー橋頭に、その五尺にも足らぬ短軀をあらはした。彼は一躍して、モーロトフ新外相の下に、次官となり、主として對獨外交に當つた。

デカノゾフと相前後して、もう一人、コーカサス出身のカンデラーキが、通商代表として、ベルリンに派遣された。これよりさき、スターリンは、ヒットラー執権後のドイツに對し、警戒の必要を痛感し、ベルリンの動きに、細心の注意を拂つてゐた。一九三八年日獨防共協定成立の報に接して、いよいよナチ・ドイツ油断を許さずとなし、スターリンはこゝに外務省を出し抜いて、一つの手を打つこととした。彼はナチ・ドイツ對策には、その機密性を考慮し、自分の最も信頼してゐる腹心の門下生、もしくは同郷同族のいはゞ家の子郵黨をあげてその局に當らしめるを得策と考へたらしい。



(モーロトフ)

ジョルジア人カンデラーキは、ナチ・ドイツとの接近湘踏の爲め、スターリンの特命を帯びて、ベルリンに向つた。イデオロギーにおいて全然相容れないナチ・ドイツとの接近をはかるには、經濟的協定によるに如くはない。石油その他の資材をもつて釣る外ないと考へたのであらう。勿論ベルリンの方でも、そうしたモスクワの政略は、よく見抜いてゐたらしいのであるが、當時ドイツの指標は、主として、中欧にあり、且つまたそのゴナチ・ドイツの政策は攻撃の力を、一つの國に集中するにあつた。當時オーストリアとチエコスロワキアに重點をおいてゐたヒットラーは、クレムリンの申入れに對し、相當色よい返事を

與へたらしく、同年四月モスクワに歸來したカンデラーキは、スターリンにドイツとの妥協有望なることを報告した。カンデラーキの報告通り、その後間もなく、モスクワとベルリン間の交渉は、グン／＼進展し、經濟協定から更らに政治協定に進み、とう／＼獨ソ不可侵條約の締結まで漕ぎつけることゝなつた。

本文の記者の見たところ、スターリン、モーロトフ外交の最もよくその特色をあらはし、その最も凄いとところを見せたのは、一九三九年の獨ソ不可侵條約締結の場面であつたと思ふ。

世界第二次大戦直前の歐州は、いはゆる四國巨頭の肚藝外交舞臺であつた。當時歐州に二年間滞在した本文の記者は、多大の興味をもつて、ヒットラー、ムッソリーニ、チェンバレン、スターリン、歐洲四大巨頭間のいはゆる虚々實々の肚藝外交を、手に汗握り乍ら、注目してゐた。特に激しかつたのは、ヒットラーとスターリンの應酬であつた。双方とも裏に裏ある外交を推進する。もの凄しい駈引を演ずる。互ひに相手を抱き込まうとする本芝居を打つ前に、まづ相手に、手厳しい肘鐵を喰はすような素振りを見せる。そうした素振りを見せることによつて相手をあせらせ、焼餅を焼かせ、そしてこゝぞ潮時と見るや、大きく相手を抱擁してしまふ。まことに名優の演技そのものである。

一九三八年秋、ミュンヘン會議によつて、ズデーテン地方を巧みに併合したヒットラーは、勢に乗じてカルパト・ルシーに手を出し併合し、特にそれをカルパト・ウクライナと改名までして、そ

これをウクライナ運動の據點とするかの如き態勢を示した。ウォロシーンなるウクライナ運動の志士をしてカルバト・ウクライナ政府を樹立せしめたのも、この時のことである。

これを見て驚ろいたのはクレムリンである。さなきだにクレムリンにとつて、その民族政策の最大の痛たるウクライナが、その隣接地域に小なりと雖も一つの同民族の同盟を持つといふことは、由々しい大事であるとしなければならぬ。クレムリンはウクライナ問題の危機來を叫んで騒ぎ出した。しかしかく騒ぎ出した時のスターリンはもう已にヒットラーの術策に陥つてゐたのである。ペルテヒスガーデンの山莊で、ヒットラーは計畫その圖に當つたとして、ほくそ笑んでゐた。

ウクライナ問題はヒットラー當面の目的ではなかつた。それをだしにつかつて、スターリンを英佛から離さう、ドイツに近よらしめようといふのが、ヒットラーの胸三寸に畫かれた策略であつたのである。

そこでスターリンの方からやかましくカルバト・ウクライナ問題について、抗議をもちかけて來ると、待つてゐましたとばかりに、ヒットラーは、昨日まで援助してゐたウォロシーン政府を突つ放し、カルバト・ウクライナを再びもとのカルバト・ルーシの舊名に回復させ、この地方の主要部分をあげて、ハンガリーの保護領に入れてしまつた。こうしたヒットラーのゼスチュアに魅せられたスターリンは、この調子だと、ヒットラーとの妥協が相當見込がありさうだと考へたのだらう。早速ドイツにしてウクライナ問題からさへ手を引くならば、ソ聯は欣然として對獨提携の交渉に應

ずるであらうと出た。

たゞスターリンの方でも、握手の手を眞直ぐは出さない。先づヒットラーをして、あせらせ燒かせるために、クレムリンは心にもない英佛との戀愛劇の一幕を打つた。

ソ聯と英佛との戀愛劇は、随分手のかゝつたものであつた。双方から對獨包圍同盟結成について條件をもち出す。英佛の方からまづポーランドの獨立聯合保障といふいはゞ内縁結婚ぐらゐでどうかともちかけると、そんな水臭いことではもの足りない。正式結婚、即ち全面的對獨軍事同盟を締結しようとしたのが肚に一物あるスターリンである。そうした正式結婚の準備、即ち結納交換といふもいふべきか、英佛參謀本部の代表をモスクワに招致して、對獨作戰會議を開くといふ際といふころまで消ぎつけた。英佛參謀本部の代表が堂々とモスクワに乗込む。毎日地圖を案じて作戰をねる……といふ騒ぎとなつた。七月の運動祭には、赤軍の一隊に、ドイツ兵の服を着せ、ドイツの武器をもたせて、赤色廣場に繰り出させる。やがて赤軍があらはれ、模擬ドイツ兵をあたまつから叩きつけ、これを撃退し、追ひ散らすといふ光景を、列國の武官に見せるなど虚々實々の外交戰が演ぜられた。

しかし相手のヒットラーもさるもの、よくスターリンの肚の底を見抜いた彼は、ポーランドの東半分といふ大きな「團子」を提供しようと思ひ切つて大きな「男の氣前」を見せた。こうしたヒットラーの氣前に、スターリンは、いよいよ英佛との戀愛芝居を筋書通りに破談にし、結納式の軍事

會議の眞最中、ドイツこそ、ソ聯の戀の對象！ とばかり藪から棒のように、獨ソ不可侵條約を突き出し、全世界をしてアツといはせたのであつた。

## 五 日ソ中立條約

もう一つスターリン・モロトフ外交の凄味を見せたのは、日ソ中立條約の締結である。

一九四〇年秋、わが外相松岡洋右が、モスクワ訪問の機會に、スターリン、モロトフと直接交渉で、日ソ中立條約を締結した。その頃日本にとつても、この條約の成立をもつて、松岡外交の成功となしたが、日本よりもソ聯にとつてより大きな成功となし、クレムリンは歡呼の聲をあげた。その頃戰渦は全歐州に波及する勢が、いよ／＼はつきり見へて來た。ソ聯もこの戰爭にまき込まれてしまふかも知れぬ。そうした場合、クレムリンの最も憂慮したことは、東西同時作戰の危険なることであつた。ドイツだけでも強敵であるのに、背後から日本の攻撃を受けるようなことがあつたら大變である。しかるに今や日ソ中立條約が成立した。東西同時作戰の憂ひがなくなつた。スターリンはモスクワを去らんとする松岡外相をクレムリンに招致して、「天皇のため」に乾盃する、モロトフと連れ立つて、松岡外相を驛頭に見送る……といふ前例のない大歡待振り！ しかし獨ソ不可侵條約も、はたまた日ソ中立條約も、要するに、現實外交の勝利であつた。一九三九年に締結された獨ソ不可侵條約は一九四一年ヒトラーによつて破られ、一九四〇年に成立した日ソ中立條約

は一九四五年八月スターリンこれを破棄した。

以上の如く、ソヴェト外交は、初代外相トロツキー當時の「外交無用時代」から、二代目外相チチェーリンの二元外交時代を経て三代目外相リトヴィノフの一國社會主義を基調とする平和政策時代に移つた。リトヴィノフ外相在任の十年間、最初の四、五年は五ヶ年計劃協力のため、表裏ともに平和一枚看板で押し通したが、その後半に入つて、いはゆる「敵の敵利用」政策に轉換し、資本主義間の紛争渦中に割込む方針をとつた。次いでモロトフ彼に代つて四代目外相となるに及びいよ／＼この政策の推進に力を入れ、最後に英佛米と同盟して、「日獨伊と戦ひ」、「敵の敵」利用政策の上において、大なる成功をなし遂げた。

## 六 亂れ飛ぶ病氣説

日ソ中立條約の締結に際して、特に世人の注目をひいたことが一つある。それはこの交渉に當つて、終始スターリン自ら首相兼外相であるかの如く、會議に出席し、これを主宰したことである。それまでのスターリンは、「自分は黨書記長であつて、政府の當局者でない」といふ立前から、なるべく外交の表面に立たない方針をとつてゐた。勿論外交指導の實権はしつかと握つてゐたことは、いふまでもないが、いつも樂屋裏にあつて、リトヴィノフやモロトフを舞臺に立たせてゐた。従つて外國使臣には、めつたに會はなかつた。列國の大公使中、時々スターリンに會ふたのは、英國

のクリップス（現英國閣僚）であるが、それも恐らく大使としてマなく、英國労働黨首領としてのクリップスに面接したものらしい。さればわが歴代の駐ソ大使は、スターリンとの會見に成功したものがない。黨書記長專任時代のスターリンと會ひ且つ語つたもの、最初が本文の記者で二人目が久原房之助、三人目が後藤新平伯である。久原氏のスターリン訪問は、私より一年おくれて一九二六年の夏のこと、時のわが田中首相の「極東民主地帯の設定案」を持ち込んだのであつて、スターリンもこの提案には相當驚ろいたことであらう。後藤伯は日ソ國交調整の私案を提示し、その結果漁業交渉に相當寄與したことは、衆知のことである。私は勿論新聞記者としてスターリンを訪問し久原氏と後藤伯は半官半民、いはゆる「私設大使」の資格で訪露したのである。當時のスターリンは、日本の大使を接見するのは、首相もしくは外相の役目であるとなし、本文の記者や、久原氏、後藤伯の如き「私設大使」に會ふことが、自分の擔當ときめてゐたらしいのである。然るに日ソ中立條約締結の交渉に際しては最初からスターリンはわが松岡外相との折衝の矢面に立ち、會議に列席する、調印に立會ふ、成立記念の祝宴にはスターリン自ら主人役をつとめる、松岡外相のモスクワ出發に當り、モロトフと相携へて、驛頭に見送る……といった有様で、すつかり樂屋裏から舞臺面に踊り出た。

その後、獨ソ不可侵條約の交渉の際も、同じ場面がくり返された。即ちリップントロップ獨外相相手の折衝に、スターリン自ら乗り出した。この時もスターリンが外相、モロトフが次官といつ

たかたちであつた。しかし折角スターリン自ら乗出して締結しあれば世間を騒がせた獨ソ不可侵條約も、二年経つたかたゝぬ中に、効力が怪しくなり、やがて獨ソ關係緊迫を告げると同時に、今度は本格的にスターリン自ら首相兼國防相として堂々と舞臺の上に立つた。そこで今度は首相としていやでもおうでも職業上外國使臣に會はなければならぬことになつたわけであるが、しかしその後もスターリンは大公使側からの一方的要請だけでは中々會はうとしない。わが佐藤大使の如き、在任數年間、屢々本國政府の訓令によつて、スターリン首相訪問を試みたが、つひに一度も會見することが出来なかつた。ソ聯側から見ても、必要であり、有利であり、またやむを得ないと考へた場合勿論進んで列國の大公使を接見するはいふまでもなく、自らテヘランやヤルタまで出かけて、米英巨頭とも會商を重ねた。こうなつて來るとスターリン首相は中々多忙である。いはゆる「外國の私設大使」などに會ふ暇がもうあるまい……と考へられるのであるが、しかしこの方は何としてもスターリンの得意とするところで時々多忙中の一閑を割いて、外國の新聞記者に會ふ。彼のインタヴューはいつも何か世界に向つて放送しよう、宣傳しようといふ機會をとらへるのであつて、時に大きな反響を呼びおこすことがある。スターリンは特に自分の病氣説を打消さうといふ場合に、まことに巧みに外國記者との會見を利用する。

スターリンは毎年一度か二度、休暇をとつてコーカサスの黒海沿岸、風光明眉で有名なガールイ療養所に、かくれてしまふ。スターリンがモスクワから姿を消した。いつも出席する筈の何々重

要會議にスターリンが顔を見せない。スターリンは病気で出られぬのだらう。てつきり、スターリン病む」ときめてしまふ。さかんにデマが飛ぶ、全世界にわたつてスターリン重態説が傳へられる。瑞典の癌専門の名醫がモスクワに招致された。スターリンの病氣は癌に相違ない。もう助からぬ。重態である……つひに病死説まで傳はるといふ騒ぎとなつた。しかしそうした病氣説、重態説、病死説が喧傳されても、クレムリンでは決してこれを打消そうとしたことがない。タッサ通信社は否定もしなければ肯定もしない。流言蜚語を擴がるまゝにまかせておく。それは何の爲めであらう。噂さが噂を生む。スターリンがその病氣説を打消さないのは、魂膽のあることだ……といふ揣摩説がもちあがつて来る。あるものは、これは對内策である、即ちスターリン病むと聞いて、反對派は頭を擡げるだらう、トロツキストは床下から出て来るだらう、それまで打消さずにおけ……といふのだといふ。またあるものは、これは對外策である、即ちスターリン重態説は米英でどんな反響を呼びおこすだらう。世界の顔色を伺つて見よう……といふのである。こうした揣摩臆測が、どこまで當つてゐるかは、別問題として、兎に角時間的に見て、もう頭を擡げたトロツキストにそれ／＼ゲ・ベ・ウが烙印をマークし終つた。世界の顔色も大體見届けた……とおぼしき頃、スターリンはガーグルイの休養を終つて、モスクワに歸つて来る。歸るや否や彼は先づ外國記者へ會ふ。外國記者は「元氣なスターリンと會見した」ことを通信する。この報道が全世界に傳はつて、つひ昨日までまことしとやかに喧傳された「スターリン重態説」がバタリとやんでしまふ。

一九四七年の秋は、特に「スターリン病氣説」がくり返し廣く傳へられたが、例によつて休暇を終つてモスクワに歸來したスターリンは、ルーズヴェルト前大統領の次男エリオット夫妻を米誌ルックの代表としてモスクワに招致し、面白い政治インタビューを與へた。一九四八年の春は、前記瑞典の癌専門醫のモスクワ飛來で、病氣説まで傳へられるに至つたところへ、スターリンが颯爽としてモスクワにあらはれ、クレムリンにポーランド閣僚を招いて盛宴を張つて世人をあつといわせた。クレムリンの大奥で御本人のスターリンはまたしても自分の病氣説で全世界が騒いだことに微笑をもらしたことであらう。



## 第十五章 マルキシズムの修正

### 一 廻れ、右！

ボリシエウイキーのリーダーは、遠いさきを見透す強いセンスをもたなければならぬ。先見の明は、領袖格のボリシエウイキーにとつて、不可欠の資格の一つとされてゐる。レーニンはこの點において、特に、巨頭間一頭角を抽でてゐた。ブレスト・リトウフスクにせよ、新經濟政策にせよ、對外緩衝政策にせよ、レーニンの政策は一つとして、遠いさきを見透うしの上に立案されたものならざるはない。

ヒットラーの登場以來、歐洲は俄かに動搖を始めた。スターリンは遠からず歐洲に戦亂がおこるであらうといふはつきりした見透うしをつけた。然らば「戦争來」を見越して彼は如何なる政策をたてたか。

戦争は不可避となつて來た。そして一度戦争がおればソ聯もその渦中にまき込まれるであらう敵はいづこ？ ドイツ軍であるかも知れぬ。獨軍相手の戦争は、内亂當時のデニキン軍や、コルチヤク軍相手とは大分趣きが違ふ。莫大な犠牲を必要とする。幾百萬、幾千萬の死傷を覺悟しなければならぬ。

ばならぬ。そうした大戦争を、共產主義や、國際革命を旗印にしてやりのけ得るだらうか。マルキシズムの爲めに戦へ、世界革命のために生命を捧げよ……といったところで、ロシアのムジークは動かぬかも知れぬ。ロシア人をして犠牲を惜しまざらしむもの、たゞ一つ祖國愛あるのみ。祖國を守れ、祖國の爲めに戦へ、生命を投げ出せ……といふ標榜の下にこそ、始めてロシア人は奮起するのである。如何なる水火の危険にも敢然としてぶつかつて行くのである……こうした結論に到達したスターリンは、ソヴェート巨舟の舵を、斷然左から右へ、思ひ切つて、とりかへることゝした。こうした急角度の舵のとりかへは、スターリンの最も得意とするところである。彼は政策のために、イデオロギーの變革さへ、平氣でやつてのける。曾て左翼のトロツキー打倒のために、自ら右へ轉換し、次いで右翼のブハーリン、ルイコフ等をたゞかんが爲めに、逆に「廻れ左」を執行したスターリンのことである。戦争不可避といふ大きな危局を前にしてのスターリンの舵のとりかへが「百八十度の急轉換」となつたのも、少しも驚くに足らないとしなければならぬ。

百八十度の急轉換！ それは實に、共產主義、ソヴェート革命、コミンテルン……等々の「赤い看板」をひきおろして、俄かに國家主義へ、愛國主義へ、英雄崇拜主義へ、宗教尊重へ……の大轉換である。マルキシズムの大修正である、レーニニズムの大改訂に外ならぬのである。

## 二 鳴り物入りの轉換

スターリンはその政策の轉換毎に、必ず藝術を、文學を、演劇を、映畫を利用することを忘れない。藝術を利用して、前觸れの宣傳を行ふ。そして知らず知らずの間に、ソ聯國民を新政策の方向へ導いて行く。それがスターリンの最も得意とするところであり、また實際スターリンほど、こうした點で、藝術の力を高く評價し、またスターリンほど、藝術を巧みに利用して來た政治家は他にないであらう。

スターリンの政策轉換には、いつもこうした藝術的宣傳の前觸れが先行する。鳴り物入りの政策轉換である。小説や脚本を読み、また映畫や演劇などを見てゐる間に往々にしてスターリン政策の重大な轉換につき當ることがある。

戦争來を見透うしての大轉換「廻れ右」の前觸れをつとめたのは、文豪アレクセイ・トルストイである。彼の傑作「ピョートル一世」である。

本文の記者は、今次の大戦直前の歐洲に滞在すること二年餘に及んだが、その間ヨーロッパの各地で、一つの大きなソヴェート映畫を見た。それは右の「ピョートル一世」を映畫にしたものである。

文豪アレクセイ・トルストイの傑作「ピョートル一世」を脚本として映畫化したこのソウ・キノ

(ソヴェート映畫トラスト)の力作は、ソヴェート政府が莫大の補助金を與へ、ピョートル一世に扮したシモノフ、皇太子アレクセイの役をつとめたチエルカーソフ等々一流どころの俳優を動員して製作した大作だけに、藝術眼から観ても、たいした出来栄であるが、しかも本文の記者が、何度見ても見あきず、とうとう十數回もくり返し、同じ一つの映畫を観覽したのは、何故かといへば、それは主としてこの映畫が、例によつてスターリン政策轉換の先行宣傳であつたからである。映畫「ピョートル一世」を観てゐると、スターリンの新指向がはつきり畫面にあらはれて來るからであつたのである。

ソ聯の映畫の多くは、宣傳を目的としてゐる。映畫「ピョートル一世」にもはつきりした宣傳目標がなくてはならぬ。この映畫において、本文の記者の最も深く興味を感じた點は、その宣傳目標がどこにあるかといふところにあつた。然らば、映畫「ピョートル一世」に課せられた宣傳使命は何か。それは要するに、ピョートル一世は「玉冠を戴くポリシエウイキーであつた」といふところへ人心をひきつけようといふにあつたとしなければならぬ。

畫面にあらはれて來るピョートル一世は、ツァーである、皇帝である。とはいつても、その行動その政策は、すべてポリシエウイキーそのまゝである。過激派丸出しである。帝制ロシアは政教一致の國で、ツァーは同時に宗教の王であつた。然るに畫面に出て來るピョートル一世は宗教が大きいのみである。さかんに僧侶を壓迫する。寺院の鐘樓から、鐘を引づり下ろして、それで大砲鑄造を

命する。ピョートル一世はこうした過激派ボリシエウイキーであつたといふのである。ピョートル一世はまた頻りに貴族をいぢめつける。生れて剃つたことのないといふある貴族の長髯を「時代おくれの悪習だ！」と叫び乍ら、彼自ら大きな鉄をもつて剃りおとしてしまふ。老貴族は長髯との別れを惜しんで、泣き崩れるという場面が出て来る。本もの、ボリシエウイキーが跣で逃げなければならぬほどの過激振りである。ピョートル一世はロシアはいつまでも農業國であつてはならぬ。工業國に建て直さなければならぬ。まるで五ヶ年計畫をやり出した當時のスターリンと同じようなことをいつて、自らオランダに留學し、造船術を學び、歸つて來ると、自ら鍛冶場にははれ、大鐵槌をふりあげて、赤く焼かれた鐵を打つ……そうした場面が、次ぎから次ぎへと出て來る。それを見てみると、たゞもう「過激派ツアー」を目のあたりに観てゐるような氣持になつてしまふ。かくして映畫「ピョートル一世」は、結局ピョートル大帝は、王冠を戴くボリシエウイキーだ」ということになつてしまつた。然らば「王冠を戴かざるツアー」は誰か？ という疑問が、自から誰しもの胸に起つて來る。藝術の利用も、ここに至つて、堂に入つたものかなと驚歎せざるを得ないわけである。

### 三 歴史の再検討

大戦不可避を見透うしての、スターリンのイデオロギー變革、的確にいへば「國際主義から國家

主義へ」レーニンからピョートル大帝へ」の大轉換は、一九三七年秋出版された「全聯邦共產黨史」の刊行によつて、廻りくどくはあるが、大體理論づけられ、大仕掛、鳴り物入りで、全國に宣傳された。

「全聯邦共產黨史」はスターリン自らその監修に當り、秘書マレンコフ専ら執筆し、編纂したものだといはれ、スターリンはこれによつて、斷乎マルキシズムに大修正、レーニニズムに大改訂を加へた。新黨史刊行の目的は、黨の歴史そのものでなく、スターリン政權のイデオロギーの變革を理論づけようとしたものである。果然同史の發刊に引き續いて、黨本部の宣傳部が、言論部を合併し、その宣傳機構を思ひ切つて擴大した。そして擴大された新言論部長に、スターリン門下の逸材ジュダノフがあげられ、彼の采配の下に、修正マルキシズム、改訂レーニニズムの大宣傳、例によつて、藝術利用の鳴り物入り大宣傳が始まつた。

スターリンの新理論を検討して見ると、マルキシズム、レーニニズムの旗印を、まだ引きおろすに至つてゐない。しかし、

その後の歴史は、マルクスやエンゲルスの聰明さをもつてしても、なほ且つ豫見し得なかつた幾多の出來事に逢着した。こうした豫期されなかつた出來事の續出に會して、原理修正のやむを得ない必要を生じたのは、當然のことである。眞のマルキシズム、レーニニズムは、徒らに文字に拘泥することなく、現實の上に立つて、臨機應變、時流に適應して、これを補足し、修正し、

それに従つて進み、無暗みに逆行しないことにある。  
といふスターリン一流の「リアリズム共産主義」に立脚してマルキシズム、レーニニズムに大斧鉞を加へ、根本的な修正を行つたのである。

#### 四 英雄復活

スターリンのこうした「レーニンからビョートル」への轉向を裏づけるための、もう一つのこと  
は、シエスタコフ編修の「ロシア小史」である。一九三八年秋、前記「共産黨史」に引きついで「ロシア小史」が刊行された。

十月革命の初年、レーニンはその頃の教育人民委員代理（次官）ボクロフスキー博士に命じて、  
帝政時代のロシア史を根底から覆へし新たに「赤色ロシア史」を編纂せしめた。ボクロフスキー博  
士は、有名なミリュコフと並んで、史學の大家として知られ、本文の記者は一九二〇年彼と親し  
く語つたことがある。ボ博士のロシア史大改編の苦心談は今なほ私の記憶にのこつてゐる。

ボクロフスキー博士の手によつて改編されたロシア史は、マルキシズムの唯物史観に立脚して、  
人類の歴史は、すべて經濟の原則によつて發展して來たものであるという建前から人間の個性とい  
ふものを、すつかり滅却し、あらゆる英雄を抹殺してしまつた。即ち極端な英雄抹殺論を徹底した  
ものであつた。然るにシエスタコフの新著「ロシア小史」によると、人類の歴史は決して經濟の

原則だけで出來たものでない。人間の個性の力も、重大な役割を演じて來た。ロシアの大をなした  
のは、歴代のツァー及びツァーを圍繞してゐた大官や將軍の力によつたものである。ビョートル大  
帝は大ロシア建設の偉人である。ナポレオン軍を破つたクツーゾフ元帥は救國の恩人である。かく  
して昨日まで目の敵にしてゐた歴代のツァー、大官、將軍も、今日は偉人、英雄となつた。英雄抹  
殺から英雄崇拜へ……まさに百八十度の轉向といはざるを得ない。

何しろレーニンからビョートルへ、國際主義から國家主義へ、英雄抹殺から英雄崇拜へ……は、  
あまりにも急角度の轉向である。あまりにも大きな矛盾である。こうした轉向のカーブがあまりに  
急で、國家主義と國際主義とがすつかり混亂してしまひ、一時國際主義を唱へるものはトロツキス  
トだといつてはき違へるものさへ出て來た。そこで純心な書物の上だけでマルキシズムを學んで來  
た青年共産黨員（コムソモール）が、イデオロギーの矛盾になやみぬいた揚句、スターリンに「國  
際革命主義は取止めになつたのか」といふ卒直な質問を出した。スターリンはこれに對し、

ソ聯は依然共産主義を奉じ、國際革命主義に忠實なるものである。ソ聯は世界革命の城塞であ  
り、社會主義の祖國である。これを守り、いつでも資本主義列國の攻撃に對して戦ふ覺悟を要す  
る。

との説明を與へたといふことである。